



写真1 I - 8 平安京左京六条四坊跡 万寿禅寺池跡



写真2 I -27 上里遺跡 縄文時代



写真3 I-20 西京極遺跡 弥生時代



写真4 I-42 大藪遺跡 弥生時代竪穴住居

平成 18 年度

財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報

2009

序

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積し、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの貴重な文化財もいまなお多く地下に埋蔵しています。

昭和 51 年秋、古都京都で近代化が進む過程で、市内の整備・再開発にともなう埋蔵文化財の破壊や消滅を未然に防ぎ、遺跡や遺物を調査し保存を図るために、わたしどもの財団法人京都市埋蔵文化財研究所が設立されました。以来、当研究所は平安京や周辺の多くの遺跡について発掘調査を実施し、多くの調査成果をあげてきており、それらを公表し普及・啓発するための事業もあわせて進めてまいりました。

当研究所はその年度に実施しました諸事業を報告、紹介するため、毎年、年報を発行しております。この年報を一覧いただき、当研究所の活動についてご理解を深める一助にいただければと存じます。

本年報の内容につきましては、はじめに市内で実施しました発掘調査事業の概要と試掘や立会調査の成果と概要を報告、次に保存処理や復元彩色の内容を紹介し、そして普及・啓発事業等を報告しています。

なお、発掘調査につきましては、本年報とは別に個々の遺跡の発掘調査報告書を刊行しておりますが、本年報ではその年度に実施しました発掘調査の全体を一覧していただくために、それらの内容を要約し紹介しております。

本年報についてご意見、ご批判をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

この年度の調査を実施するにあたり、原因者の方々をはじめとし、関連する京都市の諸機関の各位に多大なご協力をたまわりました、ここに記し、厚くお礼申し上げます。

平成 21 年 1 月

財団法人京都市埋蔵文化財研究所

所長 川上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成 18 年度に実施した事業の年次報告である。発掘調査と試掘・立会調査（第 1 章）、資料整理（第 2 章）、普及啓発事業等報告（第 3 章）とした。
- 2 本書中に示した方位・座標値は、日本測地系（改正前）平面直角座標系VIによった。ただし座標値は単位（m）を省略している。座標および水準は、京都市遺跡発掘調査基準点と京都市水準点を使用した。
- 3 本書中の地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の都市計画基本図（縮尺：1/2,500）、市街図（縮尺：1/30,000）を複製して調整した。
- 4 長岡京の条坊呼称は、新呼称に準拠した。
- 5 平安時代以降の土器編年の型式は、当研究所『研究紀要』第 3 号の「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」に従った。なお、「平安京 I～V 期」、「京都 VI～XIV 期」を「京都 I～XIV 期」で統一した。
- 6 各報告の調査位置図の方位は北を上配置した。黒塗り部分が、調査対象地である。縮尺は、1/5,000 ないしは 1/10,000 とした。
- 7 平成 18 年度調査のうち、文化庁国庫補助事業による発掘調査は、『京都市内遺跡発掘調査報告』に、同じく市内遺跡立会調査は『京都市内遺跡立会調査報告』（いずれも京都市文化市民局発刊）に報告されている。
- 8 掲載写真は一部を除き村井伸也・幸明綾子が撮影した。
- 9 本書の執筆は、報告書として発刊されているものについてはその要約を資料課で行い、その他のものについては文末に記した担当者が行った。
- 10 本書の作成にあたっては、編集・調整を資料課が行った。

目次

第1章 調査報告

I 平成18年度の発掘調査概要	1
1 平安宮西雅院跡	6
2 平安宮正親司跡	7
3 平安京左京三条三坊跡	8
4 平安京左京四条一坊跡1	9
5 平安京左京四条一坊跡2	10
6 平安京左京四条三坊跡	11
7 平安京左京四条四坊跡	12
8 平安京左京六条四坊跡	13
9 平安京左京八条二坊跡	14
10 平安京左京八条四坊跡	15
11 平安京右京北辺三坊跡	16
12 平安京右京一条二坊跡	17
13 平安京右京一条三坊跡	18
14 平安京右京三条一坊跡	19
15 平安京右京三条二坊跡1	20
16 平安京右京三条二坊跡2	21
17 平安京跡・御土居跡	22
18 平安京右京五条三坊跡	23
19 平安京右京六条四坊跡・西京極遺跡1	24
20 平安京右京六条四坊跡・西京極遺跡2	25
21 平安京右京六条二坊跡	26
22 平安京西寺跡・唐橋遺跡	27
23 長岡京左京一条四坊跡	28
24 長岡京左京三条四坊跡	29
25 長岡京右京一条四坊跡	30
26 長岡京右京二条三坊跡、上里遺跡1	31
27 長岡京右京二条三坊跡、上里遺跡2	32
28 長岡京跡・淀城跡1	33
29 長岡京跡・淀城跡2	34
30 北白川廃寺	35
31 山科本願寺南殿跡	36
32 中臣遺跡1	37
33 中臣遺跡2	38
34 伏見城跡	39
35 鳥羽離宮跡	40

36 常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡	41
37 史跡大覚寺御所跡	42
38 史跡・名勝 嵐山	43
39 寺戸大塚古墳	44
40 福西古墳群	45
41 中久世遺跡・大藪遺跡	46
42 大藪遺跡	47
43 特別史跡・特別名勝醍醐寺三宝院庭園	48
44 平安宮朝堂院跡	49

II 平成18年度の試掘・立会・確認・分布調査の概要

	50
1 平安京跡・旧二条城跡	51
2 史跡本願寺境内1	55
3 史跡本願寺境内2	62
4 名勝滴翠園	66
5 相国寺旧境内他遺跡	68
6 京都市指定名勝 知恩院方丈庭園	76
7 嵯峨折戸町遺跡・上之段町遺跡	80
8 史跡・名勝 嵐山	83

第2章 資料整理

I 保存処理	89
1 出土木製品の受入れ状況	89
2 木製品保存処理	89
3 金属製品の受入れと保存処理	89
4 ガラスの比重測定	89
5 骨の受入れと保存処理	89
6 遺構・遺物の取上げ	89
7 土サンプルの洗浄・選別	89
8 修羅の保存処理	90
9 樹種同定	90
10 受託事業	90
II 復元彩色	91

第3章 普及啓発事業等報告

I	普及啓発事業報告	92
1	京都発掘30年事業の開催	92
2	現地説明会の開催他	92
3	報告書の刊行	92
4	「リーフレット京都」(No. 207～No. 218)の発行	93
5	全国埋蔵文化財法人連絡協議会への参加	93
6	その他研究会等への派遣	94
7	講師等の派遣	94
8	ホームページアクセス件数	94
II	京都市考古資料館状況	96
1	京都市公の施設の指定管理者への指定	96
2	特別展示の実施	96
3	小・中学生夏期教室の開催	96
4	文化財講座の開催	96
5	情報コーナーにおける普及啓発	96
6	考古資料の貸出	98
7	博物館学芸員課程実習生の受入れ	98
8	生き方探究・チャレンジ体験の受入れ	98
9	教育機関の学外授業等の受入れ	99
10	その他機関への協力等	99
11	関係機関等への協力	99
12	入館状況	99
III	組織構成	101

図目次

カラー図版1

写真1 I-8 平安京左京六条四坊跡 万寿禅寺池跡

写真2 I-27 上里遺跡 縄文時代

カラー図版2

写真3 I-20 西京極遺跡 弥生時代

写真4 I-42 大藪遺跡 弥生時代竪穴住居

図1 調査地点位置図 5

図 2	平安宮中務省跡調査位置図	・・・・・・・・・・	6
図 3	” 遺構平面図	・・・・・・・・・・	6
図 4	平安宮正親司跡調査位置図	・・・・・・・・・・	7
図 5	” 調査区配置図	・・・・・・・・・・	7
図 6	” 遺構平面図	・・・・・・・・・・	7
図 7	平安京左京三条三坊跡調査位置図	・・・・・・・・・・	8
図 8	” 1区・2区遺構平面図	・・・・・・・・・・	8
図 9	” 2区第2面全景（北東より）	・・・・・・・・・・	8
図 10	平安京左京四条一坊跡1調査位置図	・・・・・・・・・・	9
図 11	” 第2面遺構平面図	・・・・・・・・・・	9
図 12	平安京左京四条一坊跡2調査位置図	・・・・・・・・・・	10
図 13	” 第3面遺構平面図	・・・・・・・・・・	10
図 14	平安京左京四条三坊跡調査位置図	・・・・・・・・・・	11
図 15	” 2区第3面（弥生・平安時代）全景（東より）		11
図 16	” 弥生・平安時代遺構平面図	・・・・・・・・・・	11
図 17	平安京左京四条四坊跡調査位置図	・・・・・・・・・・	12
図 18	” 第2面遺構平面図	・・・・・・・・・・	12
図 19	平安京左京六条四坊跡調査位置図	・・・・・・・・・・	13
図 20	” I・III・IV期池跡平面図	・・・・・・・・・・	13
図 21	平安京左京八条二坊跡調査位置図	・・・・・・・・・・	14
図 22	” 調査区配置図	・・・・・・・・・・	14
図 23	” B区平面図	・・・・・・・・・・	14
図 24	平安京左京八条四坊跡調査位置図	・・・・・・・・・・	15
図 25	” 調査区配置図	・・・・・・・・・・	15
図 26	” A 1・2区遺構平面図（平安時代）	・・・・・・・・・・	15
図 27	平安京右京北辺三坊跡調査位置図	・・・・・・・・・・	16
図 28	” 第2面遺構平面図	・・・・・・・・・・	16
図 29	平安京右京一条二坊跡調査位置図	・・・・・・・・・・	17
図 30	” 遺構平面図	・・・・・・・・・・	17
図 31	平安京右京一条三坊跡調査位置図	・・・・・・・・・・	18
図 32	” 遺構平面図	・・・・・・・・・・	18
図 33	平安京右京三条一坊跡調査位置図	・・・・・・・・・・	19
図 34	” 第2面遺構平面図	・・・・・・・・・・	19
図 35	平安京右京三条二坊跡1調査位置図	・・・・・・・・・・	20
図 36	” 第2面遺構平面図	・・・・・・・・・・	20
図 37	平安京右京三条二坊跡2調査位置図	・・・・・・・・・・	21
図 38	” 遺構平面図	・・・・・・・・・・	21
図 39	平安京跡・御土居跡右京四条一坊区域調査位置図	・・・・・・・・	22
図 40	” 右京五条一坊区域調査位置図	・・・・・・・・	22
図 41	” 左京八条一坊区域調査位置図	・・・・・・・・	22

図 42	平安京右京五条三坊跡調査位置図	23
図 43	” 弥生時代遺構平面図	23
図 44	平安京右京六条四坊跡・西京極遺跡 1 調査位置図	24
図 45	” 古墳時代遺構変遷図	24
図 46	” 奈良～平安時代遺構変遷図	24
図 47	平安京右京六条四坊跡・西京極遺跡 2 調査位置図	25
図 48	” 弥生時代遺構平面図	25
図 49	” 奈良時代遺構平面図	25
図 50	平安京右京六条二坊跡調査位置図	26
図 51	” 遺構平面図	26
図 52	平安京西寺跡・唐橋遺跡調査位置図	27
図 53	” 遺構平面図	27
図 54	長岡京左京一条四坊跡調査位置図	28
図 55	” 遺構実測図	28
図 56	長岡京左京三条四坊跡調査位置図	29
図 57	” 遺構平面図	29
図 58	長岡京右京一条四坊跡調査位置図	30
図 59	” 1 区遺構実測図（長岡京期）	30
図 60	” 2 区遺構平面図	30
図 61	長岡京右京二条三坊跡・上里遺跡 1 調査位置図	31
図 62	” 遺構配置図（古墳時代）	31
図 63	” B・C 区全景（長岡京期、西より）	31
図 64	” 遺構平面図（長岡京期）	31
図 65	長岡京右京二条三坊跡・上里遺跡 2 調査位置図	32
図 66	” 遺構平面図（縄文時代）	32
図 67	長岡京跡・淀城跡 1 調査位置図	33
図 68	” 淀城下町復元図と調査地	33
図 69	” 土蔵跡平面図	33
図 70	長岡京跡・淀城跡 2 調査位置図	34
図 71	” 5 次調査平面図（江戸時代初頭）	34
図 72	” 淀城下町復元図と 6 次調査区	34
図 73	北白川廃寺調査位置図	35
図 74	” 遺構実測図	35
図 75	山科本願寺南殿跡調査位置図	36
図 76	” 遺構平面図	36
図 77	中臣遺跡 1 調査位置図	37
図 78	” 遺構平面図	37
図 79	中臣遺跡 2 調査位置図	38
図 80	” 遺構平面図	38
図 81	伏見城跡調査位置図	39
図 82	” 遺構平面図（桃山時代）	39

図 83	”	遺構平面図（江戸時代）	39
図 84		鳥羽離宮跡調査位置図	40
図 85	”	遺構平面図	40
図 86	”	勝光明院阿弥陀堂跡	40
図 87		常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡調査位置図	41
図 88	”	調査状況	41
図 89	”	遺構平面図（3・1区）	41
図 90		史跡大覚寺御所跡調査位置図	42
図 91	”	遺構平面図	42
図 92	”	水槽部分調査全景（北東より）	42
図 93		史跡・名勝 嵐山調査位置図	43
図 94	”	遺構平面図	43
図 95		寺戸大塚古墳調査位置図	44
図 96	”	調査区配置図	44
図 97	”	断面模式図	44
図 98		福西古墳群調査位置図	45
図 99	”	遺構平面図	45
図 100		中久世遺跡・大藪遺跡調査位置図	46
図 101	”	調査地全景（西より）	46
図 102	”	遺構平面図	46
図 103		大藪遺跡調査位置図	47
図 104	”	竪穴住居平面図	47
図 105		特別史跡・特別名勝醍醐寺三宝院庭園調査位置図	48
図 106	”	トレンチ配置図	48
図 107		平安宮朝堂院跡調査位置図	49
図 108	”	遺構平面図	49
図 109	”	回廊復元図	49
図 110		平安京跡・旧二条城跡調査位置図	51
図 111	”	土層断面図 1	52
図 112	”	土層断面図 2	53
図 113		史跡本願寺境内 1 調査位置図	55
図 114	”	石垣調査前（南西より）	55
図 115	”	石垣全景（南東より）	55
図 116	”	石垣位置図	56
図 117	”	石垣平・立面図	56
図 118	”	石垣西面平・立面図	57
図 119	”	石垣北面平・立面図	57
図 120	”	石垣南面平・立面図	57
図 121	”	立石平・立面図	57
図 122	”	立石と石垣（北西より）	57
図 123	”	石垣断割 B 断面（南東より）	57

図 124	”	試掘 1 区断面（北西より）	57
図 125	”	試掘 2 区（南東より）	57
図 126	”	石垣断割 A 断面図	58
図 127	”	石垣断割 B 断面図	58
図 128	”	建物部分トレンチ配置図	58
図 129	”	1 区実測図	59
図 130	”	2 区実測図	59
図 131	”	3 区（東より）	59
図 132	”	3 区深掘断面（北西より）	59
図 133	”	3 区実測図	60
図 134	”	境内古図と石垣推定地	61
図 135		史跡本願寺境内 2 調査位置図	62
図 136	”	調査平面図	63
図 137	”	断面図	63
図 138		名勝 滴翠園調査位置図	64
図 139	”	調査区配置図	65
図 140	”	枯れ流れに架かる石橋、澆花亭、擲盃橋実測図	66
図 141	”	⑨踏花塙橋の礎石実測図	67
図 142	”	⑩胡蝶亭南の土管実測図	67
図 143		相国寺旧境内他遺跡調査位置図	68
図 144	”	断面位置図	69
図 145	”	断面図 1	71
図 146	”	断面図 2	72
図 147	”	断面図 3	73
図 148	”	断面図 4	74
図 149	”	断面図 5	75
図 150		京都市指定名勝 知恩院方丈庭園調査位置図	76
図 151	”	調査配置図	76
図 152	”	調査前状況（北より）	77
図 153	”	調査状況（北西より）	77
図 154	”	遺構実測図	77
図 155	”	断面図	78
図 156	”	1 トレンチ景石出土状況（北西より）	79
図 157	”	1 トレンチ拡張全景（西より）	79
図 158	”	2 トレンチ州浜出土状況（南東より）	79
図 159		嵯峨折戸町遺跡・上之段町遺跡調査位置図	80
図 160	”	中又踏切区調査地点	80
図 161	”	東清水踏切区調査地点	80
図 162	”	断面図 1	81
図 163	”	断面図 2	81
図 164	”	断面図 3	81

図 165	”	断面図 4	・・・・・・・・・・	82
図 166	”	断面図 5	・・・・・・・・・・	82
図 167	史跡・名勝	嵐山調査位置図	・・・・・・・・・・	83
図 168	”	調査区配置図	・・・・・・・・・・	83
図 169	”	断面図	・・・・・・・・・・	83
図 170	”	1区遺構実測図（第1面）	・・・・・・・・・・	84
図 171	”	1区遺構実測図（第2面）	・・・・・・・・・・	84
図 172	”	溝状集積遺構 50・土坑 53 実測図	・・・・・・・・・・	84
図 173	”	2区実測図（第1面）	・・・・・・・・・・	85
図 174	”	遺物実測図	・・・・・・・・・・	86
図 175	05FD-FP001 土坑 293・317 数珠（唐木）樹種断面写真			90
図 176	大甕の石膏復元		・・・・・・・・・・	91
図 177	大甕の彩色復元		・・・・・・・・・・	91

表 目 次

表 1	平成 18 年度調査一覧表	・・・・・・・・・・	2	
表 2	その他契約一覧表	・・・・・・・・・・	4	
表 3	平安京跡・旧二条城跡検出遺構一覧表	・・・・・・・・・・	51	
表 4	”	遺物出土地点一覧表	・・・・・・・・・・	54
表 5	相国寺旧境内他遺跡検出遺構一覧表	・・・・・・・・・・	69	
表 6	”	出土遺物一覧表	・・・・・・・・・・	70
表 7	復元彩色一覧表	・・・・・・・・・・	91	
表 8	講師等派遣一覧表	・・・・・・・・・・	95	
表 9	文化財講座一覧表	・・・・・・・・・・	97	
表 10	新規貸出一覧表	・・・・・・・・・・	97	
表 11	博物館実習受入れ一覧表	・・・・・・・・・・	98	
表 12	市内中学生チャレンジ体験受入れ一覧表	・・・・・・・・・・	98	
表 13	教育機関の学外授業等の受入れ一覧表	・・・・・・・・・・	99	
表 14	その他機関への協力等一覧表	・・・・・・・・・・	99	
表 15	関係機関等への協力一覧表	・・・・・・・・・・	100	
表 16	入館者数一覧表	・・・・・・・・・・	100	
表 17	役員・評議員名簿	・・・・・・・・・・	101	
表 18	組織構成表	・・・・・・・・・・	101	

第1章 調査報告

第1章は、発掘調査（Ⅰ）と試掘・立会・確認調査（Ⅱ）とした。

平安宮・平安京の調査位置図には、現段階での復元推定線を入れ利用の便をはかった。

I 平成18年度の発掘調査概要

平成18年度に実施した発掘調査件数は、表1に示した通り49件であった。本書では、これに継続調査として発掘調査の扱いで報告してきた特別史跡・特別名勝醍醐寺三宝院庭園整備に伴う試掘・立会調査（Ⅰ-43）および平成17年度分の未掲載調査「平安宮朝堂院」（Ⅰ-44）を含めた44件の概要を掲載した。

今年度の調査は、市内各所にわたり、縄文時代から江戸時代まで多岐にわたる多くの調査成果を得ることができたのが特徴である。以下、主な調査を紹介したい。

平安宮跡の調査（Ⅰ-2）では、正親司の占地中央で調査を実施した。溝および柵が東西南北に見られ、占地内を大きく4分割していたことがうかがわれる。土坑から出土した遺物は、平安時代前期のものを多く含み、同司が平安宮造営当初から機能していたことは明らかである。

平安京跡の調査は、17件を掲載した。

平安京左京四条一坊では、隣接して2箇所を調査を実施した。櫛笥小路内の調査では（Ⅰ-4）南北方向の室町時代後期の堀跡を検出し、十三町内の調査では（Ⅰ-5）平安時代前期の池跡を検出した。堀跡は、この一帯に建ち並んでいた法華寺院の構に関連する遺構とみられる。

平安京左京四条三坊の調査（Ⅰ-6）では、中世以降下京の中心地として連綿と続く一帯の様相を良好に示す資料が得られた。当地は、烏丸綾小路遺跡にもあたり、弥生時代の竪穴住居や方形周溝墓も検出した。

平安京左京六条四坊跡の調査（Ⅰ-8）では、室町時代には京都五山の位置にあった万寿禅寺の様子が一部で

はあるが、初めて明らかとなった。今後の近辺の調査が期待される。

平安京右京五条三坊跡（Ⅰ-18）、右京六条四坊跡・西京極遺跡（Ⅰ-19・20）では、弥生時代・古墳時代・奈良時代の遺構を重複して検出した。付近に葛野郡にかかわる一連の遺跡が推定されるようになってきた。

長岡京右京一条四坊・二条三坊域の調査（Ⅰ-25～27）は、一連の街路建設に伴う調査で、長岡京に関連する遺構や縄文時代晩期の集落や墓などの検出があり、これまでの一帯の遺跡の認識を一変させる大きな調査成果を得ることができた。

淀城跡の調査は、京阪淀駅高架工事に伴う継続調査（Ⅰ-28・29）で、江戸時代淀城関連の遺構が良好に確認できた。また、下層にはそれ以前の遺構や遺物包含層を検出することができた。

伏見城跡の調査（Ⅰ-34）は、伏見区役所の建て替えに伴う調査で、伏見の変遷を示す遺構を重複して確認できた。

常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡の調査（Ⅰ-36）は、山陰線高架に伴う継続調査で、嵯峨野一帯の遺跡の変遷を知ることのできる成果を得ることができた。

※ 報告の詳細については、研究所ホームページ（<http://www.kyoto-arc.or.jp/>）-活動内容-調査報告書（シリーズ）にpdf形式で公開しておりますのでご活用ください。

表1 平成 18年度調査一覧表(1)

契約番号	遺跡名	略記号	調査住所	内容	担当者	面積	調査期間	本書番号	備考
H18-001	京都市内遺跡	2006BB-	京都市内一円	立会	吉本、堀内		2006.04.01～		2006 国補
H18-004	長岡京右京二条三坊九・十六町・一条大路、上里遺跡	2005NG-EW003	京都市西京区上里南ノ町・長岡京市井ノ内北裏	発掘	上村・南出・モンベティ・ト田・長戸	5,478	2005.06.17～2006.06.09	I -26	2006-04
H18-005	伏見城跡	2005FD-FP001	京都市伏見区竹中町	発掘	山本、桜井、能芝妙、大立目	4,435	2005.06.03～2006.09.01	I -34	2006-27
H18-006	平安京右京五条一坊一町～四町・左京八条一坊一町跡・御土居跡	2006HK-VH004	中京区壬生高樋町・松原町	発掘	加納・東・田中	1,028	2006.08.21～2006.12.22	I -17	2006-18
H18-007	常盤仲之町遺跡・上ノ段遺跡・広隆寺境内遺跡	2005UZ-SN003	右京区太秦一ノ井町～太秦青木元町地内	発掘	吉村・東・加納	1,216	2006.01.20～2006.06.30	I -36	2006-06
H18-008	平安京跡・旧二条城跡	2005HK-GX002	京都市上京区大倉町他(烏丸通出水～丸太町)	立会	堀内・吉村		2005.12.01～2006.05.31	II -01	
H18-009	平安京右京三条二坊十四町跡	2005HK-RV001	中京区西ノ京下合町	発掘	布川	489	2006.02.10～2006.04.01	I -16	2006-01
H18-010	淀城跡・長岡京跡左京九条三坊十三町	2005NG-YE004	伏見区淀池上町地内	発掘	尾藤	116	2006.05.08～2006.06.13	I -28	2006-03
H18-011	平安京右京五条三坊十四町	2006HK-QR001	右京区西院日照町	発掘	西森・木下	768	2006.04.03～2006.06.16	I -18	2006-07
H18-012	平安京右京北辺三坊八町	2005HK-JI001	右京区花園鷹司町	発掘	津々池	220	2006.03.31～2006.05.11	I -11	2006-02
H18-015	福西古墳群(29・32号墳)	2006MK-ME001	西京区大枝東長町	発掘	菅田	249	2006.04.24～2006.05.17	I -40	2006-05
H18-016	長岡京右京一条四坊十四・十五町(右京第879次)(新)	2006NG-NS005	西京区大原野石見町地内	発掘	能芝(勉)・田中	716	2006.06.29～2006.09.11	I -25	2006-22
H18-017	長岡京右京二条三坊八・九町(新)、上里遺跡	2006NG-EW004・005	京都市西京区大原野上里南ノ町・長岡京市井ノ内北裏	発掘	上村・ト田・津々池・南出	3,329	2006.06.12～2007.03.16	I -27	2006-34
H18-018	平安京右京三条一坊六町跡	2006HK-UI020	京都市中京区西ノ京小倉町地内	発掘	布川	244	2006.07.18～2006.09.15	I -14	2006-13
H18-019	史跡・名勝 嵐山	2006UZ-KA002	右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町	発掘	小檜山	416	2006.06.05～2006.09.15	I -38	2006-09
H18-020	平安京跡・史跡本願寺境内	2006HK-WI014	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町	確認	柏田	100	2006.06.27～2006.07.13	II -02	
H18-021	史跡大覚寺御所跡	2006UZ-AA007	右京区嵯峨大沢町	発掘・立会	前田	60	2006.06.05～2007.01.25(立会) 2006.07.04～2006.07.14(発掘)	I -37	2006-35
H18-022	相国寺旧境内他遺跡	2006HK-GX003	京都市上京区今出川通烏丸通～河原町通	立会	堀内		2006.06.20～	II -05	
H18-023	平安京左京八条四坊四・五町跡	2006HK-BX001	南区東九条東山王町他地内	発掘	木下・近藤(章)・西森	1,385	2006.08.01～2006.12.22	I -10	2006-20
H18-024	中臣遺跡(83次調査)	2006RT-NK083	京都市山科区東野舞台町	発掘	菅田	400	2006.06.19～2006.07.24	I -32	2006-08
H18-025	北白川廃寺	2006KS-MA001	京都市左京区北白川上別当町	発掘	丸川	73	2006.06.19～2006.07.06	I -30	2006 国補
H18-026	平安京左京四条一坊十三町跡	2006HK-YL001	京都市中京区壬生坊城町	発掘	伊藤・近藤(章)	400	2006.07.03～2006.08.29	I -05	2006-10
H18-027	山科本願寺南殿跡	2006RT-HG011	京都市山科区伊勢宿町	発掘	平田	113	2006.06.19～2006.07.13	I -31	2006 国補
H18-031	平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡	2006HK-QS001	右京区西院月双町	発掘	柏田・菅田	495	2006.07.24～2006.09.25	I -19	2006-14
H18-032	史跡・名勝 嵐山	2006UZ-AR001	右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町	試掘	小檜山・能芝(妙)	167	2006.08.21～2006.10.05	II -08	
H18-035	平安京左京八条二坊三町跡	2006HK-BW001	下京区大宮通八条上る三丁目東側内垣ケ内町	発掘	モンベティ	48	2006.07.24～2006.08.23	I -09	2006-11
H18-036	平安京左京三条三坊九町(二条殿跡)	2006HK-GD001	中京区両替道二条下る金吹町地内	発掘	大立目	183	2006.07.21～2006.09.12	I -03	2006-15
H18-037	平安宮正親司跡	2006HK-KJ001	上京区下長者町七本松西入鳳瑞町	発掘	平田	280	2006.08.10～2006.09.15	I -02	2006-12
H18-039	嵯峨折戸町遺跡・上之段町遺跡	2006UZ-SN004	右京区太秦	立会	堀内(寛)		2006.10.04～	II -07	
H18-040-1	淀城跡・長岡京跡左京九条三坊十三町(旧) 京外(新)	2005NG-YE005	伏見区淀池上町地内	発掘	尾藤	64	2006.06.14～07.11	I -29	2006-23
H18-040-2	淀城跡・長岡京跡左京	2006NG-YE006	伏見区淀	発掘	尾藤・丸川・能芝・布川	1,350	2006.06.14～2007.02.28	I -29	2006-23
H18-041	平安京左京四条三坊十二町	2006HK-HW001	京都市下京区四条通室町東入函谷鈴町他地内	発掘	平尾	690	2006.08.28～2007.01.30	I -06	2006-26
H18-042	史跡本願寺境内・平安京跡	2007HK-WI021	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町	試掘・立会	菅田	100	2007.04.02～2008.03.13		2008
H18-042-1	平安京跡・史跡本願寺境内	2006HK-WI015	京都市下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町地内	発掘	近藤(奈)	313	2006.09.01～2006.11.30		2008
H18-042-2	史跡本願寺境内・名勝滴翠園	2006HK-WI016B	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町	発掘・立会	鈴木(久)・近藤(奈)	7	2006.09.01～2007.03.31		2008

表1 平成17年度調査一覧表(2)

H18-042-3	史跡本願寺境内	2006HK-WI016B	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町	立会・試掘	鈴木(久)・近藤(奈)		2006.09.04～2007.03.31	2008	
H18-043	長岡京跡左京一条四坊十三町	2006NG-KG001	伏見区久我本町	発掘	丸川	70	2006.09.06～2006.09.20	I -23	2006-16
H18-044	平安京跡・史跡本願寺境内	2006HK-WI017	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町地内	試掘	鈴木(久)他			II -03	
H18-045	平安京右京三条二坊十一町・西ノ京遺跡	2006HK-RW001	中京区西ノ京下合町地内	発掘	モンベティ	229	2006.10.11～2006.12.15	I -15	2006-24
H18-046	鳥羽離宮跡	2006TB-TB151	伏見区中島秋ノ山町	発掘	菅田	98	2006.10.16～2006.11.02	I -35	2006 国補
H18-050	名勝滴翠園	2006HK-WI016	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町地内	確認	鈴木(久)・近藤(奈)			II -04	
H18-051	平安京左京三条二坊十町跡	2006HK-MN002	中京区油小路通押小路下る押油小路町(元城巽中学校)	発掘	丸川・東・田中・南出・能芝(妙)・加納	3,354	2006.12.08～2008.03.10	2007	2007-17
H18-053	平安京右京一条三坊三町	2006HK-JW001	中京区西ノ京大炊御門町地内	発掘	能芝妙子	392	2006.10.12～2006.12.22	I -13	2006-21
H18-054	平安京左京四条四坊三町跡	2006HK-XZ001	京都市中京区蛸薬師東洞院東入泉正寺町	発掘	伊藤 潔	441	2006.10.20～2007.02.14	I -07	2006-28
H18-055	平安京右京六条二坊三町跡	2006HK-XH001	下京区西七条東御前田町地内	発掘	小檜山・ト田	1,160	2006.11.28～2007.03.16	I -21	2006-25
H18-057	平安京左京六条四坊三町・万寿寺跡	2006HK-WJ001	下京区間ノ町通五条下る大津町	発掘	菅田 薫	600	2006.11.28～2007.03.07	I -08	2006-29
H18-058	中久世遺跡・大藪遺跡	2006MK-HN001	南区久世大藪町	発掘	平田・能芝(勉)	390	2006.11.16～2006.12.08	I -41	2006-19
H18-059	長岡京左京三条四坊十三町・三条条間南小路・東京極大路	2006NG-KY001	伏見区久我森の宮町地内	発掘	吉村	140	2006.11.27～2006.12.08	I -24	2006-17
H18-061	特別史跡・特別名勝 醍醐寺三宝院庭園	2006FD-DT008	伏見区醍醐東大路町	確認・立会	近藤(奈)	1	2006.12.19～2007.02.27	I -43	
H18-063	平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡	2006HK-QX001	京都市右京区西院清水町	発掘	柏田・西森	450	2006.12.11～2007.02.09	I -20	2006-30
H18-065	中臣遺跡(84次調査)	2006RT-NK084	京都市山科区勸修寺西金ヶ崎町	発掘	西森	260	2006.12.18～2007.01.17	I -33	2007 国補
H18-066	京都市指定名勝 知恩院方丈庭園	2006RT-TO002	東山区新橋通大和大路東入三丁目林下町	確認	近藤(章)	9	2006.12.11～2007.01.22	II -06	
H18-067	植物園北遺跡	2006RH-ST001	京都市左京区下鴨北野々神町	発掘	平田・モンベティ	1,470	2007.01.24～2007.04.27	2007	2007-01
H18-070	平安京右京一条二坊七町	2006HK-JP001	京都市上京区上ノ下立売通御前通西入二丁目堀川町	発掘	吉村	161	2007.01.29～2007.02.23	I -12	2006-31
H18-071	大藪遺跡	2006MK-RK001	京都市南区久世殿城町	発掘	西森	295	2007.02.01～2007.03.08	I -42	2006-32
H18-072	寺戸大塚古墳	2006MK-TE001	京都市西京区大枝南福西町	確認	吉崎	63	2007.01.22～2007.03.20	I -39	2007 国補
H18-073	平安京跡・史跡本願寺境内	2006HK-WI019	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町地内	発掘	近藤(奈)	240	2007.03.05～2007.06.04	2008	2008-01
H18-076	平安京左京四条一坊十三町	2006HK-YR001	京都市中京区壬生坊城町	発掘	大立目	315	2007.02.01～2007.03.20	I -04	2006-33
H18-078	西寺跡・平安京跡(右京九条一坊十四町)、唐橋遺跡	2006HK-SG014	南区唐橋西寺町	発掘	能芝(妙)	31	2007.02.19～2007.03.02	I -22	2007 国補
H18-079	平安京右京六条二坊六・十一町跡	2006HK-XH002	下京区西七条御前田町～右京区西院高田町地内	発掘	小檜山、布川、能芝(勉)、尾藤、ト田	1,643	2007.03.27～2007.08.03	2007	2007-03
H18-082	平安宮西院跡	2006HK-KM001	上京区日暮通丸太町上る西院町	発掘	布川	84	2007.02.26～2007.03.17	I -01	2007 国補
H18-083	大原野・大枝地区分布調査	2006NG-BN001	西京区大枝・香掛～大原野	分布調査	津々池・加納		2007.02.14～2007.03.16	2007	2007 分布
H17-057	平安宮跡(朝堂院)	2005HK-KL001	上京区下立売通千本東入下る中務町・竹屋町通千本東入主税町	発掘	吉崎	58	2006.02.03～2006.02.15	I -44	2006 国補

本書番号欄： I - *・II - *は、本書第1章の報告番号を示す。

2007は、本書次年度以降にて報告することを示す。

備考欄： 2006- *は、2006年度発掘調査分の京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告番号を示す。

2006 国補は、『京都市内遺跡発掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007年3月31日にて報告を示す。

2007 国補は、『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2006 立会は、『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007年3月31日(4～12月調査分)および、『京都市内遺跡立会調査概報 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日(1～3月調査分)にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

2007 分布は、『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年3月31日にて報告を示す。

I 平成 18年度の発掘調査概要

表2 その他契約一覧表

契約番号	内容	遺跡名	調査住所	担当者
H18-002	遺物整理	埋蔵文化財出土遺物保管	京都市	小森俊寛
H18-003	遺物保管	埋蔵文化財出土遺物保管	京都市	中村 敦
H18-013	講師派遣	講師派遣	奈良市山稜町 (奈良大学)	辻 純一
H18-014	測量	志水廃寺遺跡	八幡市月夜田町地内	宮原健吾
H18-028	整理	平安宮跡	京都市上京区下立売通千本東入下る中務町	吉崎 伸
H18-029	普及啓発	普及啓発	京都市	長宗繁一
H18-030	整理	北白川廃寺跡	京都市左京区北白川上別当町	丸川義広
H18-033	整理	山科本願寺南殿跡	京都市山科区音羽伊勢宿町	平田 泰
H18-034	測量	菟道遺跡	宇治市菟道菰里	宮原健吾
H18-038	測量	山科本願寺跡	京都市山科区西野左義長町	宮原健吾
H18-047	保存処理	東京大学構内	東京都文京区本郷	竜子正彦
H18-048	測量	平安京跡	京都市中京区御幸町通錦小路上の船屋町	宮原健吾
H18-049	測量	伏見城跡	京都市伏見区深草中ノ島町	宮原健吾
H18-052	測量	平安京跡	京都市下京区室町通高辻西入繁昌町	宮原健吾
H18-056	遺物復元	遺物復元	大阪市城東区野江1丁目	村上 勉 出水みゆき
H18-060	整理	鳥羽離宮跡	京都市伏見区中島秋ノ山町	菅田 薫
H18-062	遺物復元	遺物復元	大阪市城東区野江1丁目	村上 勉 出水みゆき
H18-068	発掘調査支援	基地内遺跡ほか	沖縄県宜野湾市ほか	辻 純一
H18-069	調査支援	名勝對龍山荘	京都市左京区南禅寺福地町地内	鈴木久男
H18-074	講演資料作成	講演資料作成	京都市中京区三条通柳馬場西入柵屋町	長宗繁一
H18-075	遺物整理	史跡賀茂御祖神社境内	京都市左京区下鴨泉川町	長宗繁一
H18-077	資料整理支援	基地内遺跡ほか	沖縄県宜野湾市ほか	辻 純一
H18-080	写真撮影	長岡京跡	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町	村井伸也 幸明綾子
H18-081	測量	平安京跡	京都市中京区柳馬場通錦小路上の十文字町	宮原健吾
H18-084	報告書作成	18年度報告書	京都市域	長宗繁一

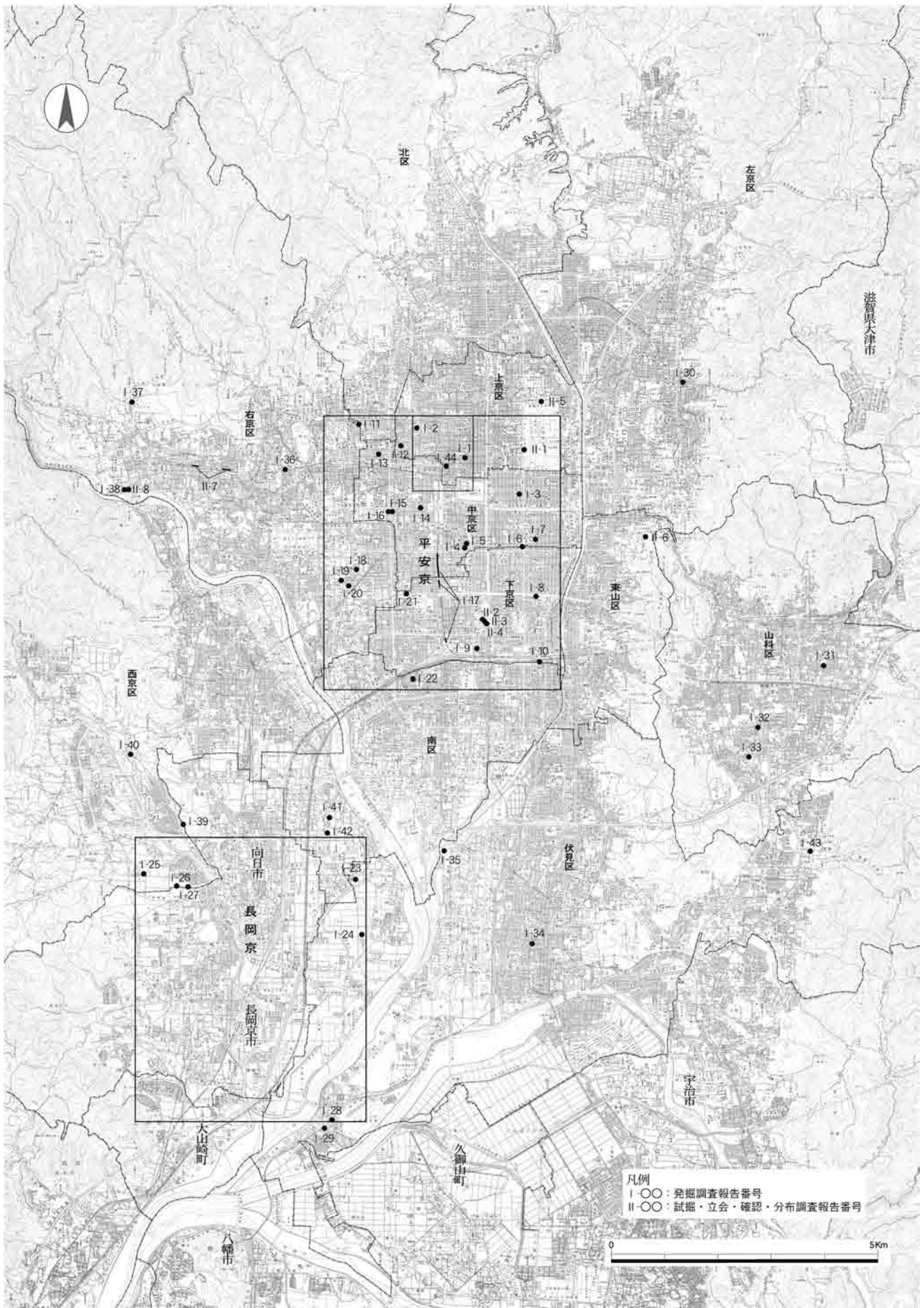


図1 調査位置図

1 平安宮西雅院跡

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 19 年度』京都市文化市民局 2008. 3.31

経過 共同住宅新築工事に伴う発掘調査で平安宮内東部中央、内裏の南東隣接地に位置する西雅院跡東部の推定地に当たる。桃山時代、北側隣接地に聚楽第が造営され、当地域にも大名屋敷が建てられる。江戸時代には京都所司代や大名などの屋敷地となり、上京の町屋地に連なる

遺構 検出した遺構は、近世の土坑群と中世から近世と考える土取跡の土坑などである。平安時代や平安宮西雅院に関連する遺構は確認できなかった。

遺物 土坑群より平安時代・中世・江戸時代の遺物が出土した。

中世から近世の土器類は、染付磁器、陶器、焼締陶器、磁器、輸入磁器、瓦質土器、瓦器などがあり、中世のものは少量である。平安時代の土器類は、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器などがある。平安時代の遺物は前期から中期のものが出土しており、前期のものが多。

小結 調査で検出した遺構は、地山に達する土取穴跡と考えられる中世から近世の土坑が大半であり、平安時代の遺構は残存しておらず、西雅院に関連する遺構も確認することができなかった。しかし、土坑などから平安時代の遺物が出土し、平安時代前期から中期のものが多く、この時期の遺構が当地にも存在していた可能性を示している。



図2 調査位置図



図3 遺構平面図

2 平安宮正親司跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-12 『平安宮正親司跡』 2006.10.31

経過 本門佛立宗佛立教育専門学校新学寮新築工事に伴う調査である。対象地は平安宮正親司の中心部にあたるため、京都市文化市民局文化財保護課による試掘調査が行われた。その結果、平安時代前期の遺構が確認されたため調査の運びとなった。

遺構 検出した遺構には、平安時代前期の溝・土坑・柵・建物・柱穴、平安時代中期の柱穴、江戸時代後期の整地層・土坑・柱跡がある。

遺物 出土した遺物は、平安時代前期の土師器皿・椀・杯・蓋・高杯・甕、須恵器皿・杯・蓋・壺、黒色土器椀、緑釉陶器椀、灰釉陶器皿・椀、平瓦、丸瓦、緑釉瓦片、焼土塊、炭片、鉄片、不明銅製品、凝灰岩片がある。土坑・溝・柱穴から出土したもので、特に土坑1・2・3からは土器類・瓦類が多量に出土している。

小結 検出した東西・南北の溝は、正親司の中心推定ラインに近接した位置にあたる。東西方向の溝1は推定ラインより約3m北側に、南北方向の溝2は約2m東側で検出した。溝1は2m近い幅、溝2は西側に柵1を伴うなど、官司内を区画した施設とみられる。

溝1は、昭和53年度調査、南区SD1が方向、規模、堆積土、時期が一致しており、同一の溝とみられる。

建物1は、東西棟か南北棟のいずれかに決定できないが、西約1mに雨落溝の可能性のある溝4があり、区画の中心にある主要な建物ではないとみられ、切妻の南北棟と想定しておきたい。

各区画と土坑の成立位置は、土坑1が北東区画の南西辺にあり、土坑2と土坑3が南西区画の北東辺に造られている。いずれも位置的には区画の中央部ではなく、縁辺部に設けられている。



図4 調査位置図

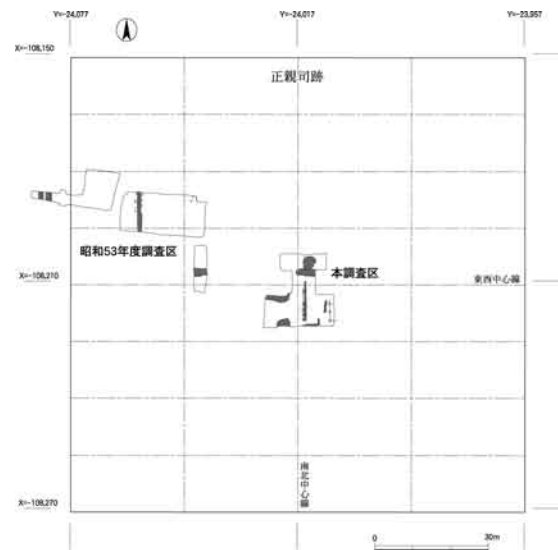


図5 調査区配置図

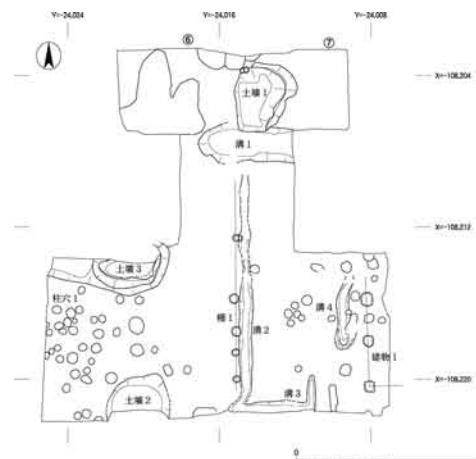


図6 遺構平面図

3 平安京左京三条三坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-15『平安京左京三条三坊九町跡』2006. 3.24

経過 建物建設に伴う調査である。調査地は二条通・室町通・両替町通に囲まれた区域である。九町には、平安時代後期、西半に藤原俊忠、東半に白河法皇、待賢門院藤原璋子の臨時御所となった二条烏丸第が存在した。安土・桃山時代には、織田信長が名園の誉れ高い二条御池殿に京都の拠点として築いた二条殿御池城の造営地に隣接している。江戸時代、両替町通には道路に沿って金座・銀座・朱座が設けられた。

遺構 調査区は、1区・2区を設定した。検出した遺構は、両区共にその大半が桃山時代から江戸時代初頭の時期幅に属し、室町時代後期以前のもの少数であった。1区においては桃山時代から江戸時代初頭の南北の堀状遺構、路面状遺構、室町時代後期の柱穴を検出した。2区では、江戸時代前期以降の礎石列・石室基底部・柱穴列を、桃山時代から江戸時代初頭の廃棄土坑・土取穴・東西柵・井戸など、室町時代後期においては、北一門・二門ラインに沿う東西柵などを検出した。

遺物 遺物は平安時代から江戸時代中期にいたる時代の遺物が出土した。土師器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、瓦器、須恵器、木製品、瓦類、土製品、金属製品、動物の骨などがある。室町時代以前の遺物は非常に少なく、大半の遺物は桃山時代から江戸時代初頭期までのものでしめられる。

小結 室町時代後期以前の遺構数は非常に少なかった。これらは近世初頭の土取りや整地によるものとみられる。検出できた遺構は1区のSX 8肩口のPit、2区のSA004やPit群を除き、織田信長が京都屋敷を建設し始める天正四年（1576）、本能寺の変で織田信忠がこの屋敷で討ち死にしたと伝えられる天正十年（1582）よりも時期を新しくするものが多かった。これらの遺構は、桃山時代から江戸時代初頭にかけての町家関連のものと思われる。



図7 調査位置図

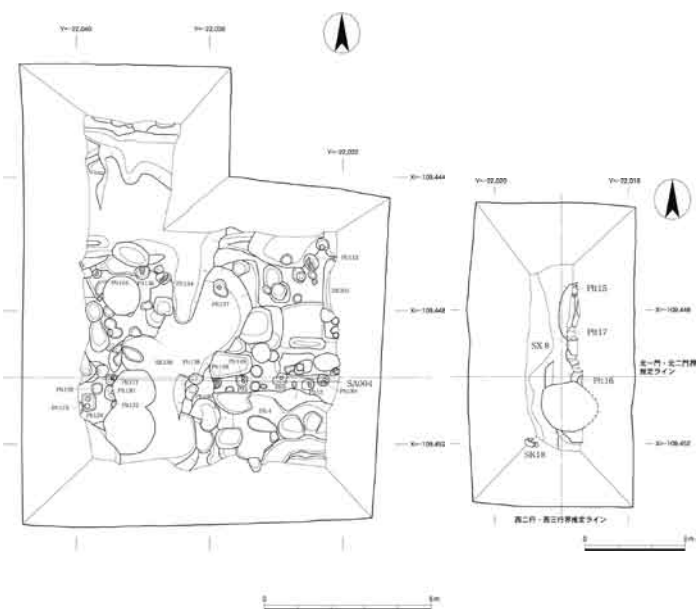


図8 1区・2区遺構平面図



図9 2区第2面全景（北東より）

4 平安京左京四条一坊跡 1

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-33『平安京左京四条一坊十二・十三町跡』 2007. 3.31

経過 建物建設に伴う調査である。当調査地は、十二・十三町および櫛笥小路に該当する。十二町は11世紀後半には菅原貞衡の邸宅、十三町は12世紀前半には中納言藤原家成の邸宅が存在した。四条大宮周辺は、室町時代前期には、禅寺十刹に名を連ねる安国寺が、後には四条櫛笥に移転してきた妙顕寺、妙顕寺より分派して建立された妙覚寺、さらに妙蓮寺などの法華寺院が位置していた。

遺構 平安時代から江戸時代までの堀、土坑、溝、土取穴、ピットなどを検出した。調査地が櫛笥小路内に当たったためか、遺構数は少なく宅地などに関連する井戸、廃棄土坑などは見られず、各時代を通して宅地でなかったとみられる。時代別では、室町時代後期の遺構が多く、中世の他の時期の遺構はない。平安時代においては、前期に属する池状遺構の可能性のある湿地状堆積以外は認められなかった。江戸時代も同様で遺存する遺構はごく少数で、土坑・整地土層の確認のみにとどまった。

遺物 遺物は平安時代から江戸時代中期にいたる時期の遺物が総計78箱出土した。内容は土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、焼締陶器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、漆器、木製品、銭貨、金属製品、石製品、土製品、人骨、動物の骨などである。

小結 調査によって検出した遺構は、室町時代後期の遺構群が主である。SD115は櫛笥小路の中央を南北に縦断することから、平安時代の条坊を踏襲しながら、築地ライン際に沿って南北に造られたとみられる。堀の性格として、法華寺院の密集地であることから、他宗派からの攻撃に備えるために城塞化した構の一部であった可能性が高い。



図10 調査位置図

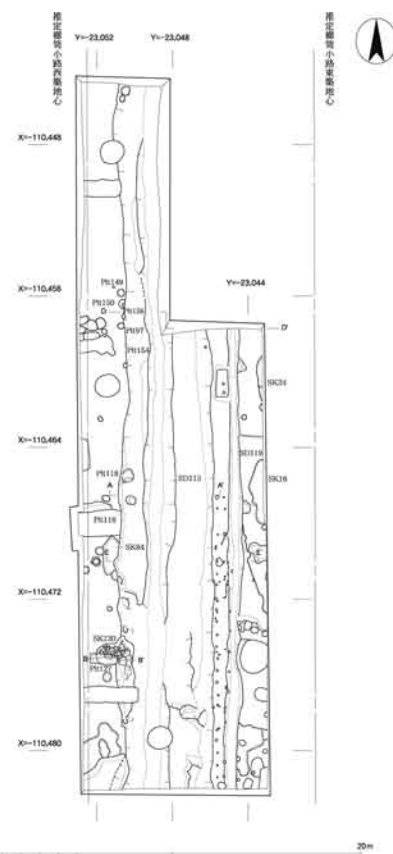


図11 第2面遺構平面図

5 平安京左京四条一坊跡 2

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-10『平安京左京四条一坊十三町跡』2006.10.31.

経過 建物建設に伴う調査である。当該地は北側を錦小路、西側を櫛笥小路、南側を四条大路、東側を大宮大路に四方を画された十三町の西部分にあたる。史料からは、当町における平安時代前・中期の著名な邸宅の存在は認められないが、後期になると、中納言藤原家成、権大納言藤原隆季の邸宅となる。

遺構 3面の調査を実施した。第1面では、14世紀代の石組井戸1基・溝・土坑・土取穴などを検出した。第2面では、平安時代後期の木枠組井戸3基・土坑などを検出した。第3面では平安時代の池状遺構を検出した。池状遺構は9～10世紀と11世紀の2時期あり、当初の池を縮小して改修を行った様子がわかった。

遺物 時期は弥生時代・平安時代前期から江戸時代におよぶが、量的には平安時代後期に属するものが多い。

SG158-新からは、土師器、瓦器、輸入陶磁器、SG158-旧からは、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土している。平安時代に属する瓦類がSG158の埋土および上面の整地層などから多数出土しており、平安京以前の都城で使用されていた搬入瓦を含んでいる。

小結 池状遺構は、二時期の変遷が確認され、9世紀中頃に成立し、10世紀後半から11世紀初めにかけて規模を縮小して造り直され、11世紀末期に埋まったことが明らかになった。池状遺構は調査区内の南4分の3ほどに全面に広がっている。西には、櫛笥小路東築地や路面が推定されている。しかし、池状遺構は推定位置より、西側に広がっていることが確認され、櫛笥小路関連遺構は、検出していない。また、調査地では、奈良時代の搬入瓦や平安時代前期から中期の軒瓦などが50点ほど出土している。平安時代前期から中期には、1町以上の邸宅が存在していた可能性がある。



図12 調査位置図

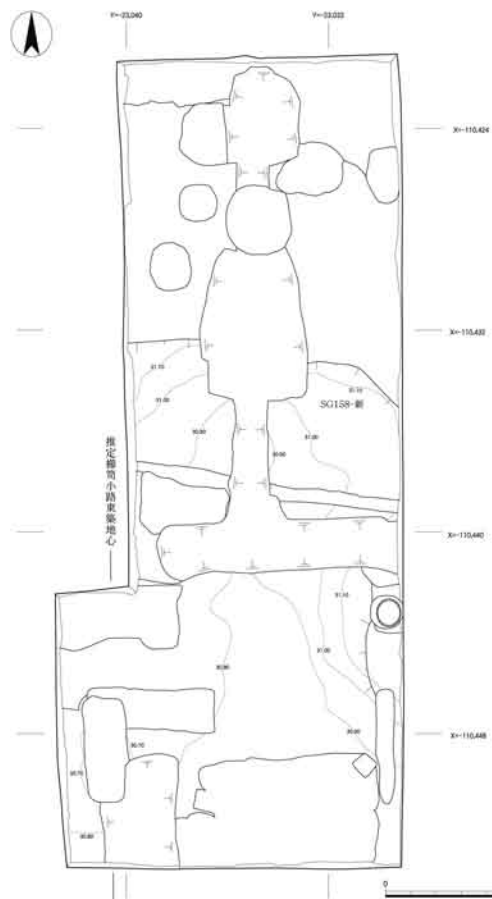


図13 第3面遺構平面図

6 平安京左京四條三坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-26『平安京左京四條三坊十二町跡』2007.3.30

経過 建物建設に伴う調査である。当地は十二町の東辺南北中央南寄りに該当し、また中世・近世を通じて下京の中心として繁栄した地域の一部である。また、弥生時代から古墳時代の烏丸綾小路遺跡の一部にも該当する複合遺跡である。調査は、4区に分割して実施した。

遺構 弥生時代から江戸時代までの多数の遺構を検出した。平安時代以前の遺構には弥生時代の竪穴住居・方形周溝墓・土坑、古墳時代の土坑などがある。平安時代の遺構は多数の柱穴のほか少数の土坑を除いて明確なものはい少ない。鎌倉時代および室町時代前期の遺構は井戸や土坑などを比較的良好的な状態で検出でき、出土遺物も多い。室町時代後期の遺構は大半が土取穴である。特に1区では土取穴が広汎に分布していた。桃山時代以降の遺構にはゴミ廃棄土坑が多くみられた。規模の大きなものも多く、多量の遺物が出土している。

遺物 大半は土器・陶磁器類で、その他に瓦類、金属製品、木製品・漆器、石器・石製品、骨製品などがある。これらの遺物は弥生時代、古墳時代および平安時代から近世までの幅広い時期に属し、種類も多彩である。

小結 今回検出した弥生時代中期から後期にかけての遺構・遺物は烏丸綾小路遺跡の具体的な様相をうかがう好資料といえよう。平安時代の遺構については、後世の破壊のため面的な関連を把握しきれなかったが、後期以降を主とする多数の小規模な柱穴や土坑を検出した。鎌倉時代以降も平安時代同様に柱穴・土坑・井戸などが高い密度で遺構が検出したが、室町時代後期には遺構数がやや減少する。江戸時代の土坑の一つからは、一括資料が出土し、これらを所有していたおそらく有力な町衆の嗜好の一端をうかがえる貴重な資料がある。

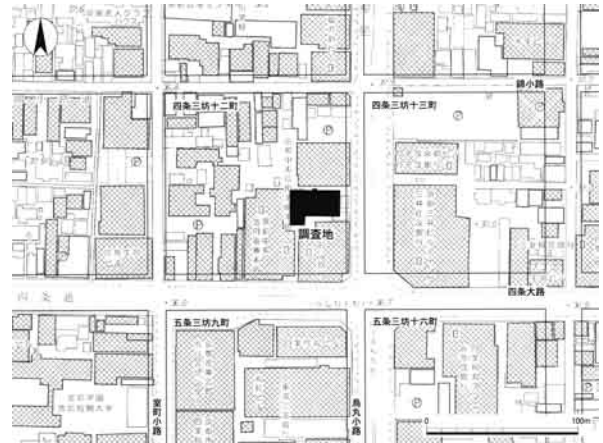


図14 調査位置図



図15 2区第3面（弥生・平安時代）全景（東より）

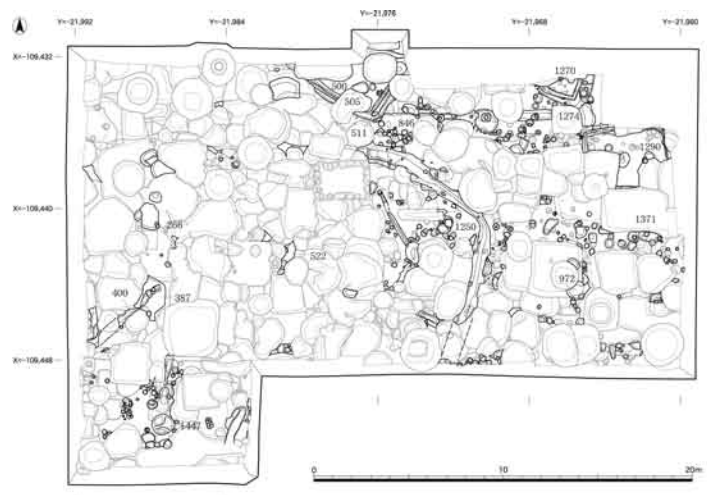


図16 弥生・平安時代遺構平面図

7 平安京左京四条四坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-28『平安京左京四条四坊三町跡』2007.3.31

経過 建物建設に伴う調査である。調査地は、北側を四条坊門小路、西側を東洞院大路、南側を錦小路、東側を高倉小路に囲まれた三町の中央部にあたる。同町に関連する平安時代の史料は不明確であり、特定の邸宅や諸施設の存在は推定されていない。しかし、平安時代中期から後期になると隣接地には、藤原宗道邸・藤原重道邸（二町）、四条東洞院内裏（四町）、藤原実行邸・待賢門院御所（八町）などの貴族の邸宅があいついで営まれていたことが記録に残っている。また、周辺には弥生時代から古墳時代の烏丸綾小路遺跡がある。

遺構 4面の遺構面を調査した。第1面で検出した遺構には、掘立柱建物・井戸・溝・土坑・ゴミ捨て穴などがある。各遺構の埋土は、焼土・炭を含むものが多い。第2面では、堀・石組井戸・溝・土坑・土取穴などを検出した。第3面では、土坑・溝などを検出したが少数である。第4面では、弥生時代の竪穴住居・流路・土坑を検出した。

遺物 遺物はそのほとんどが土器類であり、軒瓦類は非常に少ない。時期は、弥生時代、古墳時代、平安時代から江戸時代におよぶが、量的には、室町時代から江戸時代に属するものが多い。

小結 室町時代後期の幅 2.4 m、深さ 1.6 mの堀を南北 40 mにわたって確認した。16 世紀前半に開削され、16 世紀末頃に埋められている。堀は三町域のほぼ東西の中心に位置している。町組の地割・防御・排水などの機能をもった施設と考えられるが、その範囲は不明である。



図 17 調査位置図

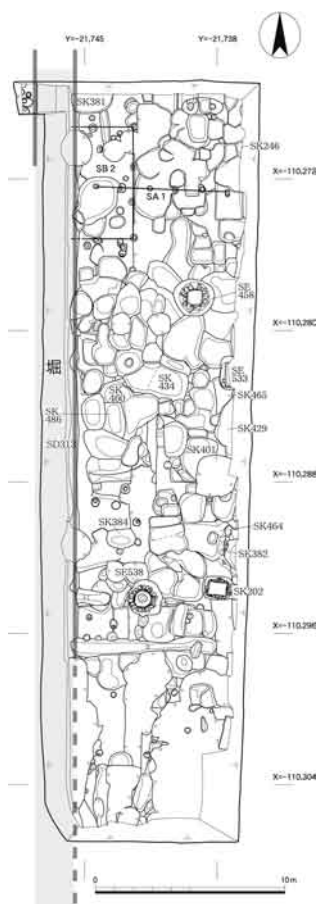


図 18 第2面遺構平面図

8 平安京左京六条四坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-29 『平安京左京六条四坊三町跡』 2007.3.31

経過 下京消防署新築工事に先立つ発掘調査である。周辺は平安時代前期には四町に、光孝天皇御所の釣殿院、十一町から十四町を占める左大臣源融の河原院(六条院)が所在した。後期には四町に白河天皇六条内裏、譲位した白河上皇は六条内裏の改修を行い、三町を含めた南北2町を占地するようになった。上皇は郁芳門院の追善として六条内裏を仏寺とし、六条御堂と呼ばれるようになる。正嘉年中に浄土教から禅宗に転じ、万寿禅寺と改め、さらに崇明門院の報恩寺を合併し南北3町を占めるようになる。そして天正十九年豊臣秀吉により現在地である東福寺の北側に移転される。

遺構 検出した遺構には時期不明の地業状遺構、室町時代から桃山時代の池、江戸時代の井戸・土坑・溝・墓などがある。地業状遺構111は、東西約8m、南北約7m分を確認し、その単位は4区画認めたが、あまり明瞭ではない。池77は、大きく4期に分けられる。Ⅱ期の池の北・東側では多量の焼けた瓦が出土した。Ⅲ期の池は、北岸中央に長径115cm、短径55cm、高さ55cmの景石とみられるチャート(1)を1個据えている。

遺物 遺物の大半は室町時代から江戸時代までのもので占められる。池77-Ⅱ期を埋め立てた火災処理土からの瓦が最も多い。瓦類は軒瓦など総重量は13,000kgを測る。土器類には土師器、焼締陶器、瓦器、輸入陶器、施釉陶器などが出土している。

小結 調査では、白河天皇造営の「六条院」にかかわる遺構の検出はできなかった。しかし、鎌倉時代とみられる地業状遺構を検出しており、また少量ではあるが、平安時代の遺物も出土している。今後、近隣の調査を進めることにより、「六条院」、「六条御堂」、そして「万寿禅寺」と変遷した当地の様相を明らかにすることができるであろう。



図19 調査位置図

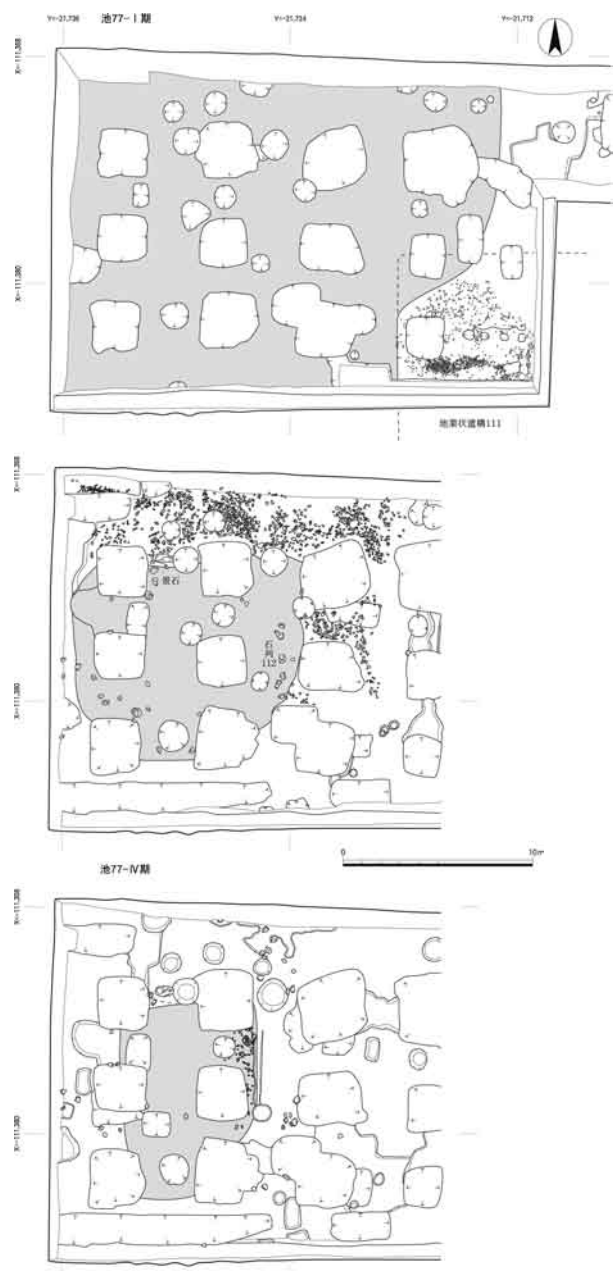


図20 I・Ⅲ・Ⅳ期池跡平面図

9 平安京左京八条二坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-11『平安京左京八条二坊三町跡』2006.10.31

経過 市立下京中学校施設新築工事に伴う発掘調査である。本調査地は三町に相当し、北方には東市があった。東市は平安時代後期に衰退していくが、それに代わって七条大路と町小路を中心に七条町が形成される。七条町は商工業域として周辺に広がっていた。平安時代末期には調査地から大宮大路を挟んだ西側、左京八条一坊に平清盛の邸宅となった西八条第などがあった。調査区は、大きく3区に分け実施した。

遺構 検出した遺構は、土坑、溝、礫面などがあり、江戸時代後期から幕末にかけての遺構が中心である。少数であるが、桃山時代の柱穴を7基および近代のものであるが埋納土坑を3基検出した。

遺物 今回の調査で出土した遺物の時代は、平安時代から明治初頭に及ぶが、江戸時代のものが大半を占めている。器種別には土器・陶磁器類の出土量が最も多く、鋳型・埴塼・鉄滓などの鋳造関係品がこれに次ぐ。他に

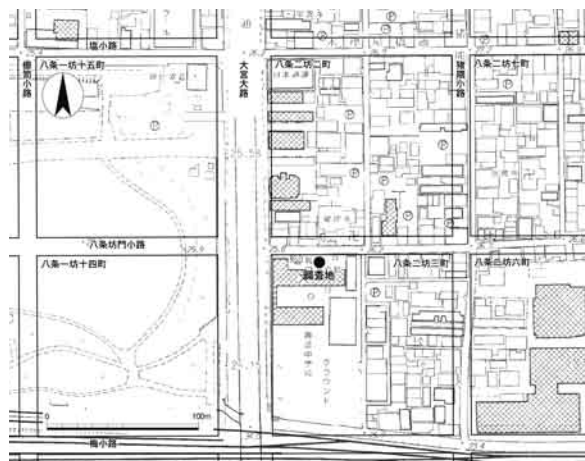


図 21 調査位置図

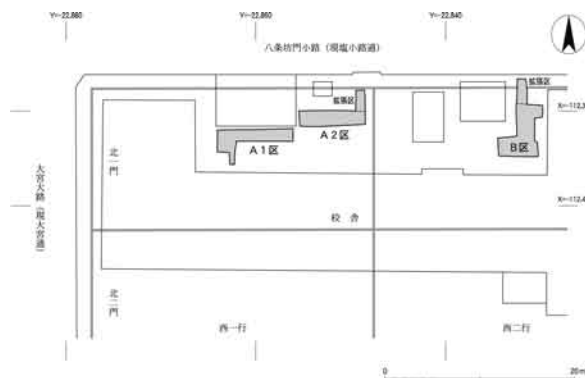


図 22 調査区配置図

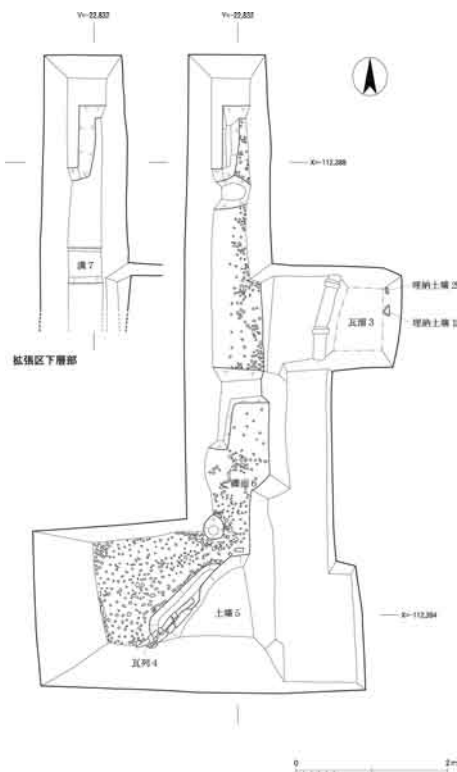


図 23 B区平面図

は瓦類、土製品、石製品、銭貨などがある。平安時代の遺物は、わずかに緑釉陶器、灰釉陶器、布目瓦の小片で、同時代の遺構に伴って出土したのではなく、後世の土層に混入した形での出土であった。

小結 A2区において検出した土間や礎石は、江戸時代の町屋にかかわる遺構と考えられる。B区で検出した2面に分けることのできる礫面は、江戸時代の路面で、八条坊門通（三哲通）から南へ入路地と考えられる。

10 平安京左京八条四坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-20『平安京左京八条四坊四・五町跡』2007.3.15

経過 八条通拡幅に伴う調査である。左京八条四坊四・五町の推定地である。条坊復元によれば、東洞院大路、高倉小路、万里小路、八条大路にあたる。また、四町の北西部は八条院領、五町は平安時代末期の平宗盛の屋敷地に比定されている。調査は、3区、都合6箇所に分け実施した。

遺構 A区では、平安時代末期から鎌倉時代の東洞院大路とその東側溝と築地内溝・八条大路北側溝・井戸・土坑、室町時代の遺構として八条大路北側溝・井戸・土坑などを検出した。

B区では、鴨川の氾濫堆積のみので、一部江戸時代の耕作土の堆積が認められたが、近現代の遺物を含む遺構が検出しただけである。

C区で検出した主な遺構は、江戸時代の溝、土坑などがある。

遺物 縄文時代から江戸時代までの遺物が出土した。大半が土器類で、木製品、石製品（砥石・硯）、金属製品（釘・鋌）、銭貨（寛永通寶・文久永寶）、瓦などが混じる。

平安時代末期から鎌倉時代の遺物は、条坊側溝・井戸・土坑から出土しており、とくに2基の土器溜りから多量の土師器の皿が出土している。

小結 調査では、東洞院大路が条坊復元推定位置とほぼ同じ場所に築かれていることに対し、八条大路は、推

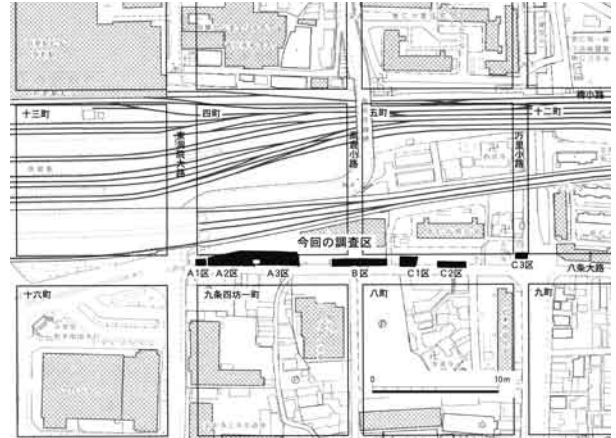


図24 調査位置図

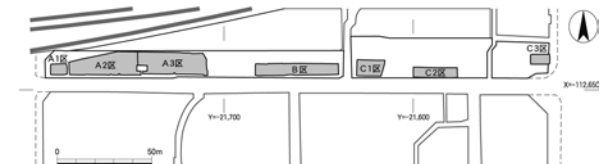


図25 調査区配置図

定位置より南に約3～4mずれて築かれていることがわかった。

遺物では、遺構には伴わないが、C区で大量の炉壁・ルツボ・取瓶・砥石・スラッグが出土した。付近に銭座の存在が想定されるため、関連の遺物と考えられる。京都の銭座は、京都糸割符年寄の長崎屋忠七など五名の請負によって、元禄十三年（1700）三月に始まり、宝永五年（1708）正月に鑄銭事業は停止されている。

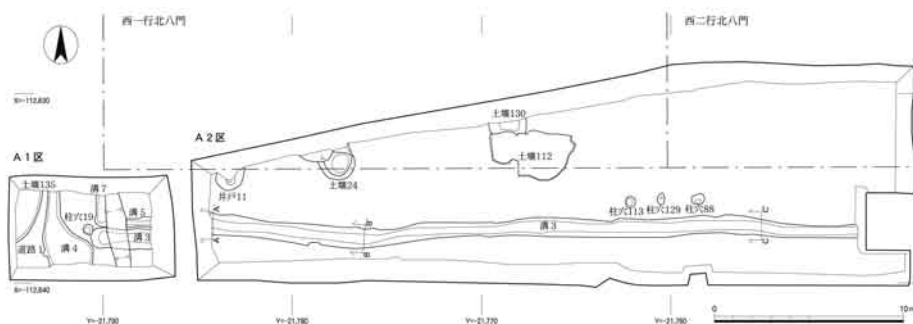


図26 A1・2区遺構平面図（平安時代）

11 平安京右京北辺三坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-31『平安京右京北辺三坊八町（宇多院）跡』2006. 6.30

経過 老人介護施設の建設に伴う調査である。右京北辺三坊八町部分に位置するこの地は、五町から八町にかけての4町四方を占めていたといわれている宇多院の比定地であるが、明確ではない。

遺構 第1面の室町時代の遺構を包含層上面で検出し、平安時代後期の第2面の遺構を地山面で検出した。第1面で検出した遺構には、建物2棟・井戸がある。第2面では、平安時代末期に埋没したとみられる南北の溝を検出した。この溝と時期を置かず建てられたとみられる建物3・4と井戸65を検出した。

遺物 平安時代および室町時代の遺物が出土した。平安時代後期の土器が圧倒的に多く出土し、土器類、石製品、木製品が出土している。木製品では、井戸より枡の一部が出土している。大きさは復元すると、17.8cm×17.7cm×高さ10.7cmを測る。

小結 平安時代に造られた溝は、末期に埋没した。その後まもなく、当地は宅地化され、建物とそれに伴うとみられる井戸などが造られた。柱穴の規模や数から建て替えがくり返されたとみられるが、平安時代末期から鎌倉時代初頭までには断絶したとみられる。その後ふたたび、室町時代に入り井戸および建物が造られ、井戸は15世紀後半には廃棄される。続く、近世の遺構については現代の整地により削平されたとみられる。

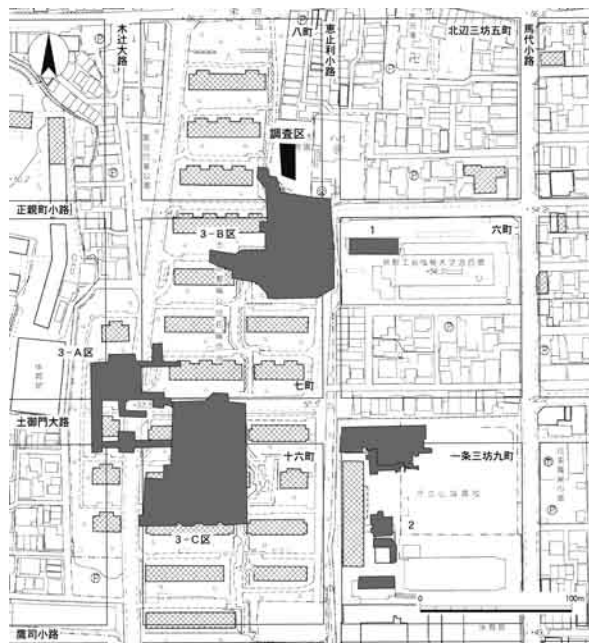


図 27 調査位置図

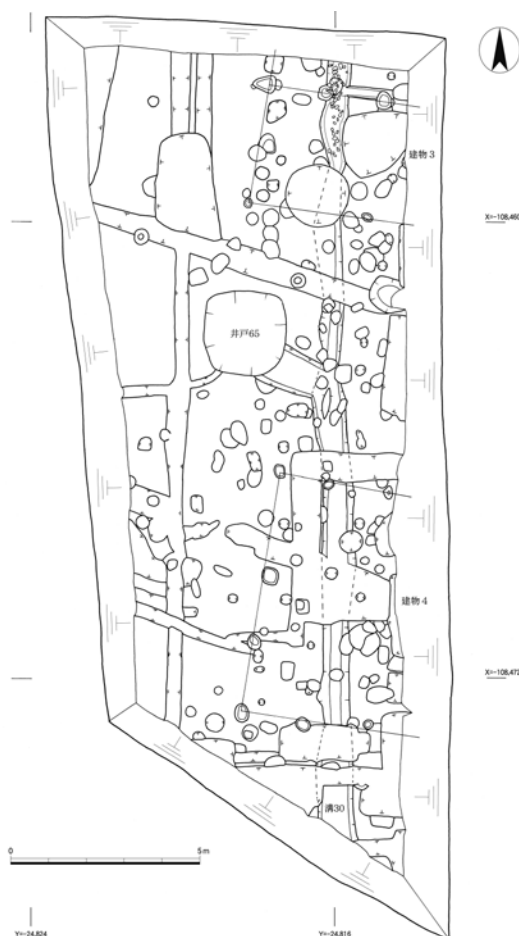


図 28 第2面遺構平面図

12 平安京右京一条二坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-31 『平安京右京一条二坊七町跡』 2007. 3.31

経過 共同住宅建設に伴う調査である。右京一条二坊七町にあたり、南を近衛大路、東を西鞠負小路、西を西堀川小路、北を鷹司小路で囲まれた町の南辺に位置する。町の内部を区分する四行八門制では東二行北七・八門にあたる。当町の居住者に関する史料は認められないが、『日本紀略』天徳2年(958)4月14日条に焼亡の記事が見える。

遺構 平安時代後期の遺構は、柱穴群が主で、調査区南部を中心に分布している。その中で、建物2棟と柵1条を検出した。その他調査区北部で溝を1条検出した。

遺物 出土遺物の大半は江戸時代の土器、陶磁器類である。平安時代のものは軒瓦、緑釉陶器椀、黒色土器、土師器皿の破片であった。

小結 平安時代の遺構は、ほぼ平安時代後期のものである。遺構としては柵、掘立柱建物、溝などを検出したが、遺構の大半は調査区の南側に集中している。当地は平安京の条坊では右京一条二坊七町の東二行北七門と北八門にあたり、町の南側を通る近衛大路に近接した位置にあたる。これらの遺構には方位がほぼ南北のものとなわずかに振れるものが存在し、若干の時期差を考えることができる。



図29 調査位置図

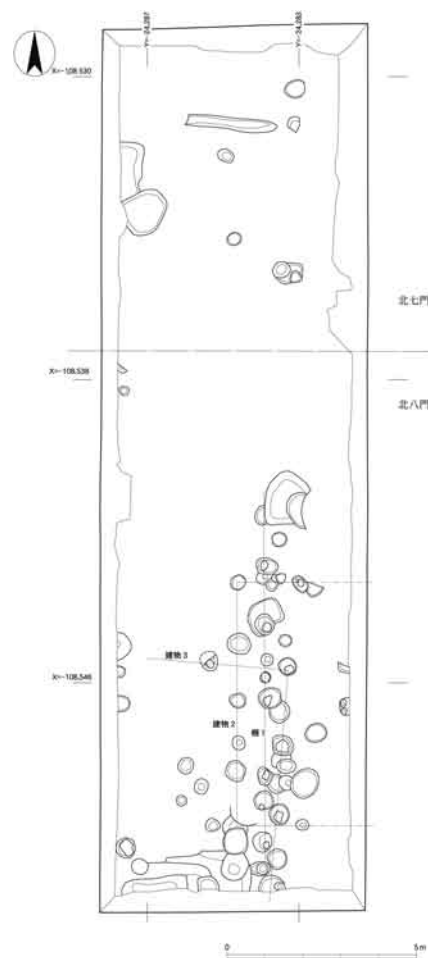


図30 遺構平面図

13 平安京右京一条三坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-21『平安京右京一条三坊跡』2006. 3.20

経過 上労働基準監督署の新築工事に伴う調査である。右京一条三坊三町に該当し、町内の東を道祖大路、西を宇多小路、南を勘解由小路、北を近衛大路で区切られていた町で、調査地の南側は勘解由小路に面している。調査区は、東西に分割して設定した。『拾芥抄』『西京図』には何の記載もなく、平安時代にはどのような土地利用がされていたのか不明であった。

遺構 検出した遺構は、9世紀後半から10世紀中頃の掘立柱建物・柵・土坑などで、遺構の変遷から大きく3期に分けることができる。第1期の遺構には建物1・5・6、柵3、第2期には建物2・3、柵1、土坑23・235・300、第3期には掘立柱建物4、柵2などがある。

土坑23・235・300は、地鎮遺構で、土器の埋納状況を良好な状態で検出した。

遺物 出土遺物の大半は平安時代前期から中期の土器類である。平安時代前期の遺物は土師器皿・椀・高杯、緑釉陶器椀・皿などが出土しているが、そのほとんどが小片である。平安時代中期の遺物は土師器皿・杯・甕、須恵器壺・椀、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀などが出土して



図 31 調査位置図

いる。平安時代後期の遺物は少なく、須恵器甕などが出土している。中世の遺物は土師器皿、須恵器鉢、瓦器椀、輸入青磁皿などが中世の遺物包含層から出土した。

小結 平安時代の遺構は、造られた時期差はあるものの、平安時代中期（9世紀後半から10世紀後半）の範疇におさまる。

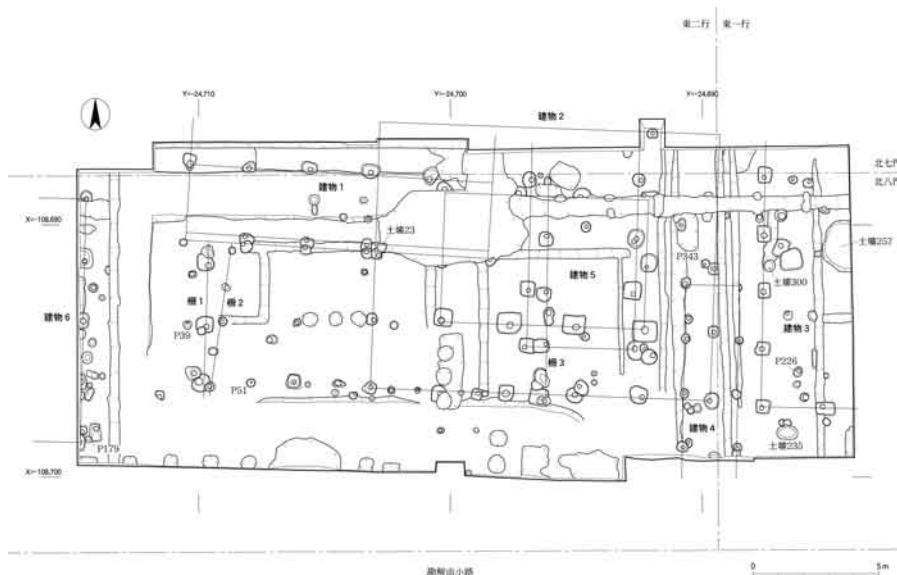


図 32 遺構平面図

14 平安京右京三条一坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-13 『平安京右京三条一坊六町跡』 2006.11.30

経過 調査は、区画整理事業の道路拡幅工事に伴うものである。右京三条一坊六町内の北西部に該当する。同町は『拾芥抄』西京図によれば、右大臣藤原良相（817～867）の邸宅、「西三条第」にあたる。

遺構 第1面では、平安時代前期の柱穴と整地土層などを検出した。その他、中世から近世の耕作関連の小溝、近世から近代の土坑なども検出した。第2面は、9世紀初頭の柱穴や土坑などを検出した。

遺物 平安時代の遺物は、前期のものが多数を占め、平安時代中期初頭以降に比定されるものは出土量が著しく減少する。中世の遺物は、少量で小片であるが、土師器・瓦器・焼締陶器・輸入白磁と青磁、瓦などが出土している。近世の遺物は、染付磁器・施釉陶器が多く出土し、他に土師器、瓦、磁器なども見られる。

小結 調査では、それぞれ新旧のある整地土1・2と柱穴A群・B群、建物などを検出した。地山直上の第2面で検出した柱穴B群（建物3、柵1・2など）は9世紀初頭には廃絶し、その後、早くも9世紀前半には整地土2が整地されている。整地土2は、上面に柱穴A群（建物1・2など）が9世紀中葉頃成立し、9世紀末から10世紀初頭には廃絶したと考える。柱穴A群は、六町東側で検出した主要建物とほぼ時期が対応する。整地土1は、柱穴A群の廃絶前後の10世紀初頭頃に整地されている。

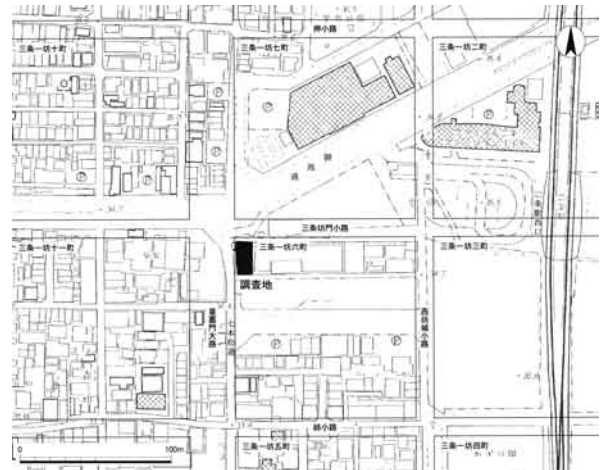


図33 調査位置図

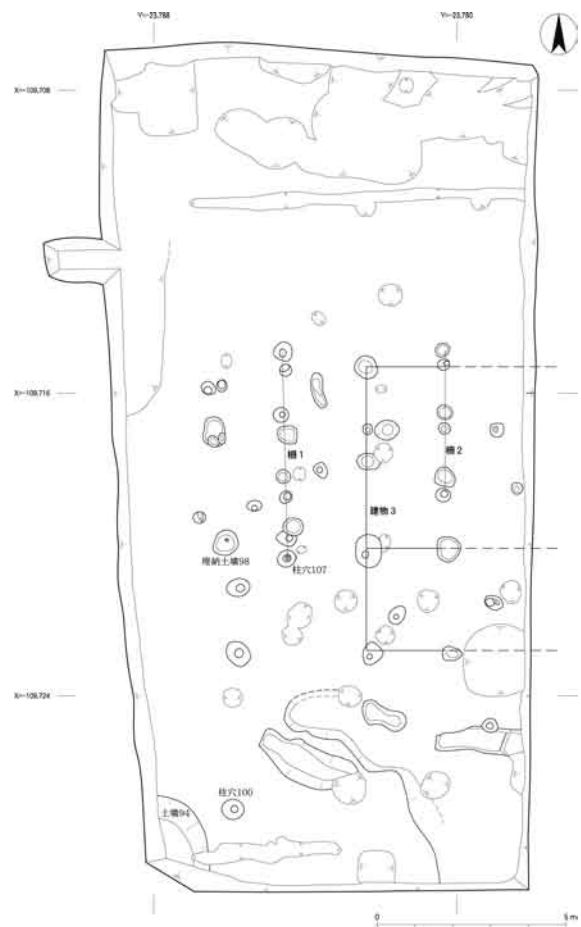


図34 第2面遺構平面図

15 平安京右京三条二坊跡 1

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-24 『平安京右京三条二坊十一町跡』 2007.3.30

経過 京都市西大路駅自転車等駐車場（仮称）整備計画に伴う発掘調査である。調査地は、十一町にあたり、北を三条坊門小路、西を野寺小路、南を姉小路、東を西堀川小路に囲まれた町で、そのほぼ中央部、東二行北五・六門に位置する。また、弥生時代から古墳時代の遺構・遺物を検出した西ノ京遺跡の南東部に位置している。

遺構 平安時代遺物包含層（10世紀半ばの整地層）の上面を第1面として、地山の上面を第2面として調査を進めた。

調査区の一部では、近代の大規模土坑・溝状遺構などにより、地山まで深く攪乱されていたが、その他の場所では鎌倉時代の溝・小溝群、平安時代の溝・柱穴群・建物などを検出した。

遺物 遺物には、土器類、瓦類、石製品などの種類がある。土器類が大半を占め、他は少量である。平安時代前期から中期のものが最も多く、他には鎌倉時代から室町時代、それに近代の遺物がある。特徴としては、磨滅した小片が多いこと、緑釉陶器、灰釉陶器が比較的多いことが挙げられる。また、中国からの輸入磁器（青磁、白磁）も認められる。

小結 平安時代以前の遺構は検出できなかったが、サヌカイト製の石鎌や櫛描波状文を有する古墳時代の須恵器甕の口縁部が出土しており、当地が西ノ京遺跡の一端であることを示している。調査地の南西隣接地で1996年に実施された発掘調査では、平安時代前期の井戸を検出しており、当地周辺は宅地としての土地利用があったことが示されている。今回第2面で検出した平安時代前期とみられる建物1は調査区外の南東に広がると想定でき、この建物は少なくとも東二行、北六門に位置することになる。



図 35 調査位置図

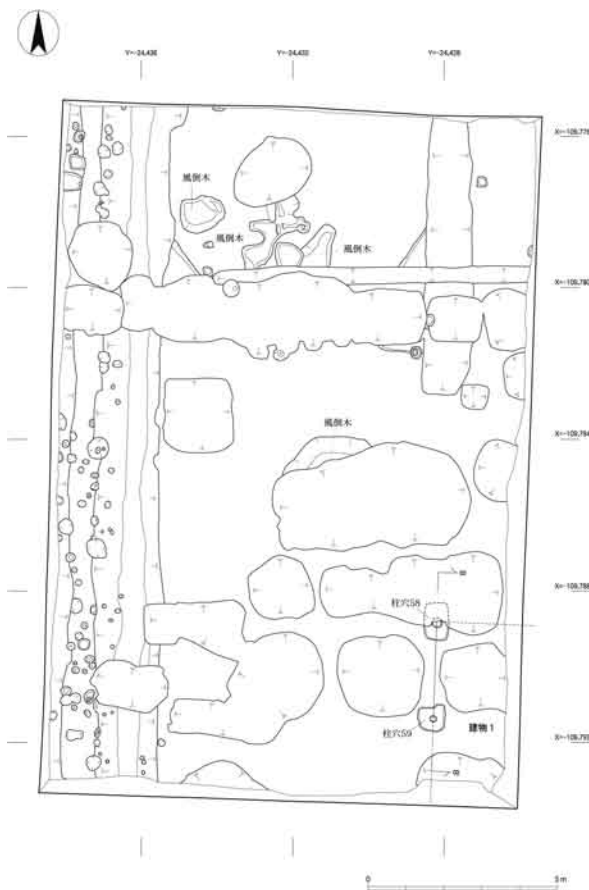


図 36 第2面遺構平面図

16 平安京右京三条二坊跡 2

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-1 『平安京右京三条二坊十四町跡』 2006. 6. 16

経過 共同住宅建設に伴う調査である。調査地は、十四町の東辺南半にあたる東一行、北五・六門および同町東辺を南北に通る野寺小路を含む地区に位置する。調査地北隣における十一・十四町の調査では、三条坊門小路南側溝、野寺小路東西両側溝、野寺小路内におさまり北から南へ流れる川跡などが検出されている。川跡は、十五・十六町の調査でも検出されており、野寺小路は平安時代後期には路面部分が南流する流路となって、鎌倉時代から室町時代初頭頃までには、その流路は埋没し、その姿が失われたことが判明している。

遺構 十四町内で、平安時代前期から中期初め頃の遺構として井戸 35・柱穴 28 を検出した。野寺小路関連では、野寺小路西築地心想定位置の東側で南北方向の溝 46（推定野寺小路西側溝）を検出しているが、西築地跡および犬行などは、ほとんど残存していなかった。路面および東側溝なども確認することができなかった。路面部にあたる位置において、南北方向に延び南流する川跡を検出した。平安時代中期頃に形成され、鎌倉時代から室町時代初頭に廃絶している。

遺物 土器類・陶磁器類・瓦類および金属製品・石製品・木製品がある。大半が土器・陶磁器類である。縄文時代草創期頃の石器 1 点がある。平安時代から江戸時代にわたる遺物が出土しているが、平安時代前期から中期初め頃の遺物が多く、10 世紀後半頃の遺物は少なく、これ以降の遺物も各時期をとおして少量にとどまる。

小結 今回の調査によって、野寺小路川は十六町から十四町まで、ほぼ直線的に約 240 m 続いていることがわかった。しかしこの野寺小路川の南には淳和院があり、右京五条二坊九町・十六町の調査では、野寺小路の両側溝を検出したが、川跡は検出されていない。これらのことから野寺小路川が調査地より南ではどのように流れるか、今後の調査に期待したい。

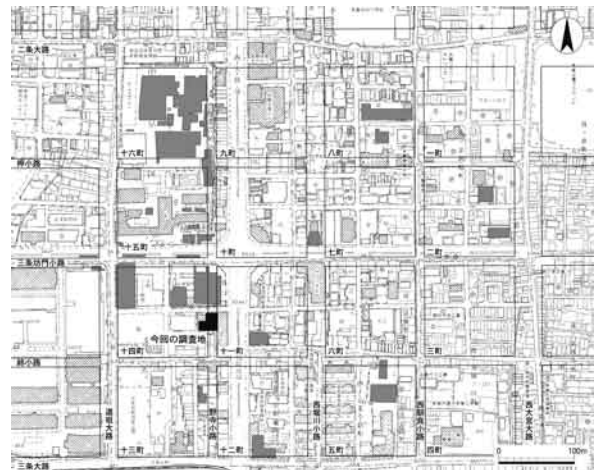


図 37 調査位置図

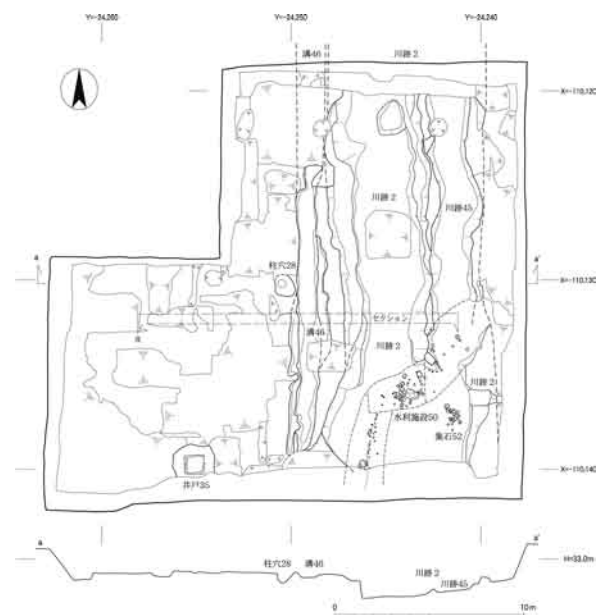


図 38 遺構実測図

17 平安京跡・御土居跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-18『平安京跡・御土居跡』2007. 2.28

経過 JR山陰線複線高架工事に伴い2004年より2006年まで、3年間にわたり断続的に実施した調査である。北から、右京四条一坊四町（朱雀院）跡、右京五条一坊一～四町跡、右京六条一坊一・二町跡、左京八条一坊一町跡・御土居跡で発掘調査と立会調査、都合5件の調査を実施した。

遺構 右京四条一坊四町跡では江戸時代の土坑・柱穴・溝、右京五条一坊一～四町跡では平安時代前期の綾小路路面・南側溝・池・高辻小路南側溝・五条大路北側溝、左京八条一坊一町跡・御土居跡では江戸時代の堀を検出した。

遺物 右京五条一坊三町で検出した平安時代前期の池から木簡2点が出土している。一点には、表面に①「(上欠) □様(道様カ) □(斎) 所行米一斛八斗四升」、裏面に②「(上欠) □料米六斗八升別二升、」③「功銭一貫□(下欠)」④「(上欠) 六合人別二夕」⑤「醴一斗八升人別六合 □」との食料・功銭支給に関する記載がある。木簡裏面の②米2升は成人男子に対する1日分の標準給食料である。対象者が30人と比較的多数で、造営事業に関連した支給を記したものとみられる。

小結 今回の一連の調査で、四条から八条まで朱雀大路沿いの状況を縦断するかたちで調査し、多くの知見を得ることができた。

特に、右京五条一坊三町で出土した木簡は、六町でも池状堆積と木簡「細工所飯肆」が出土しており、平安時代前期に付近に造営事業に関連する施設が存在していたことを示唆している。



図 39 右京四条一坊区域調査位置図



図 40 右京五条一坊区域調査位置図



図 41 左京八条一坊区域調査位置図

18 平安京右京五条三坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006- 7 『平安京右京五条三坊跡』 2006.8.31

経過 本調査は、マンション建設に伴うものである。十四町の南西隅にあたり、1町内を区分する四行八門制では、東三・四行、北七・八門の4戸主に該当する。十四町内の発掘調査は今回が初めてとなる。『拾芥抄』収録の「西京図」では、平安時代後期には周辺部一带とともに「小泉荘」となっている。また、調査地周辺には、西院遺跡や西京極遺跡がある。

遺構 弥生時代の方形周溝墓・土坑・溝、古墳時代の建物・土坑・平安時代の建物・柵・道路築地の内溝・宅地内溝・井戸、土坑がある。

遺物 弥生時代の遺物には、方形周溝墓周溝から供献土器と考えられる甕や壺がある。古墳時代の遺物には、土壌墓などから須恵器の杯身・杯蓋、土師器の甕などが出土しているが、量は極めて少ない。平安時代の遺物は、主に井戸や条坊内溝から土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、白磁、青磁、土馬などが出土している。中世の遺物は、水田耕作に伴う落ち込みから多量の遺物が出土しており、土師器、須恵器、東播系須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦器、漆碗、石製品、金属製品などが出土している。

小結 遺構としては、弥生時代中期から後期、古墳時



図 42 調査位置図

代後期、平安時代前期、鎌倉時代から室町時代に画期がみられる。

調査で確認できた方形周溝墓群から、当調査地周辺は墓域の可能性が高い。当調査地は、弥生時代の遺跡の空白地ではあるが、西京極遺跡からは、中期以降多数の竪穴住居や環濠と考えられる溝が見つかっており方形周溝墓群に葬られていた人々の居住域は西京極遺跡にあると考えられる。

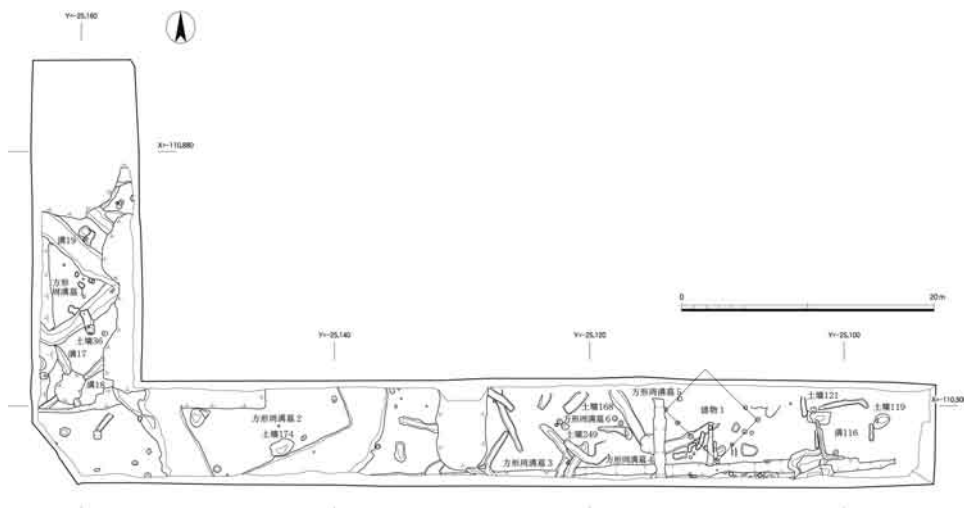


図 43 弥生時代遺構平面図

19 平安京右京六条四坊跡・西京極遺跡 1

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-14『平安京右京六条四坊八町跡・西京極遺跡』2006.11.30

経過 建物建設に伴う調査である。旧御室川と西小路通付近に流れていたと想定される旧河川に挟まれた微高地上で、調査前までは、耕作地として利用されていた。右京六条四坊八町と、弥生時代から奈良時代の集落跡である西京極遺跡に該当する。

遺構 古墳時代中期の竪穴住居 4、古墳時代後期の竪穴住居 5、奈良時代の掘立柱建物 1・竪穴住居 3、平安時代の掘立柱建物 1・柵 1などを検出した。

遺物 縄文時代から近世のものが出土している。そのうち古墳時代後期と奈良時代の遺物が約 9 割を占める。種類別の比率は土器が 9 割を占め、その他、瓦、石製品、金属製品が出土している。

古墳・奈良時代の竪穴住居からはまとめて遺物が出土し、奈良時代の竪穴住居からは平瓦が出土している。

小結 当地の変遷をみると、古墳時代中期末から後期前半頃の竪穴住居にはじまる。古墳時代後期 - II の竪穴住居 149 は、今回検出した中で最も規模が大きく、完形の須恵器有蓋高杯 3 点や、内陸部では稀な製塩土器が出土するなど、他の住居とは異なる特徴をもち、集落の中心的な建物であった可能性がある。

奈良時代の建物はすべて正方位を向く。周辺は、8 世紀には葛野郡の一部となることから、条里地割との関連がうかがえる。周辺調査でも、奈良時代の遺構や遺物の出土が報告されており、一帯が奈良時代の中心的集落の一つであったと考えられる。

平安時代に入ると、平安京域に組み込まれる。今調査では、山小路に面した区画で 9 世紀初頭の掘立柱建物と柵を



図 44 調査位置図

検出したが、遺物量は希薄で、短期間しか利用されなかったことがわかる。

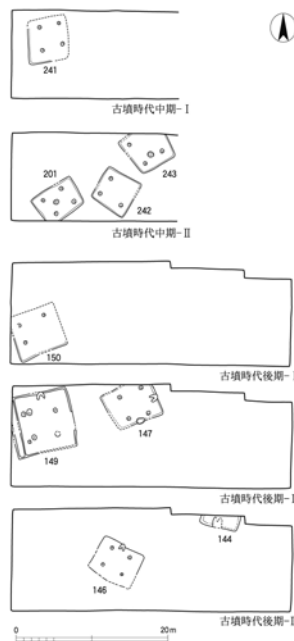


図 45 古墳時代遺構変遷図

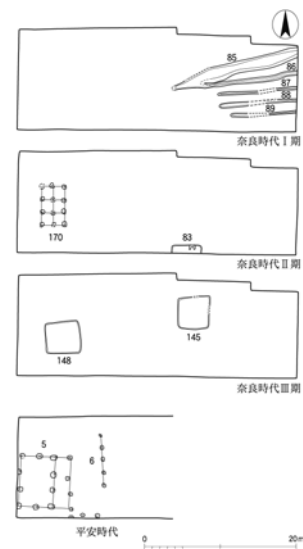


図 46 奈良～平安時代遺構変遷図

20 平安京右京六条四坊跡・西京極遺跡2

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-30『平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡』2007. 3.31

経過 工場の新築工事に伴うものである。北は樋口小路、南は六条坊門小路、東は木辻大路、西は菖蒲小路で区切られる二町にあたる。条坊復元図によると、調査地付近の万寿寺通は平安京の樋口小路をほぼ踏襲している。また、調査地は、弥生時代から奈良時代の集落跡である西京極遺跡にも該当する。

遺構 調査では、弥生時代の竪穴住居8、古墳時代の竪穴住居3、奈良時代の建物3・井戸1、平安時代の柱列・土坑などを検出した。

遺物 土器、土製品、瓦、井戸枠に使用された木材、石器、金属製品、ガラス玉、動植物遺存体がある。時代は縄文時代から近世までのものが出土している。最も多く出土したのは、弥生時代に竪穴住居などから出土した遺物である。

小結 弥生時代後期前半の竪穴住居を8棟検出した。竪穴住居148・428・475・476は、出土土器から数十年間に拡張を含めると、9回建て替えられたことになる。また、竪穴住居214や474は建物の総面積に対して、



図47 調査位置図

堤で囲まれた炉状施設の面積の占める割合が高い。炉状施設の構造についても、連結した深い土坑を持ち脱湿を行うなどの特徴があり、いずれもガラス小玉が出土するなど、一般居住住居とは異なる建物の性格を考慮に入れる必要があるだろう。

奈良時代の遺構はすべて正方位を向く。周辺の調査成果などから西京極遺跡一帯は、奈良時代には葛野郡の中心的集落の一つであったと考えられる。さらに、これらの調査の遺構と出土遺物の内容から見て、近辺に郡の役所などの公的な施設が存在した可能性がある。

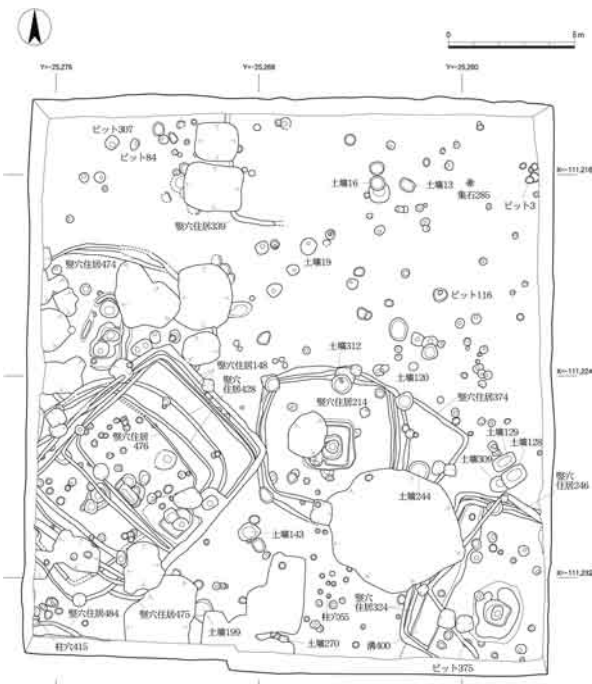


図48 弥生時代遺構平面図

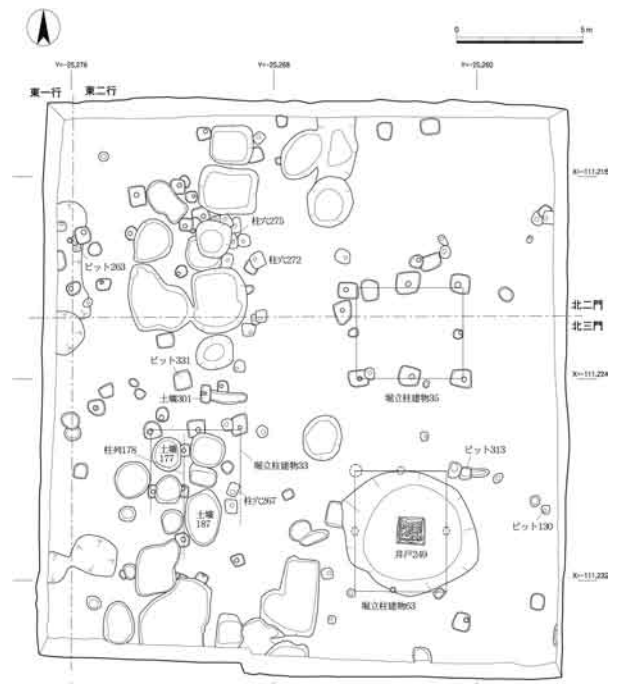


図49 奈良時代遺構平面図

21 平安京右京六条二坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-25『平安京右京六条二坊三町跡』2007.3.19

経過 国道9号線の拡幅工事に伴う調査である。調査地は、三町の北部にあたり、敷地の北側に六条坊門小路、東に西大宮大路、西に西鞠負小路、さらに南方には楊梅小路が推定される。三町のなかでは、およそ北西部の中央付近に位置する。三町は、『拾芥抄』西京図によると「号山荘」であったとされている。号山荘の実態は不明である。

遺構 検出した主な遺構としては、平安時代前期の池、土坑、溝、柱穴、柵などがある。

調査区東部南側で検出した池239は、東西7.7m以上、南北2.8m以上、深さ0.4mを確認している。小石を敷きつめる洲浜をもち、汀はなだらかに南に傾斜していく。北端部に景石が残り、東側寄りには、河原石で護岸した中島がある。中島は東西幅が約2.5mあり、検出した高さは約0.4mである。

遺物 古墳時代の土器類には、旧流路や整地層から出土した土師器、須恵器がある。

平安時代の遺物はほとんどが前期に属し、土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、土製品、瓦類、木製品、金属製品、石製品、自然遺物など多種にわたる。

小結 当地の土地利用がなされたのは、9世紀後半に



図50 調査位置図

はいつてからとみられる。遺構には、新旧2時期の池や柱穴群さらに町の中心部に位置する南北溝などがある。旧期の池（池252）は三町の中央付近に位置していることから、1町規模をもつ宅地の可能性も考えられる。池252が廃絶した後は、新たに池239が東西幅を減少して造られている。この時期には三町の中心部に南北溝196が造られており、三町を東西に分割していると考えられる。

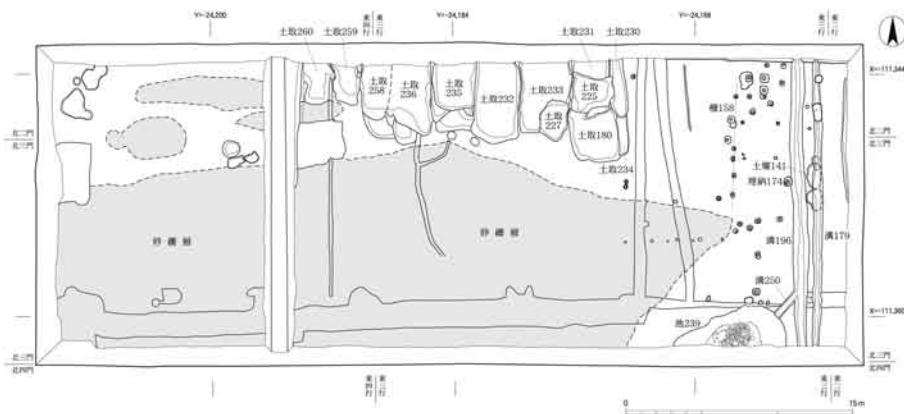


図51 遺構平面図

22 平安京西寺跡・唐橋遺跡

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008. 3.31

経過 今回の調査は、建物の新築工事に先立って実施したものである。対象地は、平安京西寺跡（平安京右京九条一坊十四町）および古墳時代の集落跡である唐橋遺跡にあたる。

遺構 ベースとなる砂礫層ないしは砂層が南から北へ下がる地形を呈し、この上面で平安時代の柱穴、土坑、落込みなどを検出した。調査区の北側約1/3は、深さ約15cmの湿地状落込み1がみられた。柱穴は、3基検出したが、不そろいで並ぶものはない。土坑も大小4基検出したが、遺物を少量含むのみで明確なものはない。

遺物 北へ下がる地形堆積土には平安時代の遺物を包含し、落込み1からは9世紀から10世紀後半の土師器皿・高杯・甕・鍋、須恵器甕、緑釉陶器椀、軒丸瓦・軒平瓦などが出土している。

小結 調査地は主要伽藍域内の北西隅にあたり、西築地に関連する遺構の検出が期待されたが、これに関連する遺構はみられなかった。今回の調査区から約8mほど南へ離れたところで1980年に実施した発掘調査では、地表下約50cmで平安時代の遺構が検出されている。また、北西方向へ約25m離れた地点で実施された1997年の試掘調査の結果では、地表下約80cmで平安時代の遺構が検出されている。当該地はその中間地点となり、南から北に向かって下る地形の中間地点であることがわかった。

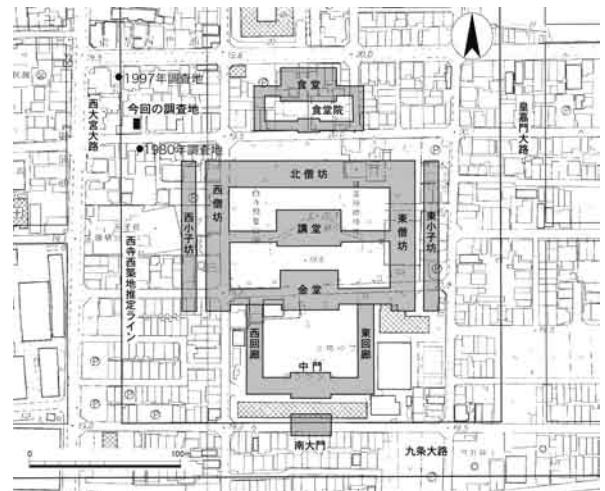


図52 調査位置図



図53 遺構平面図

23 長岡京左京一条四坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-16 『長岡京左京一条四坊十二町跡』 2006.11.30

経過 工場の新築工事に伴う調査である。位置は、十二町の中央北西寄りと想定された。そのため、条坊に関する遺構よりも宅地内における建物遺構の検出を主目的とした。また周辺では、弥生時代から古墳時代の遺構、ならびに河川や流路などの自然地形に伴う遺構も検出されている。

遺構 検出遺構には、流路1と流路2がある。流路1は、出土遺物から弥生時代に属すると推定できた。流路2からは遺物が出土していない。

流路1は、南北長約18.5mある。幅は、0.85mから2m、深さも0.3mから0.85mと場所で異なる。

流路2は、調査区北東隅で検出した東側に落ち込む遺構である。現状で、幅1m以上、深さ0.5m以上ある。

遺物 時期的には弥生土器から中世に属するものまであるが、長岡京期の遺物が約半数を占め、それ以外の遺物は極めて少量である。

弥生土器としては、壺の破片が1片出土している。

古墳時代後期（6世紀）に属するものとしては、須恵器の杯蓋が1点ある。

長岡京期の遺物では、土師器（杯・甕）、須恵器（杯・蓋・甕）、緑釉陶器壺、軒平瓦、平瓦などがある。

小結 主要遺構として南北方向の流路1を検出した。しかし、調査範囲が狭いこともあって、遺構の規模・性格は十分把握できなかった。流路1は、出土遺物から弥生時代中期から後期に埋没したと判断できた。

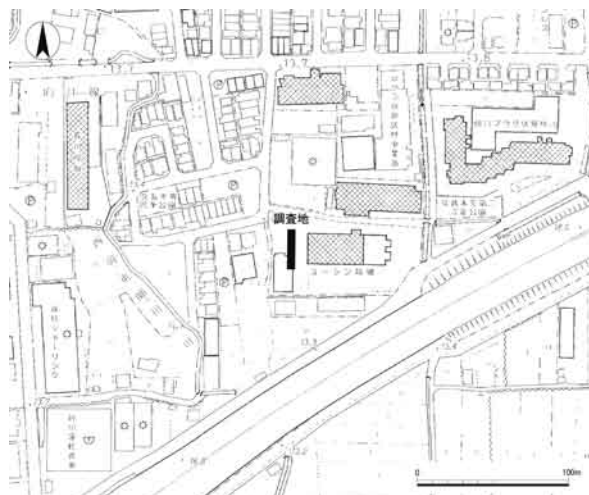


図 54 調査位置図

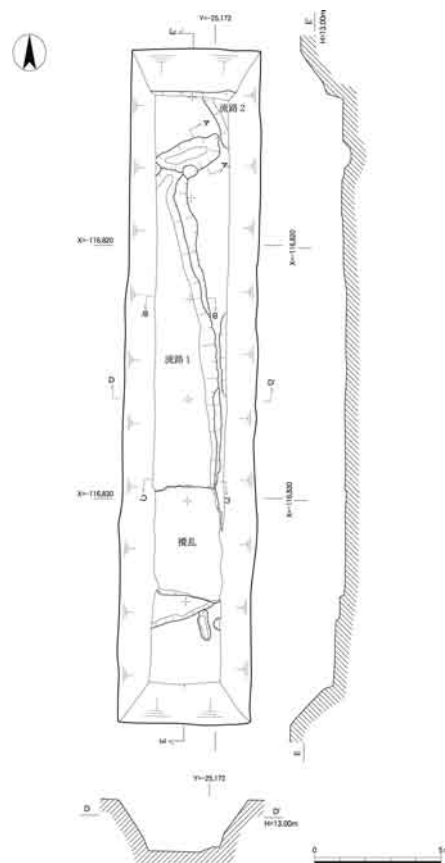


図 55 遺構実測図

24 長岡京左京三条四坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-17『長岡京左京三条四坊十三町跡』2007. 1.31

経過 本調査は、宅地造成工事に伴う発掘調査である。調査区の周辺では、昭和55年に調査区の南側にある森ノ宮第二児童公園周辺において発掘調査を実施しており、古墳時代後期の溝3条、長岡京期の井戸2基、東西溝2条、土坑1基、さらに平安時代以降の溝10数条と河川の堆積層を確認している。今回は、長岡京の条坊に関する遺構の確認に重点を置いたため、調査区を東京極大路と三条条間南小路の交差点付近にAトレンチ（6m×20m）、東京極大路東側溝部分にBトレンチ（2m×10m）を設け、調査を実施した。

遺構 Aトレンチでは、溝と畦を検出したが、中世の遺物片がみられるのみで、長岡京に関連するものはなかった。Bトレンチでも南北方向の溝2条を検出したが、いずれも遺物を伴わないので時代を確定することはできなかった。

遺物 地山面で検出した小溝群とその上を覆う包含層から土器類と瓦類を少量出土したが、いずれも小片である。時期的には長岡京期から中世（鎌倉・室町時代）のものまでである。



図56 調査位置図

小結 今回の調査は、当地が長岡京の東京極大路と三条条間南小路の交差点に推定されることから、条坊関係の遺構の検出が期待された。調査では東西および南北方向の小溝群を検出したが、結果的には全て中世期に成立したものであると考えられる。そしてその性格も耕作に伴うものであるとみられる。

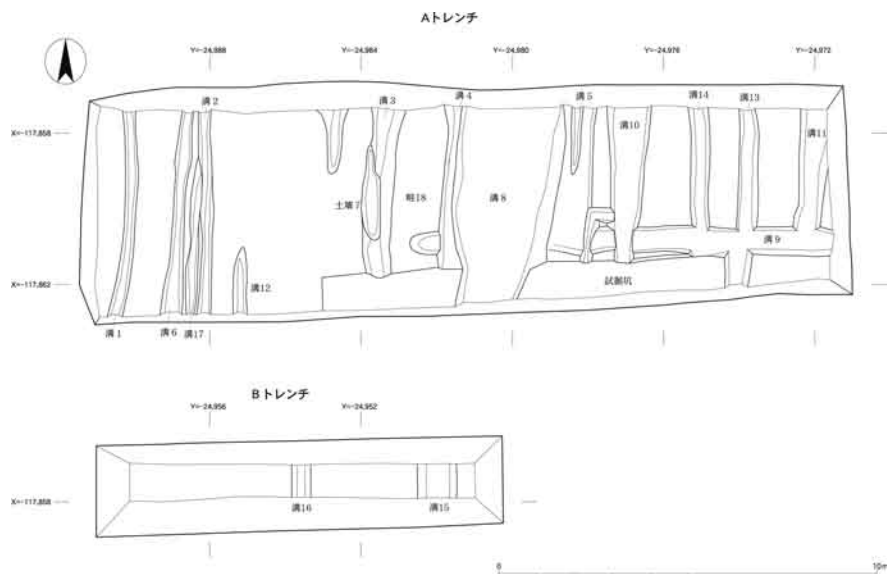


図57 遺構平面図

25 長岡京右京一条四坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-27 『長岡京右京一条四坊十四・十五町跡』 2007. 3.30

経過 調査は中山石見線道路新設工事に伴う調査である。十四町と十五町に該当する。今回の調査地は、現集落部分（1区）と、2004年度調査地の農道を挟んだ北側（2区）で設定した。鎌倉時代から室町時代の石見城跡に関連する遺構を中心に、中世の集落跡の全容が解明できると期待された。また、長岡京に関連する遺構や、旧石器・縄文時代から古墳時代にわたる大原野石見町遺跡の範囲に含まれることから、古墳時代以前の遺構も検出されると予想された。

遺構 1区で検出した遺構は、古墳時代前期と後期の土坑、長岡京期の建物・柵、室町時代（14世紀～15世紀初頭頃）の柱穴群・土坑、江戸時代前期の建物、江戸時代後期の井戸・土坑・溝などがある。2区の調査では、2004年の調査で検出した流路（川3001）は検出されず、比較的安定した地山層が広がる。

遺物 土器・陶磁器類がほとんどを占め、瓦類や銭貨などの金属類もある。弥生時代から近世後期にわたる各時代のもが含まれているが、江戸時代の陶磁器類が大半である。なお、弥生土器は遺構に伴うものではなく、近世後期の整地層から出土している。遺構に伴う遺物として、最も古いものは古墳時代前期のものである。

小結 1区の調査で特筆される点は、長岡京期と推定される建物・柵が検出したことがあげられ、調査区周辺まで何らかの土地利用が行われていたと推定される。

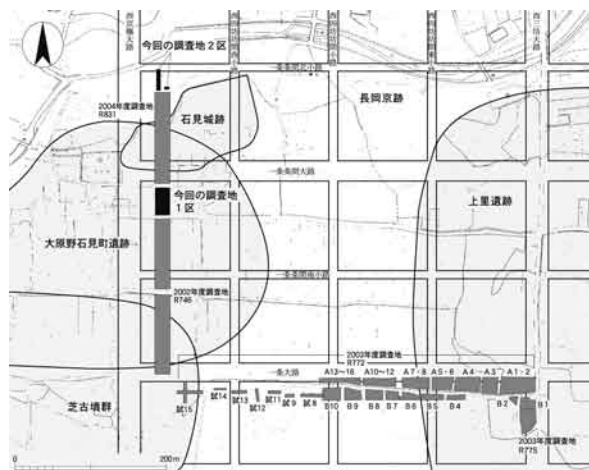


図 58 調査位置図

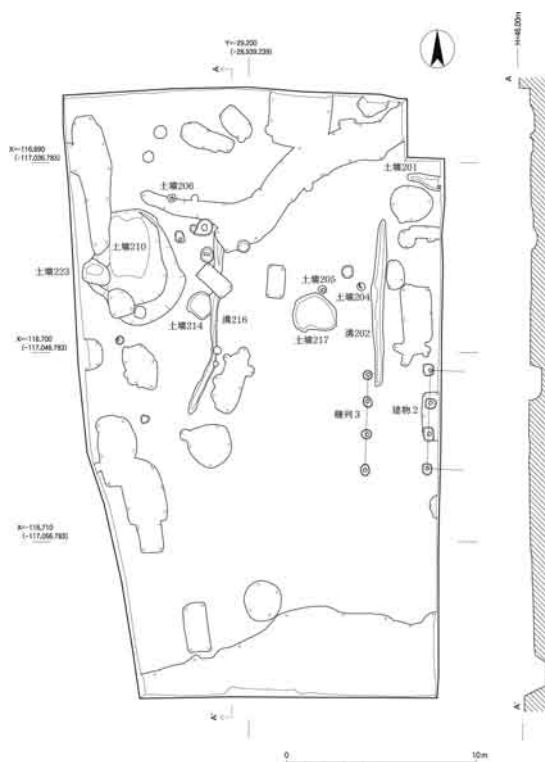


図 59 1区遺構実測図（長岡京期）

2区では、「川3001」が自然流路であれば、今回調査したトレンチで確認できないのは想定しづらく、「川3001」が石見城の北西隅を画する濠の北端部であった可能性も含めて、再考を要する調査結果となった。

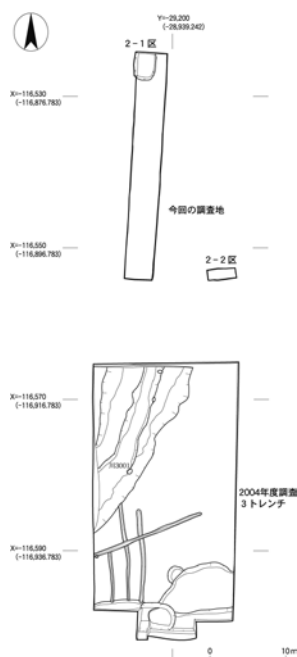


図 60 2区遺構平面図

26 長岡京右京二条三坊跡・上里遺跡 1

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-4 『長岡京右京二条三坊九・十六町跡、上里遺跡』 2006.7.31

経過 伏見向日町線道路建設に伴う継続調査である。右京二条三坊九・十六町にあたり、さらに一条大路・西三坊大路・西三坊坊間西小路が含まれる。また、縄文時代から中世に至る遺跡である上里遺跡とも重複する。調査は、A区・B区・C区に分けて実施した。

遺構 古墳時代では竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑・河川、奈良時代では土坑、長岡京期では掘立柱建物・井戸・柵・築地・土坑・溝・河川などを検出した。

遺物 遺物はそのほとんどが古墳時代から連綿と継続する河川から出土した。他に土坑・溝・建物などからも出土したが、量的には少ない。時期的には古墳時代のものが多く、奈良時代から長岡京期がそれに次ぎ、長岡京期以降の遺物も少量出土した。

小結 古墳時代Ⅰ期（5世紀末）は竪穴住居によって構成された住居群で、河川をはさんで西側と東側のグループに大きく分かれる。Ⅱ-1期（6世紀後半）は方形総柱建物によって構成された倉庫群と考えられる。Ⅱ-2期（6世紀末～7世紀初）の建物は掘立柱建物によって構成される。ほぼ方向をそろえ、同時期の建物とみることが出来る。

長岡京A期の4棟の掘立柱建物群は、いずれも北側柱筋が溝4の中心から約14.5m南に位置していることから、一つの時期にまとまると推定した。



図 61 調査位置図

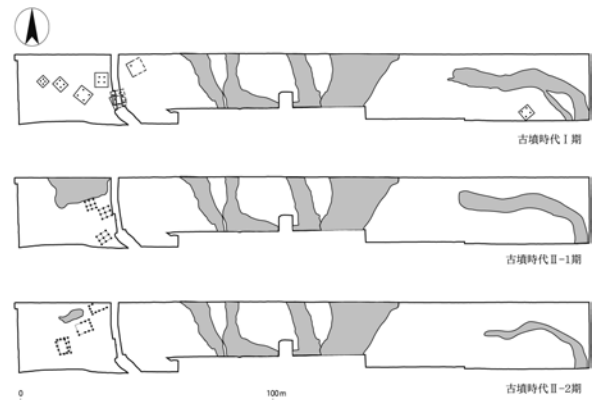


図 62 遺構配置図（古墳時代）



図 63 B・C区全景（長岡京期、西より）

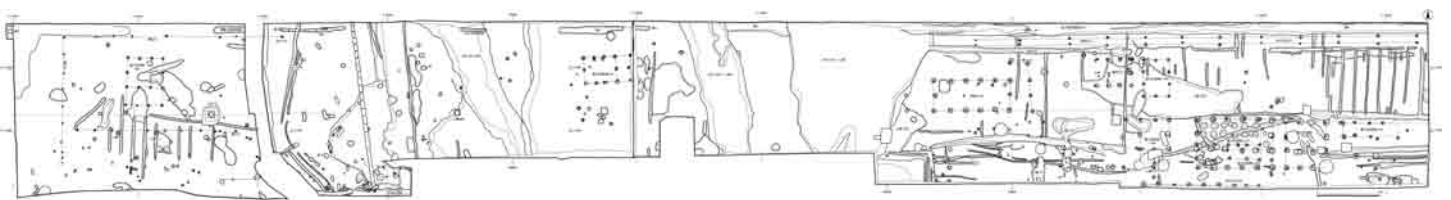


図 64 遺構平面図（長岡京期）

27 長岡京右京二条三坊跡・上里遺跡 2

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-34 『長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡』2007. 5.31

経過 伏見向日町線道路建設に伴う継続調査である。調査区は、中央農道の西側をC区、東側をD・E区とし、さらにC区は農道・水田段差に合わせて、C1区・C2区・C3区に分けた。前掲の東隣の区域を引き続き調査したものである。

遺構 主な遺構を時代順にみると、縄文時代の遺構は、D・E区東半分で検出し、それより西側では見られない。竪穴住居・土器棺墓・土壙墓・柱穴・土坑・落込みなどがある。弥生時代の遺構は、C1区中央からD・E区にかけて検出し、それより西側では見られない。土器棺墓・土坑・柱穴・炉・溝などがある。

長岡京期の遺構には掘立柱建物・溝・築地・柵・道路・土坑などがある。

遺物 縄文時代の遺物が大半を占め、弥生時代の遺物が続き、他の時期の遺物は少ない。縄文時代の遺物には、縄文土器・石器などがある。時期は縄文時代晩期中頃(滋賀里Ⅱ・Ⅲ)が中心である。石器には石斧・石鏃・石棒・石刀・石剣・石皿・凹石・磨石・敲石などがある。弥生時代の遺物には、弥生土器などがある。器形には壺・甕・蓋などがある。時期は弥生時代前期後半(畿内第Ⅰ様式中段階～新段階)である。

長岡京期の遺物には、土器類・瓦類がある。土師器の器形に

は皿・椀・杯・甕があり、須恵器の器形には皿・杯・蓋・壺・鉢などがある。瓦類は軒丸瓦1点の他、丸瓦・平瓦が少量出土した。

小結 今回の縄文時代晩期集落の検出は、これまで類例が乏しく大きな成果となった。集落は小畑川の西岸段丘上に位置し、住居・墓を持つ生活が一定の期間営まれていたことがわかった。次年度以降の調査により、より集落の実態が明らかになるものとみられる。

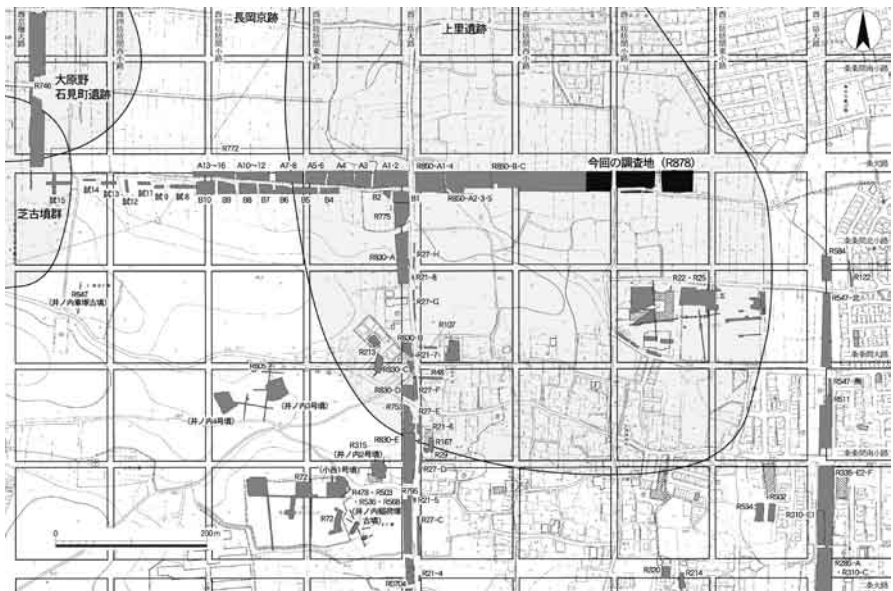


図 65 調査位置図

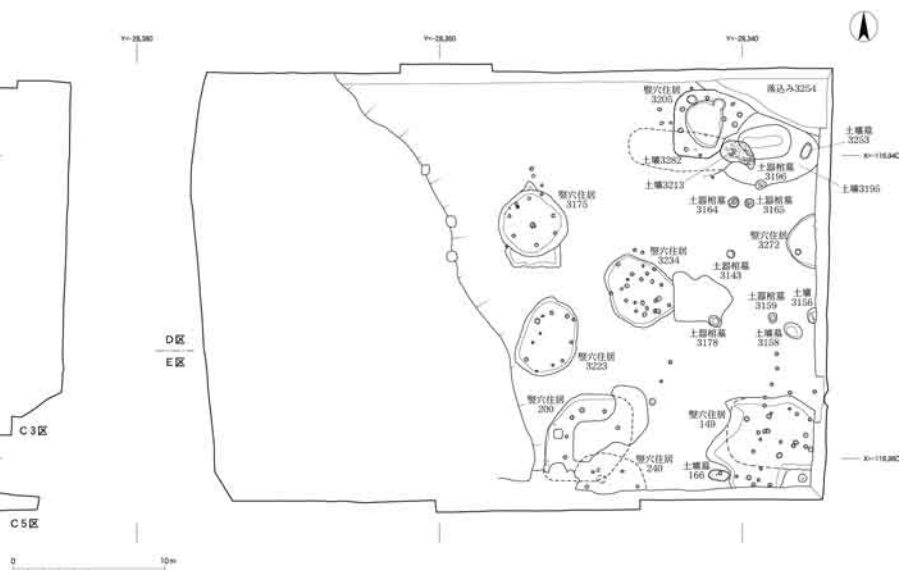


図 66 遺構平面図 (縄文時代)

28 長岡京跡・淀城跡 1

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006- 3 『長岡京跡・淀城跡』 2006. 6.30

経過 淀駅高架工事に伴う発掘調査で、1999年度調査（1次調査）に続くものである。発掘調査は2003年から2005年にかけて2次調査から4次調査を実施した。2・3次調査は、「東曲輪」と呼ばれる地域の北端部分に、4次調査は、「東曲輪」の北端部分と外堀南肩部・外堀・外堀北肩部にあたる。また、当地一帯は、長岡京跡にも含まれ、調査地は旧条坊復元案では左京九条三坊にあたり、新条坊復元案では京外となる。

遺構 2次調査では、調査区南半で、東西に長い大規模な土蔵跡を検出した。3次調査1区では、土蔵の布掘基礎と土坑、柱穴などを検出した。3次調査2区では、8面にもおよぶ遺構面を確認し、17世紀初頭から19世紀後半にいたる変遷があることがわかった。4次調査では、石垣や堀、石列および土坑などを検出した。1区ではさらに古い石垣があることが部分的ではあるが確認できた。

遺物 2次調査では、江戸時代の瓦類が占める。ほとんどが東曲輪北外堀近くの柱穴群などから出土している。3次調査では、江戸時代の土器陶磁器類を多く出土した。4次調査では、平安時代から鎌倉時代、室町時代、桃山時代から江戸時代の各時代の陶磁器類、木製品、金属製品などが出土している。

小結 今回の調査では、平安時代から鎌倉時代の整地層、淀城築城時の整地層直下で16世紀末から17世紀初頭頃の町家遺構、江戸時代の淀城期より古い時期の石垣、東曲輪は1.5m以上の盛土を行って構築、土蔵跡全体の復元など大きな成果を得ることができた。



図 67 調査位置図

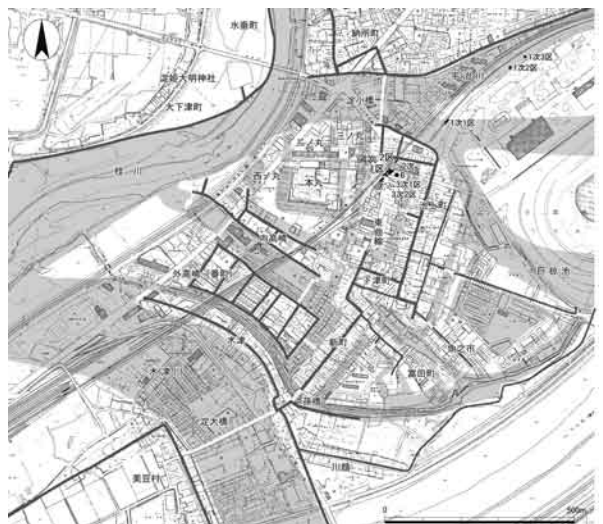


図 68 淀城下町復元図と調査地

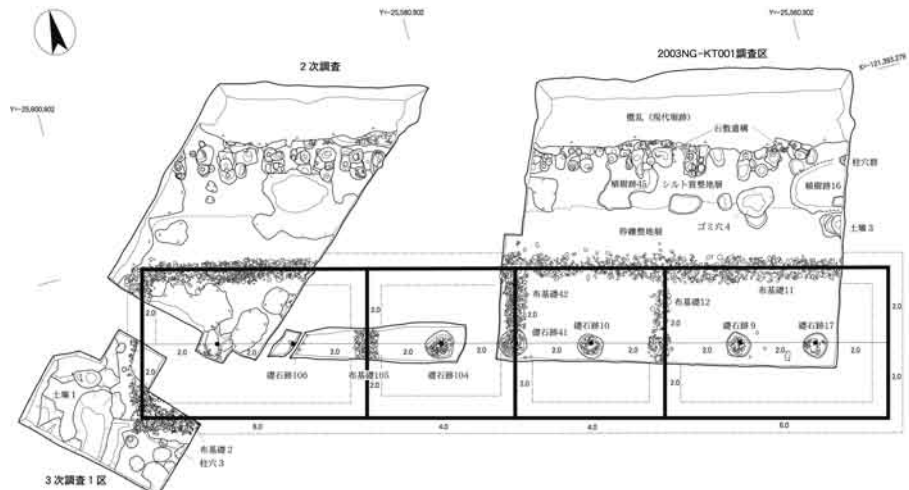


図 69 土蔵跡平面図

29 長岡京跡・淀城跡 2

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-23『長岡京跡・淀城跡』2007. 3.15

経過 淀駅高架に伴う発掘調査で、2006年度の4次調査に引き続いて行った5・6次調査である。5次調査は淀駅の北東約40mの地点、6次調査は淀駅旧構内を中心を実施した。東曲輪内の淀城関連の建物や施設の遺構、淀津関連や長岡京関連の遺構を目的に調査を行った。

遺構 5次調査では、2面にわたり南北方向の路面と路面をはさんで石列を検出した。下層では平安時代・中世の遺物包含層を確認した。

6次調査では、各区で江戸時代前期から後期にかけて造られた堀、建物、柱列、集石、土坑などを検出した。

遺物 平安時代から江戸時代までにかけての遺物が出土した。平安時代には土師器皿、須恵器椀、緑釉陶器碗など、鎌倉時代から室町時代には土師器皿、瓦器碗、焼締陶器甕など、桃山時代には施釉陶器の瀬戸・美濃皿や天目碗、土師質釜、土人形、金属製品など、江戸時代には土師器皿、輸入染付皿、ミニチュア、瓦類、施釉陶器、焼締陶器・磁器、土製品、木製品、漆器碗、鉄製品などの遺物がある。

小結 5次調査で検出した路面や柱穴は、淀小橋から淀大橋に至る街道にあたり、両側には家々が立ち並んで

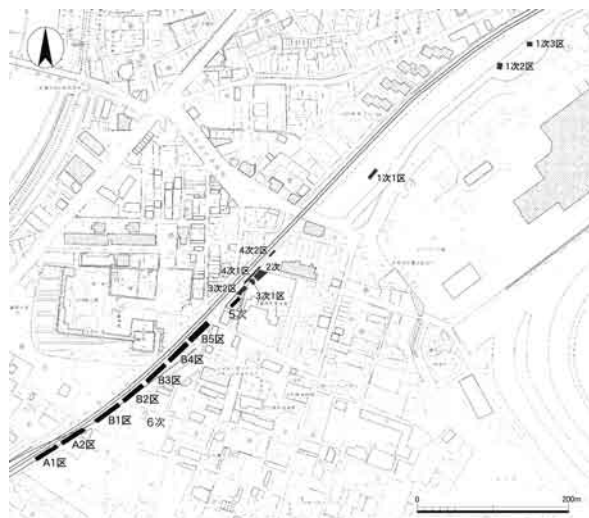


図 70 調査位置図

いたと考えられる。淀城築城に際し、これらの民家を立ち退かせ、東曲輪を造成した結果、大手門東側は空閑地となったとみられ、淀城築城前の遺構の可能性が高い。

6次調査では、内堀、中堀、外堀およびこれらに囲まれる区域の状況がわかってきた。これらには造り替えや区域の性格もうかがえる成果を得ることができた。また、築城に際し、最初に土や砂を互層にして堤状の土手を築いた後、両側に粗砂や砂を互層に盛り土して造成したことが既往の調査を含めて明らかとなった。

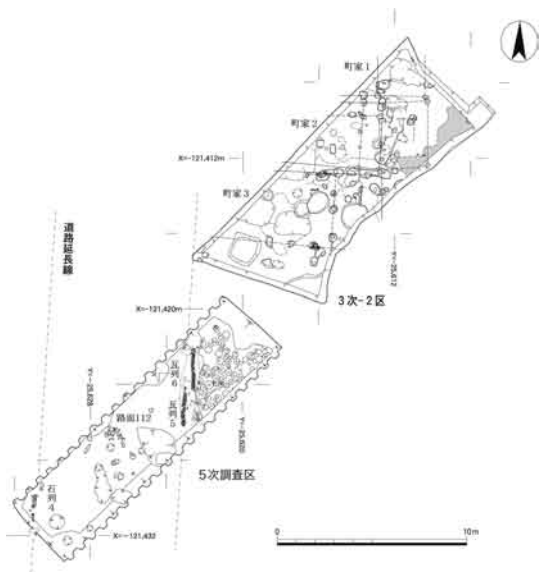


図 71 5次調査平面図（江戸時代初頭）

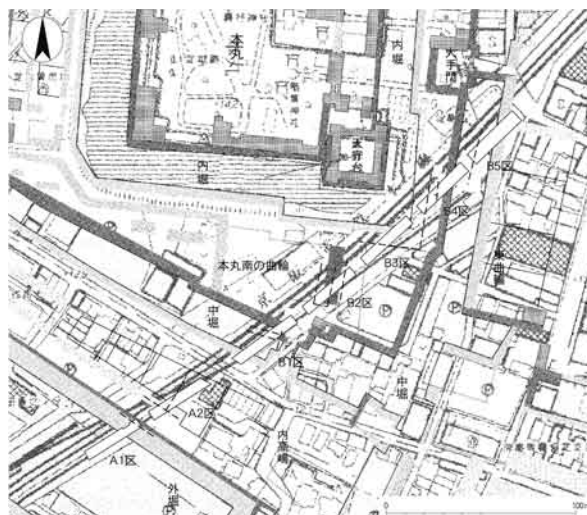


図 72 淀城下町復元図と6次調査区

30 北白川廃寺

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007. 3.31

経過 共同住宅建設に伴う調査である。調査地北側には北白川廃寺が知られており、当地はその南端付近に該当する。また南側の北白川小学校内では、飛鳥時代の集落遺跡が調査されている。さらに本調査地の東約15mでは、焼土を含む土坑が1基検出されており、上記遺構の広がりを確認する目的で調査を実施した。

遺構 **ピット群** 調査区の東半、落込遺構の東肩部は地山上面となる。この面で不定形の落込みを30基程検出した。人為的に掘り込まれた遺構ではなく、植生などによる地層の攪乱とみるのが妥当と判断した。

落込遺構 調査地の中央から西半分を占める。東肩は直線的で、N9°Wの方位をもつ。東肩の傾斜角度は、検出面から約1m付近までは比較的緩やかであったが、それ以下は急激に落ち込む。性格としては、自然地形に生じた段差とみられる。

遺物 大半は落込遺構からの出土である。弥生時代前期の壺、飛鳥時代後半期の土師器と須恵器があり、7世紀後半に属する。瓦類では、平安時代以後の製品とみられる唐草文軒平瓦の小片が1点、白鳳期に属する平瓦、平安時代以後に属する平瓦などが出土している。また、小鍛冶に伴う鉄滓が9点出土している。

小結 落込遺構の性格については、当初、大規模な自然流路や池・沼の肩部、人工的な水路の肩部、自然地形の段差などを想定したが、肩部が直線的であること、肩の傾斜角度が急峻であることは、大規模な遺構の一部であることを示すものといえる。東から西に下がる旧地形に生じた段差が後世に埋められた遺構の可能性が高いとみられる。落込遺構の埋土には飛鳥時代後半期（7世紀後半）の遺物が含まれており、人為的に整地されたことは明白である。

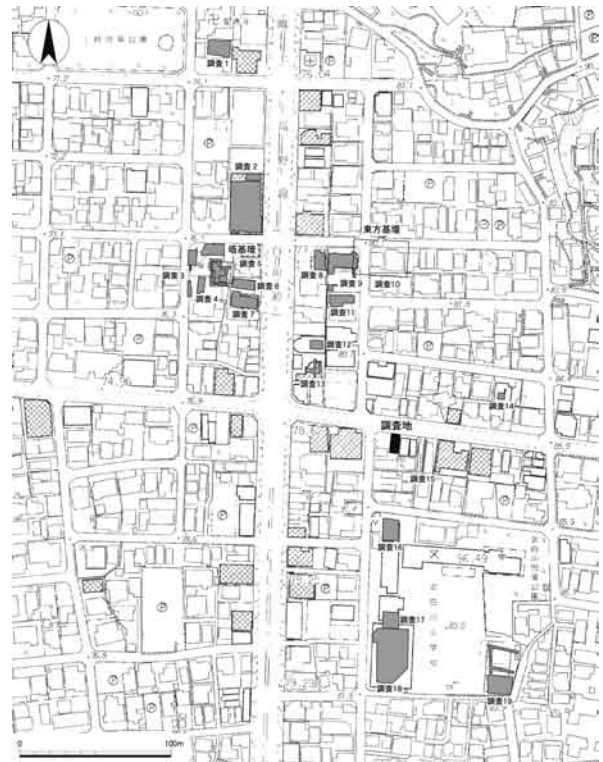


図73 調査位置図

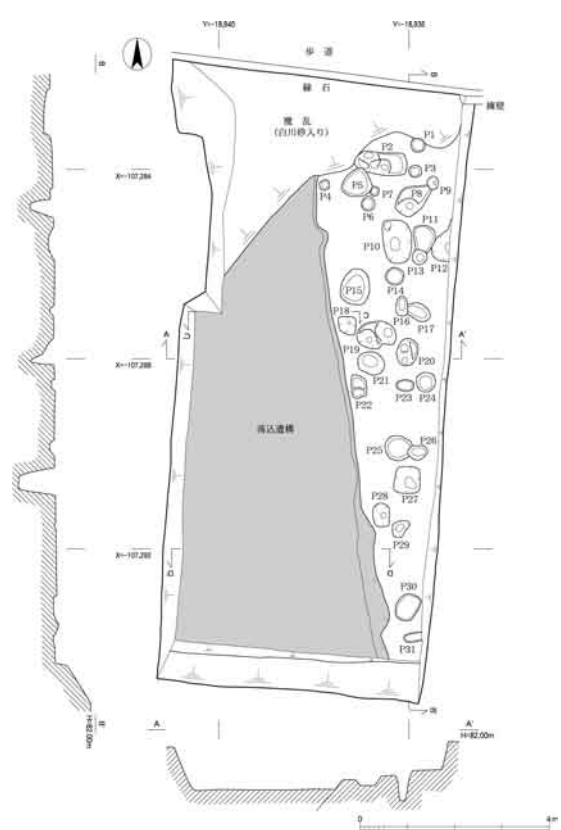


図74 遺構実測図

31 山科本願寺南殿跡

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 18 年度』京都市文化市民局 2007. 3.31

経過 住宅建設に伴う調査である。一帯は、山科本願寺南殿跡に比定され、調査地は、南殿跡の外郭の一部で、内郭の南門に近接した位置にあたる。平成 14 年(2003)の光照寺の東側の調査は、南殿跡内郭の東北コーナー推定部で土塁、濠、暗渠、建物、溝、土坑などが検出されている。

遺構 室町時代後期(戦国)の溝 2 条、建物 1 棟、土坑 3 基、柱穴多数を検出した。SD11 は幅 0.6 m、深さ 0.6 m を測る。東から延びて南方向に屈曲する。SD12 は幅 0.6 m、深さ 0.7 m で、調査区中央、南から北西に延び、調査区西端付近で西に曲がる。土坑 SK18 は径 0.8 m の円形で、深さは 0.15 m を測り、拳大の川原石を密に敷きつめる。礎石据付穴の可能性はある。

遺物 弥生土器壺・甕、須恵器甕、土師器皿、土師質土器甕、須恵質陶器甕、瓦質土器鉢、施釉陶器椀、明染付椀、青磁椀、鉄片、国産磁器椀などがある。

小結 検出した遺構には、建物や溝がある。建物と同時期とみられる土坑 SK16 は底部に石を据え、構築物の基礎遺構とみることができる。これは建物の北側ラインの延長で、約 5 m の位置にある。調査ではこれらの他に、多くの柱穴や根石状土坑などが検出されており、建物の補修・建替えがあったことをうかがわせる。南殿内郭の前面には、同様の遺構がかなりの密度で展開する可能性は高いといえよう。

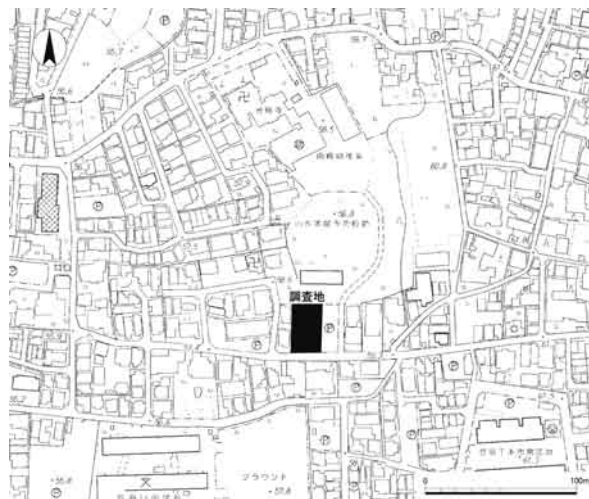


図 75 調査位置図

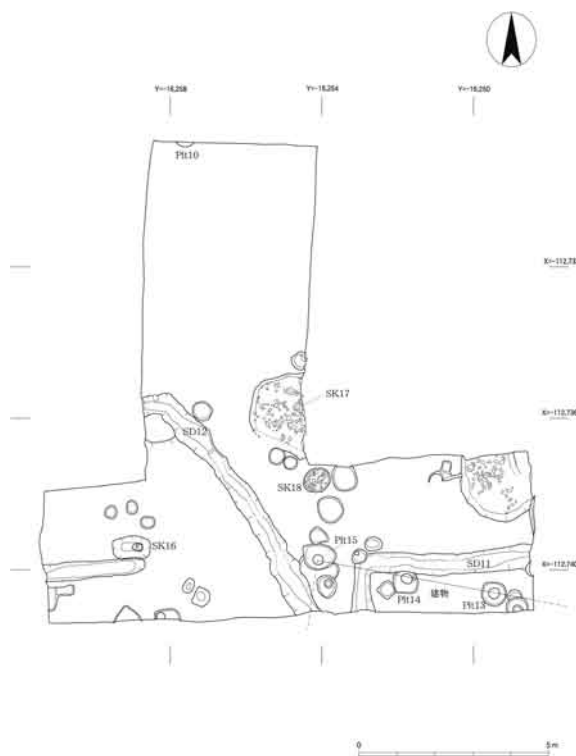


図 76 遺構平面図

32 中臣遺跡 1

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006- 9 『中臣遺跡』 2006. 9.30

経過 宅地造成工事に伴う調査で、中臣遺跡の北東に位置する。中臣遺跡北東部に位置する当該地付近の調査例は、南西側に位置する丘陵頂部にあたる73次調査があり、縄文時代晩期から室町時代にいたる各時代の遺構・遺物が出土している。

遺構 検出した主な遺構には、古墳時代の竪穴住居1棟、古墳時代および平安時代から鎌倉時代とみられる掘立柱建物4棟、柱列2条、溝1条がある。溝211は、北に対して西に約10°振れる南北溝で、幅・深さともに1mを測る。断面形は逆台形を呈し、底部は平坦である。掘立柱建物267は、東西2間(4.2m)、南北1間(2.1m)以上の建物で、柱間は2.1m等間である。掘立柱建物268と重複し、柱穴との重複関係から掘立柱建物267が新しい。掘立柱建物77は、2間×2間の総柱建物になるとみられる。竪穴住居99は、床面までの深さ0.12～0.15m、壁溝の幅0.25m、深さ0.07mを測る。

遺物 縄文時代後期から晩期の深鉢、弥生時代後期から古墳時代初期の甕、古墳時代後期の須恵器杯・甕・甕、奈良時代の土師器杯・甕、平安時代の土師器杯・甕、緑釉陶器碗・皿、灰釉陶器皿、平安時代後期から鎌倉時代の土師器皿がある。土製品では古墳時代の移動式竈、石製品には縄文時代の石錘・凹石・剥片石器と、弥生時代の石斧がある。

小結 遺構のうち、竪穴住居99は出土遺物から5世紀末から6世紀前半、溝211は出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代初期にあてられる。段丘上で検出した掘立柱建物77、柱列270は、時期を特定する遺物の出土はないが、建物の振れが、竪穴住居99と同方位の振れであり、同時期とみられる。

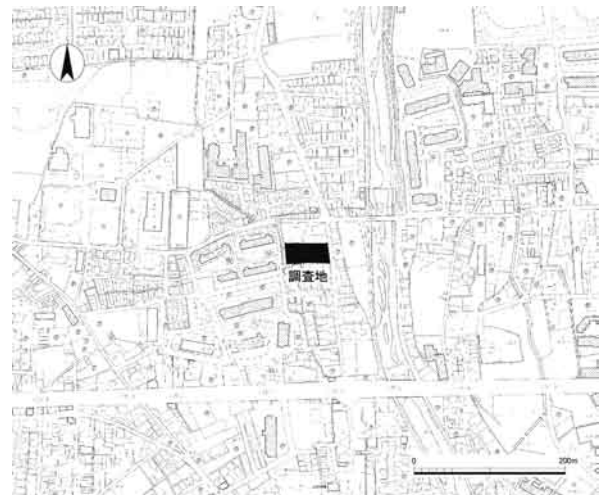


図77 調査位置図

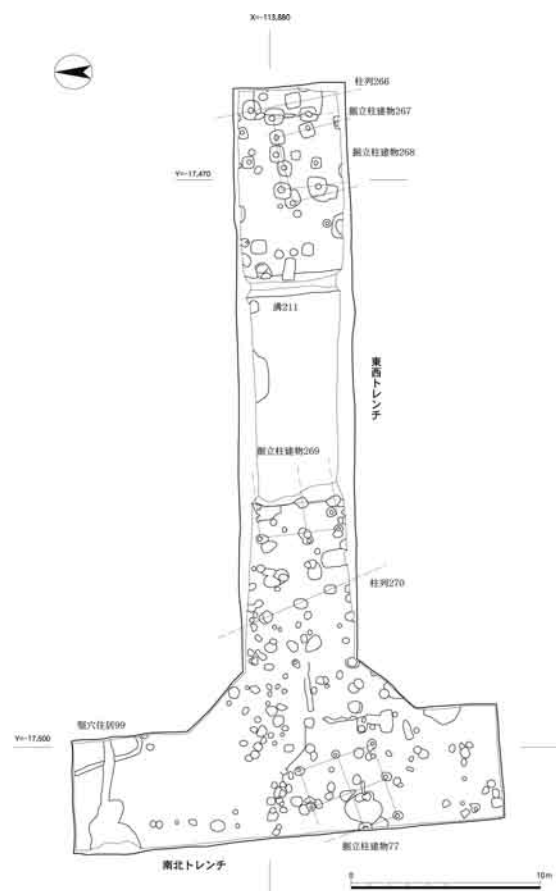


図78 遺構平面図

33 中臣遺跡 2

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 19 年度』京都市文化市民局 2008. 3.31

経過 住宅建設工事に伴い実施した、中臣遺跡 84 次調査である。調査地は中臣遺跡の中央部南西寄りの地点にあり、旧安祥寺川と山科川に挟まれた栗栖野丘陵が、西側に向かって急激に傾斜する低位段丘面に位置する。現在でも北側約 30 mには比高差約 3 mの段丘崖が認められる。

遺構 遺構は、低位段丘の落ち込みと、土坑、小穴が存在するが、風倒木痕や木の根と考えられるものも多い。また、全体に耕作土によって削平されており、遺物を確認した遺構も少なく、時期を特定できるものはなかった。落ち込み 6・7は、低位段丘の落ち込みである。南西を流れる旧安祥寺川とほぼ並行している。確認した比高差は落ち込み 6・7ともに約 0.2 mである。埋土には縄文土器、土師器、須恵器、土師器皿などが出土しているが、細片がほとんどである。区画整理時に田圃造成のため、埋められている。

遺物 縄文時代から江戸時代のものが出土した。内容は縄文土器、土師器、須恵器などである。遺物は極めて少数である。落ち込み 6からは、須恵器、土師器が出土している。飛鳥時代に属するものとみられる。落ち込み 7からは遺物はほとんど出土せず、わずかに縄文土器を 1 点確認したのみである。深鉢の体部とみられる。内外面ともに条痕を施す。縄文時代晩期に属する。

小結 今回の調査では、遺物も少なく、時期の特定できる遺構は確認できなかった。周辺ではすぐ北側で弥生時代後期の竪穴住居が 1 棟確認されているが、全体に遺構は稀薄である。今回の調査結果もこれまでの成果を裏付けることとなった。中臣遺跡内において、活発な土地利用がなされる場所と、ほとんど土地利用の痕跡が見られない場所が存在する。今回の調査地周辺がどのような意味を持っていたのかは、今後の課題である。

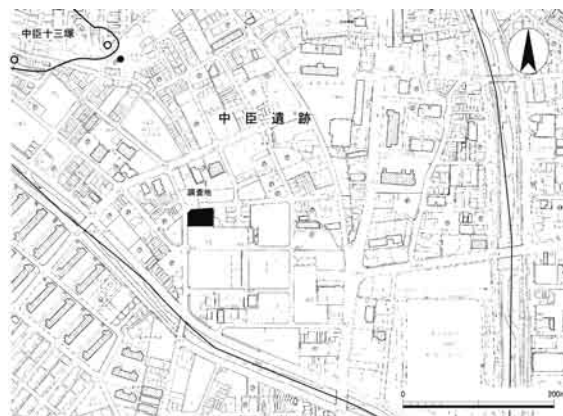


図 79 調査位置図

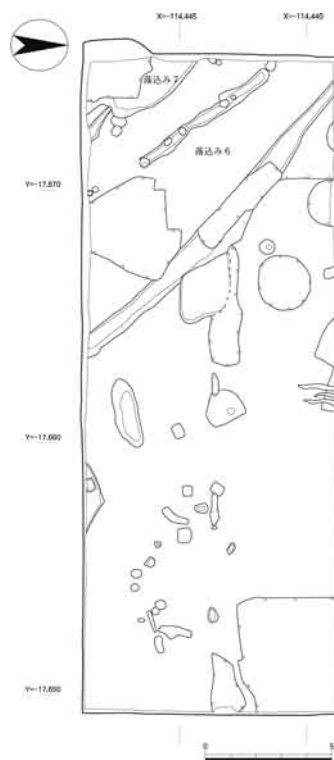


図 80 遺構平面図

34 伏見城跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-27『伏見城跡』2007. 3.31

経過 伏見区総合庁舎整備事業に伴う調査である。調査地は伏見城跡の城下町西部にあっており、周辺の調査成果から桃山時代以降を中心とする遺跡が残っている区域にあたる。調査区は開発対象予定範囲にあわせて調査地のほぼ中央に設定した。作業の進行に合わせて1区・2区・3区に分割して実施した。

遺構 最も古い遺構は室町時代後期で、1区・3区の中央部から西部にかけて溝・土坑・井戸・柱穴、2区で井戸・土坑などを確認した。桃山時代は、城下町の造営が行われ、街路・街区が整備された時期である。この時代の遺構は3つの調査区のほぼ全域に分布する。町造営の痕跡は段差と整地に顕著にあらわれ、段差は南北方向に2区西側から3区東端にかけて検出した。段差上部には大規模な廃棄土坑・井戸などがある。江戸時代には、真福寺という日蓮宗寺院が造られ、これに附属する墓地を検出した。出土した墓碑銘の最も古い元号が元和5年(1619)である。墓の検出数は、これ以降、真福寺が当地を離れる昭和まで、総数600基を超えた。

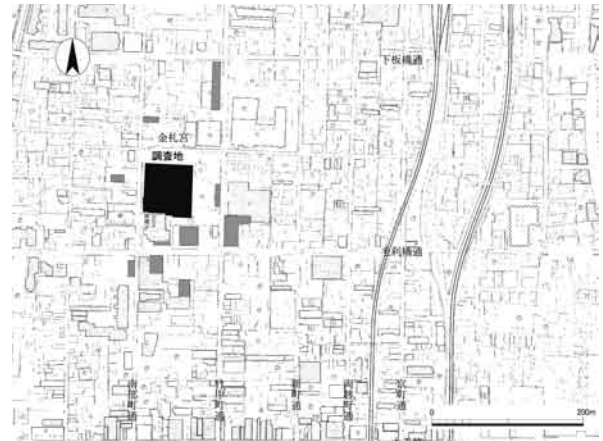


図81 調査位置図

遺物 室町時代後期から江戸時代後期に至る各時代の遺物が多く出土した。土器類、陶磁器類、土製品、瓦類、石製品、木製品、金属製品、骨角製品、ガラス製品、人骨・動植物遺体などの種類がある。大部分は土器・陶磁器類が占め、次いで木製品・人骨が多い。

小結 今回の調査では、室町時代、桃山時代、江戸時代の当地の変遷を明らかにすることができた。伏見城造営以前の状況、江戸時代墓地の検出などを含めて大きな成果が得られた。

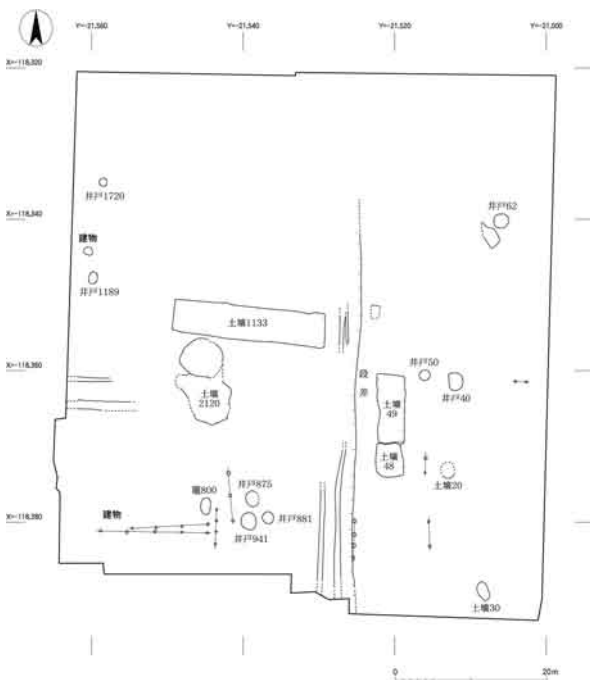


図82 遺構平面図(桃山時代)

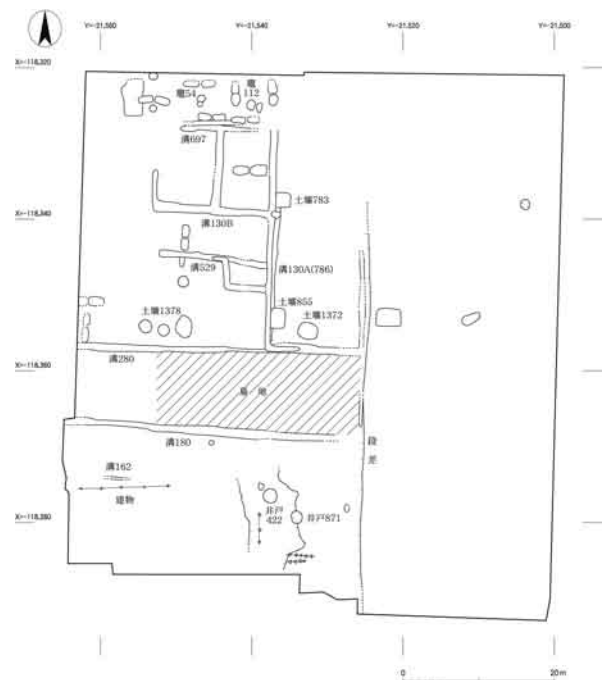


図83 遺構平面図(江戸時代)

35 鳥羽離宮跡

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 18 年度』京都市文化市民局 2007. 3.31

経過 共同住宅建設に伴い実施した鳥羽離宮跡 151 次調査である。

遺構 耕作土直下の灰色粗砂～粘質微砂層の上面で検出した。礎石建物と平行する柱列がある。検出した礎石建物・柱列は、江戸時代後半に位置付けられる。また、最下層で園池に伴うとみられる池の埋土を検出した。

礎石建物 南北 4 間×東西 4 間の建物で、柱間間隔は 0.8～1.2m と非常に短い。礎石据付穴の掘形は 0.5m ほどで、すべての柱穴に拳大の礫を敷き詰めている。

柱列 礎石建物の南側 2.0m の位置で平行して検出した。柱間間隔、掘形の規模も礎石建物と同じである。

池状遺構 地山面までの深さが深くなることが予想されたため、調査区中央部に南北 6 m のサブトレンチを設定して調査を実施し、勝光明院に伴う園池の堆積土とみられる粘土層を確認した。洲浜・景石などは検出していない。

遺物 大半が氾濫堆積とみられる砂礫と粘質土の混土層からの出土で、近世の染付、焼締陶器、施釉陶器などがある。

小結 調査地の東側で行われた 118 次・143 次調査により勝光明院阿弥陀堂とみられる基壇、園池、中島などが明らかとなっている。118 次調査では池に面した建物基壇の南東コーナー部を検出しており、今次調査により北西のコーナー部の検出が期待できた。結果は基壇を検出することはできなかったが、池底の標高が 143 次調査の汀の標高とほぼ同レベルであり、阿弥陀堂の西側にも園池が回り込んでいることが明らかとなった。

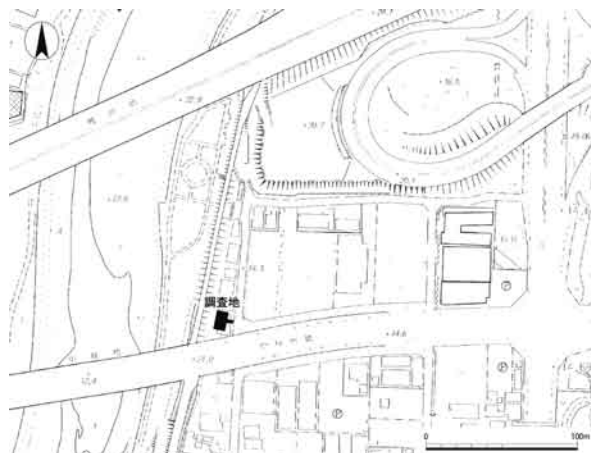


図 84 調査位置図

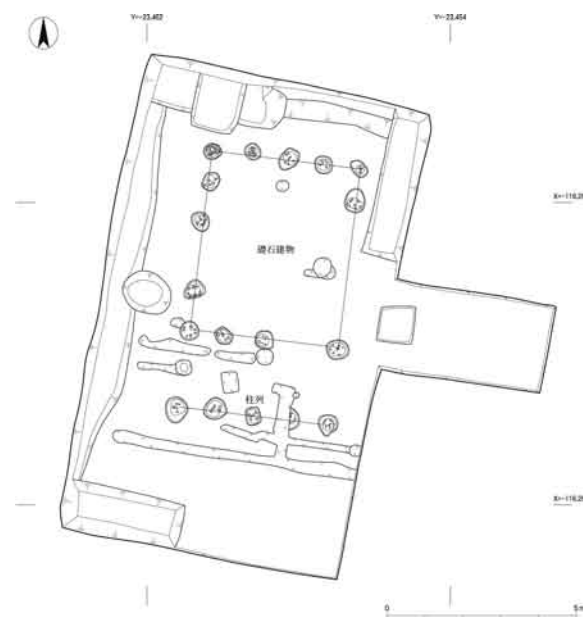


図 85 遺構平面図

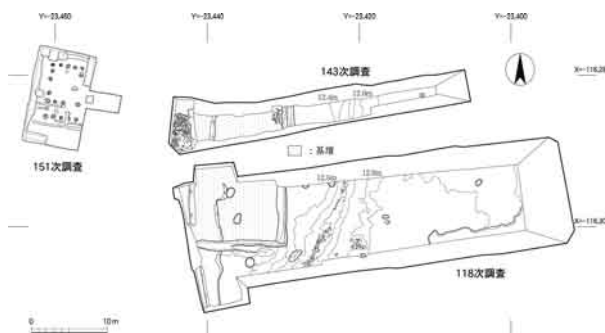


図 86 勝光明院阿弥陀堂跡

36 常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-6 『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』2006.7.31

経過 JR山陰線複線高架工事に伴う発掘調査で、花園駅から太秦駅間の幅3～4mの細長い旧路線が対象地である。東映太秦映画村の東側を南北に通る城北街道(宇多野・吉祥院線)を挟んで、西側を1区、東側を2区とした。また、別に太秦駅の東側で調査を実施し、それを3区とした。

遺構 1区では、飛鳥時代の竪穴住居、中世の南北溝・土壇墓などを検出した。2区では、弥生時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居、飛鳥時代の竪穴住居、平安時代前期の南北溝、中世の土壇墓と人骨を伴う火葬遺構、中世末期の土取り土坑に廃棄された古墳の石室石材などを検出した。3区では、江戸時代の土坑を検出した。

遺物 出土遺物の大半は1区から出土した土器類が主体で、全体では弥生時代から江戸時代までである。瓦類は鎌倉時代が多くを占める。その他の遺物として石製品、金属製品、土製品がある。

小結 今回の調査によって弥生時代中期、古墳時代後期、飛鳥時代の集落跡、中世の墓域などを発見し、嵯峨野の開発過程の一端が明らかになったことは大きな成果である。周辺の調査も含めて考えれば、低地である御室川西岸が弥生時代中期から開発されるのに対し、高地である嵯峨野洪積台地が古墳の造営を除けば7世紀代に入ってから開発された可能性が高いことが判明した。

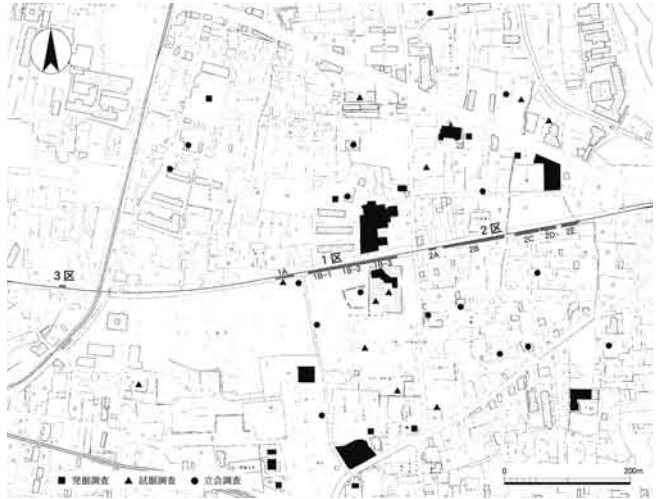


図87 調査位置図



図88 調査状況

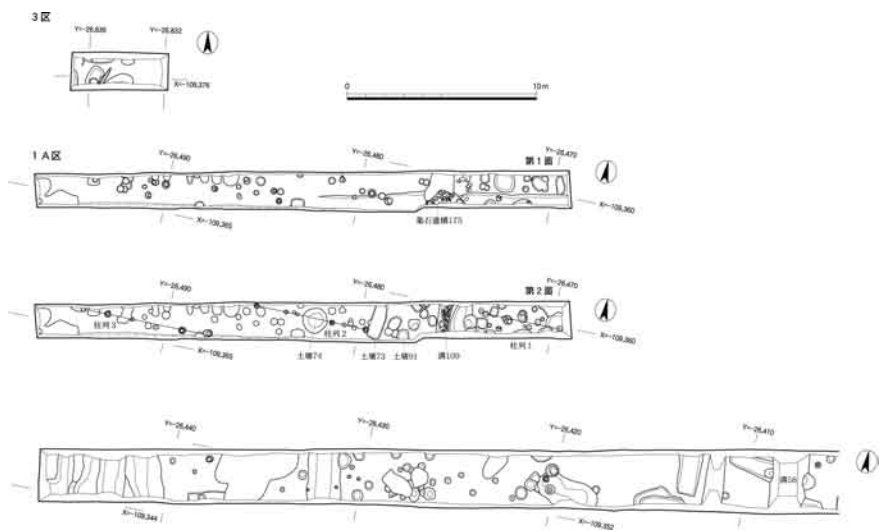


図89 遺構平面図(3・1区)

37 史跡大覚寺御所跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-35 『史跡大覚寺御所跡』 2007. 3.31

経過 調査は、大覚寺防災施設工事に伴う埋蔵文化財発掘および立会調査である。調査範囲である大覚寺境内は史跡に指定されている。そのため、防災工事に伴う埋設管の管路部分については立会調査、増設貯水槽部分については発掘調査を実施した。

遺構 貯水槽部分の調査は、掘削深度が地表下 0.8 m までで、近現代の盛土層の中におさまるため、調査区の西端部を幅 1 m で断割、下層の状況を確認した。結果、地表下 0.85 m で黄褐色砂泥（粘質）層からなる地山を検出した。この地山の上面で東西方向の溝を確認したが、近世末から近代のものである。また、調査区の北部で埋土に白壁の入土坑、瓦溜め、調査区南部で棧瓦を並べた遺構を確認したが、近代のものである。立会調査では、No. 27- 7 地点心経堂の東部分で室町時代中期の土坑を検出した。No. 7- 2 地点は玄関門を入ってすぐの所に位置する。ここでは西半部を近世の石組溝に壊された状態の井戸を検出した。No. 2- 1 地点は明智門を北に入った奥にある宗務庁入口にあたるが、ここで南西方向に延びる石組暗渠を検出した。No. 3- 1 地点でも同様な石組暗渠を確認した。これらの暗渠は境内の雨水を御殿川方向に逃がすための施設ではないかとみられる。

遺物 調査で出土した最も古い遺物は平安時代前期の瓦である。鎌倉時代の遺物としてはNo. 25- 4 地点で検出した鎌倉時代後半の常滑産の甕がある。江戸時代の遺物は境内のかなり広い範囲から瓦類・土器類が出土した。

小結 今回の調査で寺域の北部は地山が地表下 0.35 m 前後と浅く、南に行くに従って深くなり、地表下 0.9 m に達するところも存在することがわかった。この間の土層がほとんど近世や近代の整地層であることから、現在の境内地は近世以降に大きく改変されていることが明らかとなった。

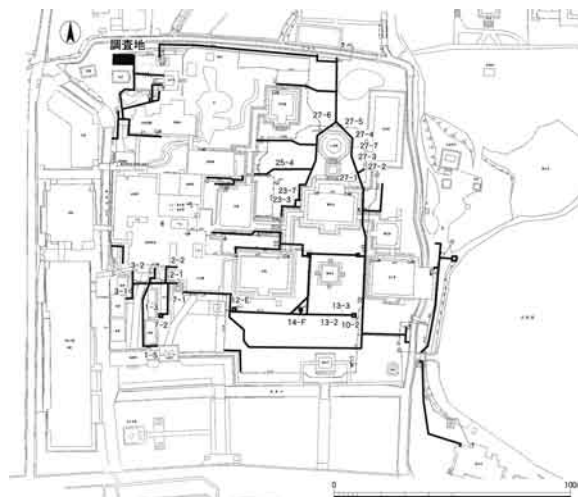


図 90 調査位置図

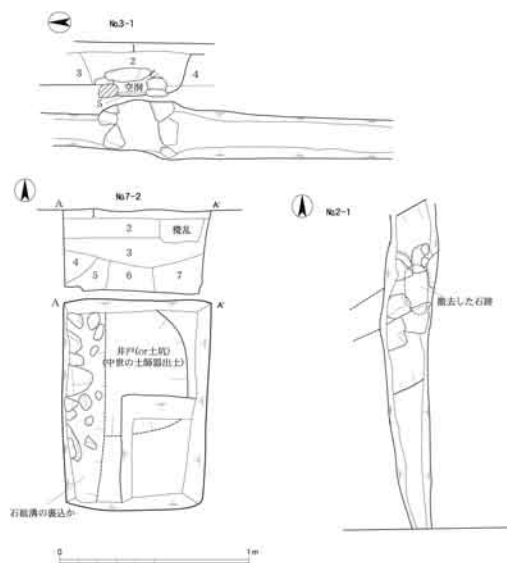


図 91 遺構平面図



図 92 水槽部分調査全景（北東より）

38 史跡・名勝 嵐山

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006- 9 『史跡・名勝 嵐山』 2006.10.31

経過 建築工事に伴う発掘調査である。調査地は、大堰川北岸の史跡・名勝嵐山の範囲内に位置する。平安時代、桓武天皇の頃から皇族の遊獵地が設定され、嵯峨西庄・棲霞観・雄蔵山荘など多くの別業・山荘が付近に造営されている。調査は、都合1区から5区を設定した。

遺構 室町時代から江戸時代の柱穴、石列、土坑、溝、堀、整地層などがある。1区では江戸時代の建物および通路など、室町時代の遺構には堀や整地層などがある。また、鎌倉時代の建物跡も検出した。2・3・5・6区では、室町時代の堀、溝、土坑、井戸、遺構面などを検出した。5・6区では江戸時代の石室や遺構面の検出がある。

遺物 平安時代から明治時代までのものがあるが、最も多いのは室町時代のものである。瓦類が大半を占め、他には土器類、金属製品、石製品、ガラス製品などがある。土器類の出土は少なく、土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器などが含まれる。1区では遺構保存のため室町時代の整地層および大規模な堀は一部のみの掘下げとなったため、遺物の総量は多くない。



図93 調査位置図

小結 西部で検出した鎌倉時代の南北方向の柱列は、北でやや西側に振れる方位をもつ。この方位は、亀山殿の棧敷殿地業単位と同様の方位であり、鎌倉時代の地割に規制された建造物の可能性がある。室町時代の遺構は少ないが、南北方向の大型の堀を検出した。堀は調査区の南北方向に延びていくことが推定され、その方位は天龍寺の伽藍配置と同一の方位である。江戸時代からそれ以降の遺構には南北方向の堀、東西方向の通路、建物があり、大堰川北岸に並ぶ宅地に関連する可能性がある。『嵯峨周辺地籍図』には、この周辺にも都市特有の短冊形地割がみられる。

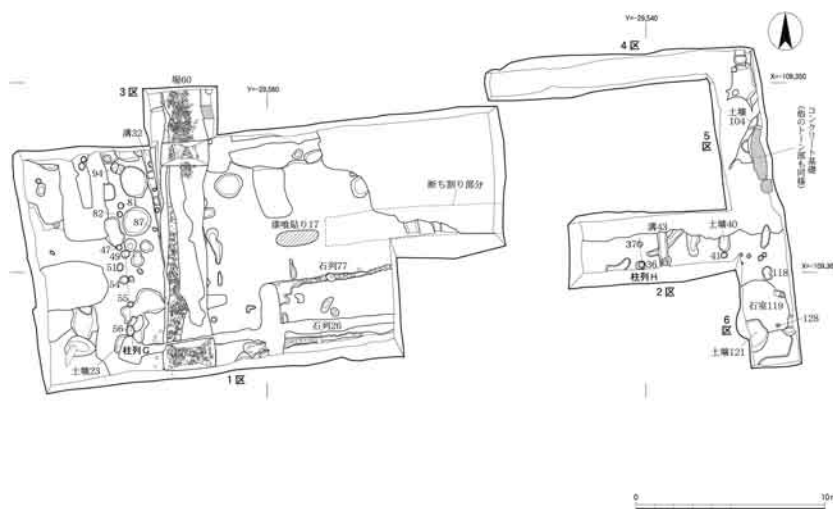


図94 遺構平面図

39 寺戸大塚古墳

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 19 年度』京都市文化市民局 2008. 3.31

経過 寺戸大塚古墳の墳丘確認調査である。この古墳は京都盆地の南西部、向日丘陵上にある古墳時代前期の前方後円墳である。これまでの調査から、全長 98 m、後円部の径 57 m、前方部の幅 38 m、前方部 2 段、後円部 3 段築成の墳丘をもち、その主軸は北に対してやや西側に傾いていることが明らかとなっている。墳丘のほぼ中軸線上に行政区境があり、西半は京都市西京区大枝南福西町、東半は向日市寺戸町芝山となっている。今回の調査は、将来の復元整備に向けての基礎資料作りと墳丘の仮保存処置を実施することを目的とした。後円部西側中央部分に 1～4 トレンチを、さらに西側くびれ部に 5～7 トレンチを設けた。

遺構 2 トレンチは後円部西側中央付近に設けた。南向きの断面で、西から東へ上向きに傾斜する葺石とみられる円礫群を検出し、北側を約 1 m 拡張して円礫群を平面的に調査した。その結果、斜面の下端には径約 50 cm の礫を 4 石水平に並べ、その上にやや小振りな礫を鱗状に積み上げている状況が確認できた。5 トレンチでは、奥壁中央のやや大きめの石が第 2 段斜面基底石のくびれ部における要石で、これを境に前方部および後円部側に基底石が据えられていることなどがわかった。

遺物 ほぼ全てが土師質の円筒埴輪片であるが、二重口縁の朝顔形埴輪の破片も出土した。

小結 墳丘の形状については、2 トレンチにおいて 2 段目の葺石の基底石列を確認することができた。これによって後円部 1 段目のテラスの位置を標高 76.5 m 前後に復元することができた。墳丘の構築法に関しては、墳丘第 2 段目の中程（標高 77.85 m）までは元々の丘陵を整形した、いわゆる地山削り出し整形で、その上は人工的に積み上げた盛土であることがわかった。

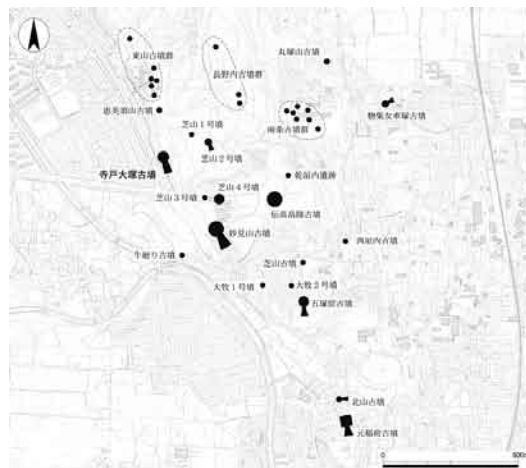


図 95 調査位置図



図 96 遺構平面図

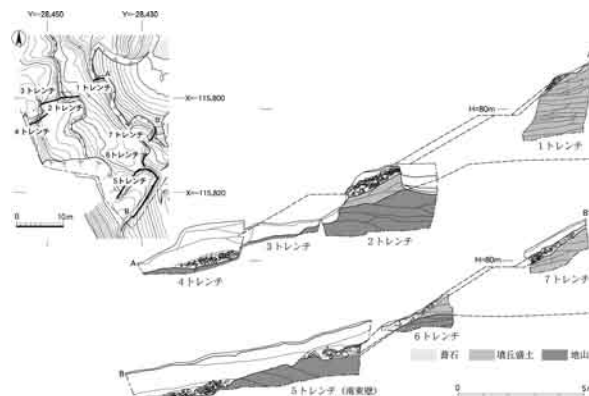


図 97 断面模式図

40 福西古墳群

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006- 5 『福西古墳群』2006. 7.14

経過 集合住宅建設に伴う調査である。当地は、福西古墳群の北側の一画にあたり、対象敷地西側には外観からも古墳石室とわかる巨石が数石露出している。この横穴式石室をもつ古墳は、京都府遺跡地図によると福西6号墳にあたり、京都大学考古学研究会編の『嵯峨野の古墳時代』では4号墳にあてられた古墳で、京都市遺跡地図台帳では29号墳に該当する。周知の古墳（29号墳）のほか、新たに横穴式石室をもつ古墳（32号墳）を1基確認するにいった。

遺構 29号墳は、調査区外にある横穴式石室を主体部とする古墳で、天井石とみられる2石と、その下部にやや小さめな石が露出している。石材はすべてチャートである。石室の北・南・西側は土取のため削平されており、今回の調査区の東側は比較的旧地形を残している。墳丘および封土は、果樹園造成のため露出する石室の基底あたりまで土取されているものとみられ、石室部分のみ盛り上がった状態を呈している。周溝は、一部断割で確認を行い、幅1.8～2.5m、深さ0.3～0.55mであることがわかった。32号墳は、29号墳の東側約11mの地点で発見した横穴式石室である。墳丘および封土はなく、ほぼ表土直下で石室石材を検出している。墳丘を構成する封土は石室の西側で確認することができた。石室西側は掘形が認められず、版築状に積み上げて石室を構築していったものと考えられる。

遺物 29号墳周溝から須恵器甕口縁部1点、32号墳敷石面で須恵器壺、杯身4点が、敷石面より浮いた状態で須恵器杯身、杯蓋が出土している。

小結 32号墳は長さ3.8m、幅1.1mを測る南東方向に開口する横穴式石室とわかった。石室敷石面から出土した須恵器杯から7世紀中葉を前後する築造時期を求めることができ、福西古墳群には、いわゆる終末期の古墳群も展開していたと考えられる。

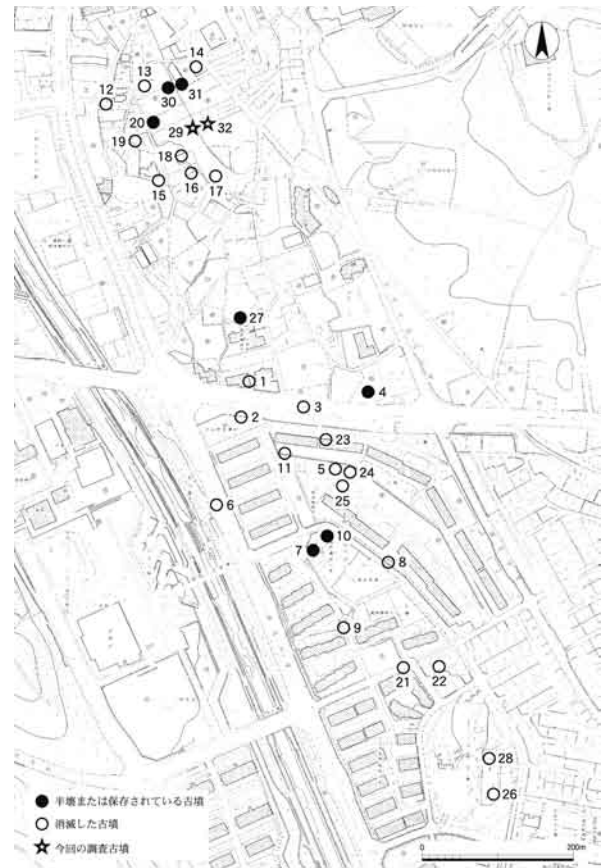


図98 調査位置図

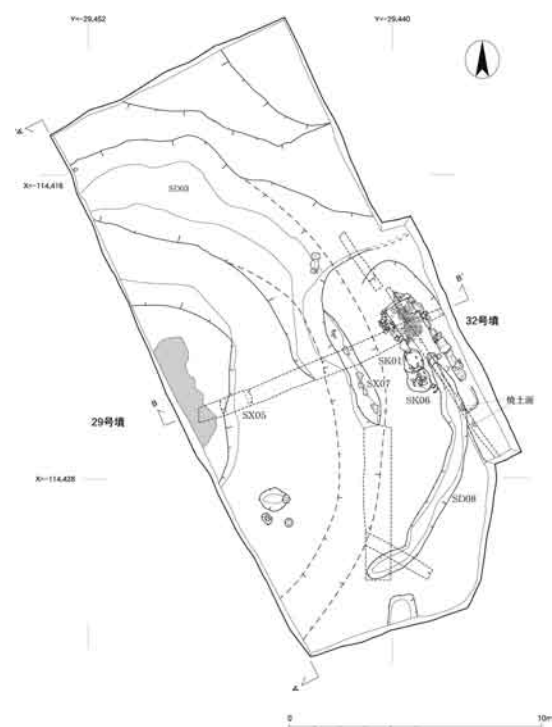


図99 遺構平面図

41 中久世遺跡・大藪遺跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-19『福西古墳群』2007. 2.28

経過 宅地造成工事に伴う調査である。当該地区は大藪遺跡と中久世遺跡の比定地内に含まれる。付近では、弥生時代から奈良時代にかけての遺構や遺物が確認されている。

遺構 弥生時代の方形周溝墓、平安時代の土坑、室町時代の建物などを検出した。弥生時代の方形周溝墓は2基検出した。周溝墓1は東西約8m、南北約9mを測り、南北の軸線を北北西に傾ける。周囲の溝幅は0.7～1.0mで、深さは0.1～0.6mを測る。周溝墓2は、東辺・西辺・北辺の周溝を検出したが、南辺の周溝は未検出である。周溝の深さは0.1m前後を測る。規模を復元すれば東西9.5m、南北10m前後とみられる。平安時代の土坑は、調査区東辺中央で2基検出した。土坑1はほぼ円形で、径0.7m、深さ0.5mを測る。底部のやや北西寄りでは完形の黒色土器碗が1点出土した。土坑2は楕円形で、南北0.5m、東西0.4m、0.6mを測る。

遺物 弥生時代の土器は壺・甕・鉢がある。主として方形周溝墓1の溝内から出土したものである。平安時代の遺物は土師器皿、須恵器杯・鉢、黒色土器碗、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、白磁碗・皿がある。

小結 弥生時代には、付近の状況から方形周溝墓がこの一帯に群として展開しているものと予想できる。出土遺物は、畿内第V様式の中段階のものである。平安時代の土器埋納遺構は、耕作にかかわる地鎮、収穫を祈念した祭祀用の土坑とみられる。

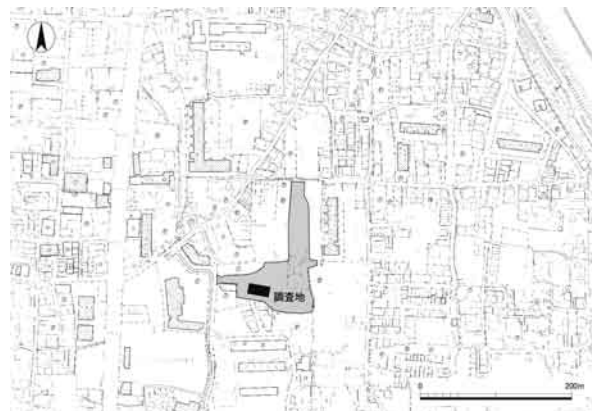


図 100 調査位置図



図 101 調査地全景（西より）

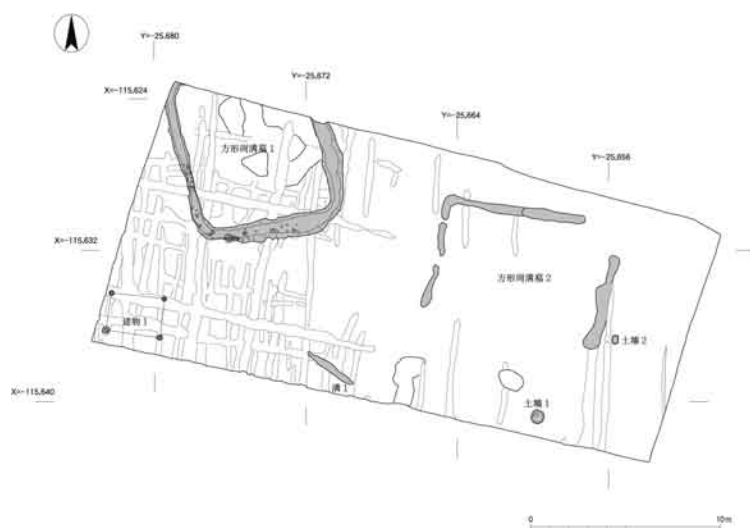


図 102 遺構平面図

42 大藪遺跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-32『大藪遺跡』2007. 3.31

経過 建物新築工事に伴う調査である。当地は、弥生時代から江戸時代に至る大藪遺跡、中世居館跡とされる下久世城跡推定地にも該当している。近辺では、これらに関する遺構が多数確認されている。

遺構 検出した遺構は、弥生時代後期、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代、江戸時代の4期に大別できる。主な遺構としては、弥生時代後期の竪穴住居・溝、平安時代後期から鎌倉時代の柱穴、室町時代の堀・建物・柱穴などがある。

遺物 弥生時代の遺物としては、住居や溝から後期の甕・壺・高杯・器台・鉢などの土器に加えて、住居から多くの石製品が出土している。打製石鎌・磨製石鎌・石剣・石包丁の製品、未製品などである。また、石器を加工するためと考えられる敲石、砥石も出土している。平安時代後期から鎌倉時代の遺物としては、柱穴から土師器皿、瓦器椀、輸入磁器、東播系陶器の鉢などが出土している。室町時代の遺物としては、建物や堀から土師器皿、瓦器鍋、焼締陶器、輸入磁器、平瓦などが出土している。

小結 弥生時代の竪穴住居（竪穴104）を検出した。この住居はいわゆる「焼失」住居で、住居内の遺物が炭化材の下敷きとなっていたことから、失火で失われた可能性が高い。住居の特徴としては、径8.6mと一般的な住居よりも大型で、中央部分に径2.5mにおよぶ炉堤を設けた炉（炉119）を有している。炉堤は土を盛り上げて成形したものではなく、地山を掘り残して成形されていた。また、内部には防湿のために灰を敷き詰めたと思われる土坑（炉120・121）も存在する。こうした計画性や炉の規模は、炊事に伴う煮炊きが目的の炉にはそぐわず、火を用いた工房施設を想定させるものである。

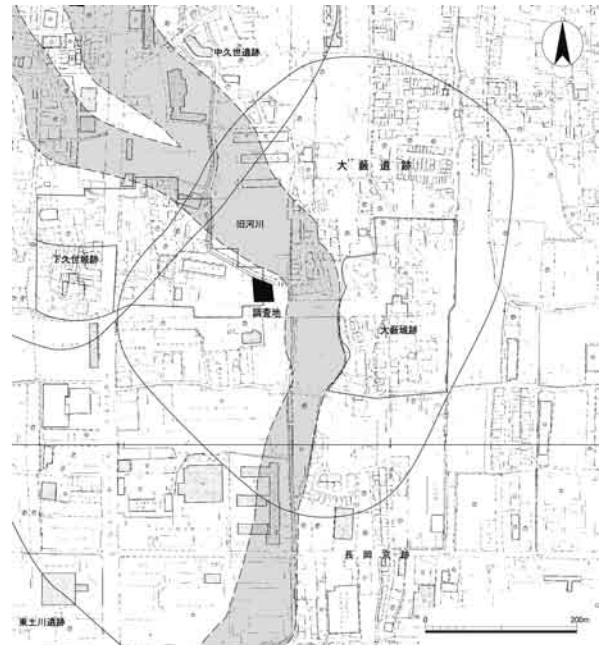


図103 調査位置図

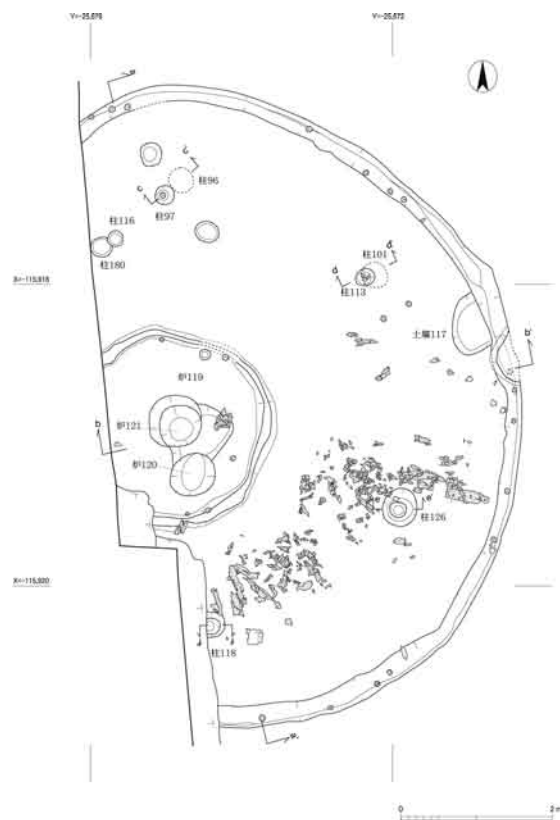


図104 竪穴住居跡平面図

43 特別史跡・特別名勝 醍醐寺三宝院庭園

経過 庭園修復事業に伴う確認・立会調査である。平成 14 年度から調査を開始し、今年度は 5 年度目になる。

調査は、平成 16 年度の調査で池の西端において発見した木樋から、東へ続く溝の延長を探る調査である。木樋の東側には、園池の底に素掘りの溝が東進していることがわかっていた。園池には、西部に亀島と鶴島の 2 島があり、木樋のある池尻からは池北岸と亀島の間、亀島と鶴島の間、鶴島と西岸の間の 3 箇所狭隘部があり、池の東部とつながっている。溝はこの狭隘部を通っていると仮定し、12～14 トレンチを設定した。

また、昨年度に引き続いて、三段の滝西側付近からの東岸および純浄観前の北岸、南西隅の入り江である南岸の整備工事に伴う立会調査を行った。

遺構 今年度の主な調査成果としては、以下のことがわかった。

- ・14 トレンチで、古い時期の池底と、南北方向の溝状遺構を検出した。

- ・池北東付近の池底に、留石を据え付けた痕跡と考えられる、褐色粘土が詰まった土坑を検出した。

遺物 大半は、江戸時代の土師器や瓦片である。細片であるため、細かい時期を特定するには至っていない。北岸東側の池底出土の桶直上層から、平安時代末から鎌倉時代頃の土師器皿片や灰釉陶器椀片、白磁椀片が出土しているが、18 世紀後半とみられる土師器皿片と一緒に出土しており、二次堆積したものと考えられる

小結 12・13 トレンチでは、排水溝の延長を確認することが

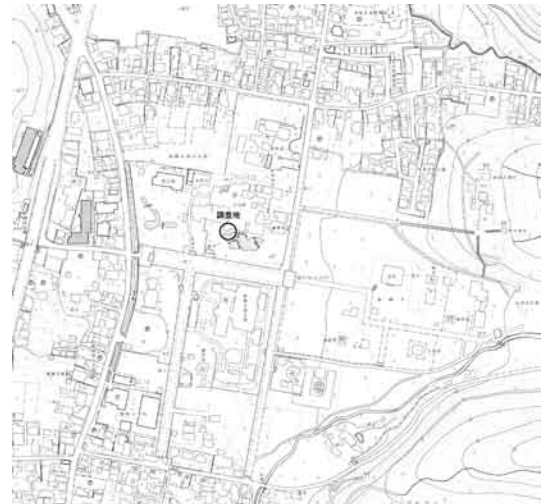


図 105 調査位置図

できなかつた。亀島の北側と、亀島と鶴島の間には溝が通っていないと考えられる。14 トレンチでは、南北方向の溝とみられる遺構を検出した。ボーリング棒で確かめた深さが既調査検出の溝の標高値とほぼ同値であるという結果から、排水溝の続きではないかと考えられる。(近藤 奈央)

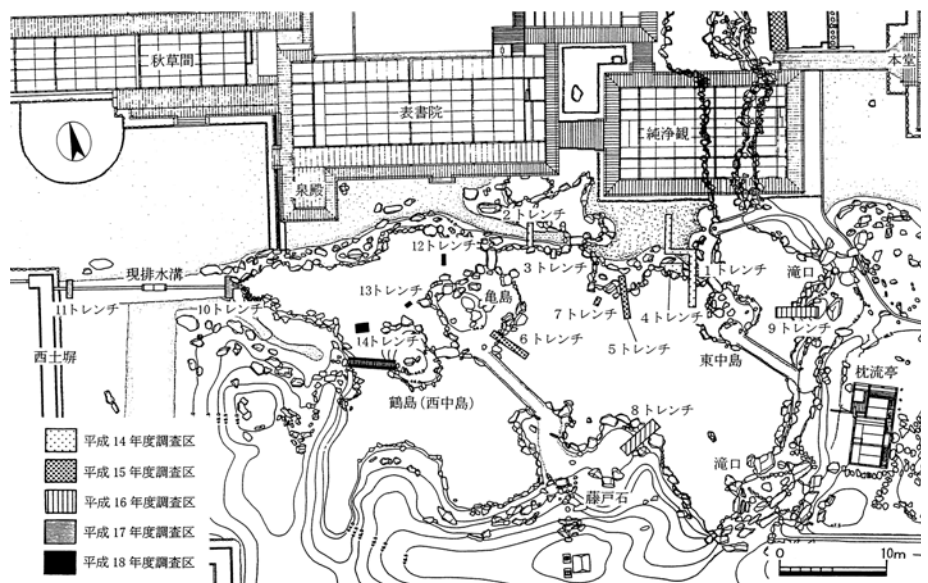


図 106 トレンチ配置図

44 平安宮朝堂院跡

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007. 3.31

経過 建物建設に伴う調査である。調査地は、平安宮朝堂院跡にあたり、大極殿の東側に付属する蒼龍楼とそこから東へ延びる北面回廊部分に相当する。調査区から一軒おいた東側では、平成2年度の調査で回廊の北東コーナー一部を検出しており、このことから関連する遺構が遺存していることが期待できた。

遺構 平安時代の遺構は溝状遺構（SX 4）である。南側の肩部のみが残存し、北側は現代の攪乱で壊されている。その位置は大極殿北回廊の北端にあたるが、埋土などの状況から雨落溝ではなく、基壇化粧に伴う掘形の一部とみられる。調査区の南部では、砂礫層上面が落ち込む箇所を壁面で検出し、一部拡張して落ちのラインが東西方向へ延びることを確認した（SX 5）。調査区北部の溝状遺構（SX 4）からこの落込み（SX 5）までの距離は約12mである。

遺物 平安時代の遺物は土器類と瓦類が出土しているが量は少ない。土器類は土師器と須恵器の破片が、瓦類は丸瓦と平瓦が出土している。また、瓦には緑釉を施釉したものが認められ、全て丸瓦である。

小結 SX 4からSX 5までの距離約12mはこれまでに確認している朝堂院回廊の幅とほぼ等しい値で、砂礫層の高まりが基壇の形状を残しているものと理解している。



図107 調査位置図

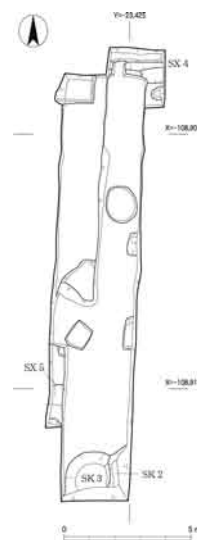


図108 遺構平面図

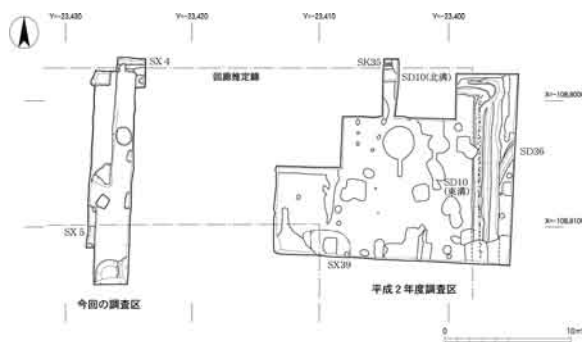


図109 回廊復元図

II 平成 18 年度の試掘・立会・確認・分布調査の概要

平成 18 年度に実施した試掘・立会・確認・分布調査は、表 1 に示した 13 件である。このうち、京都市内遺跡を対象とした立会調査の報告については、別途報告書が発刊されておりそちらを参照いただきたい。13 件のうち、8 件の報告を本書に掲載した。

今年度の調査では、史跡本願寺境内の整備事業に伴う調査（Ⅱ - 2・4）、同境内の名勝滴翠園（Ⅱ - 3）などを実施した。同境内では、建物建設に伴う調査や防火施設整備に伴う調査などが一連で実施されており、今後、当地の平安京跡や本願寺の成立およびその変遷が明らかになっていくものと期待される。

名勝関係では知恩院方丈庭園の確認調査（Ⅱ - 6）を昨年度に続き実施した。

その他、電線共同溝工事に伴う立会調査（Ⅱ - 1・5）を京都御苑近辺で実施した。

1 平安京跡・旧二条城跡

経過 本調査は電線共同溝工事に伴う立会調査である。調査範囲は烏丸通の中立売〜烏丸丸太町交差点（上京区竜前町・鷹司町・桜鶴岡町・堀松町・春日町・常真横町地内）の西側歩道約350mの間である。掘削規模は、試掘／縦0.8m×横2.8m（歩道幅）×深さ1.25m、照明柱基礎工事／縦1.8m×横1.4m×深さ約1.4〜1.7mである。調査記録として断面撮影及び断面図6面・柱状図19面の合計25面を作成した。

烏丸通一帯は、1974〜76年にかけて地下鉄烏丸線建設工事に伴う発掘調査及び立会調査が行われており、各時代の遺構が濃密に重なり合っていることが確認されている。今回の調査地点直近においても、平安時代中期の井戸・後期の土坑、鎌倉時代及び室町時代前期・後期の土坑・末期のピット、桃山時代の土坑、江戸時代前期の土取穴・後期の土坑など、多数の遺構が検出されてい

注1
る。

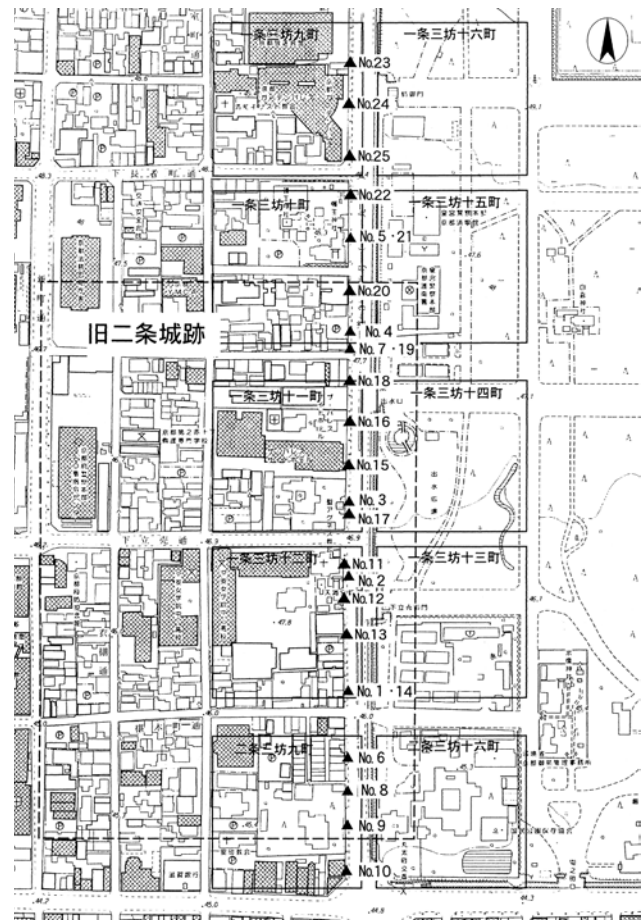


図110 調査位置図

表3 検出遺構一覧表

時代	地点番号	遺構・層名	色調・土質
平安時代後期	No.21	第4層（土器溜）	10YR3/3 暗褐色砂泥
室町時代中期	No.19	第4層	10YR3/3 暗褐色砂泥（炭混）
	No.20	第7層	10YR3/4 暗褐色砂泥（炭少量混、やや粘質）
室町時代後期	No.16	第4層	2.5Y3/2 黒褐色砂泥（炭混）
	No.17	第8層	10YR4/2 灰黄褐色砂泥（縮る）
	No.20	第6層	7.5YR4/3 褐色粘土
室町時代末期	No. 2	第2層	暗灰褐色泥砂
安土桃山時代	No. 9	第2層	10YR4/2 灰黄褐色砂泥（炭混）
	No.16	第3層	10YR4/2 灰黄褐色砂泥（炭混）
	No.17	第7層（落込）	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭微量混、やや粘質）
江戸時代初期	No.17	第6層	10YR4/4 褐色粘土質砂泥（径5cm大の礫多量、炭微量混）
江戸時代前期	No.14	第2層	10YR2/3 黒褐色砂泥（炭少量混）
	No.17	第5層	10YR4/2 灰黄褐色砂泥（炭混）
江戸時代中期	No.17	第4層（ピット）	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（炭少量混）
江戸時代後期	No.17	第3層（落込）	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥（炭多量混）
	No.25	第2層	10YR3/2 黒褐色砂泥（炭混、小礫多量）
江戸時代末期	No.1	第1層	棧瓦を含む焼土
	No.5	第1層	棧瓦を多く含む焼土
	No.8	第1層（瓦溜）	7.5YR3/4 暗褐色泥砂（焼土・多量混）
	No.10	第1層	7.5YR3/4 暗褐色泥砂
	No.11	第1層	7.5YR4/2 灰褐色泥砂（礫・焼土混）
	No.13	第1層	7.5YR4/2 灰褐色泥砂（焼土多量混）
	No.14	第1層	10YR4/4 褐色粘土質砂泥（炭少量混）
	No.15	第2層	10YR3/4 黒褐色砂泥（炭混）
	No.16	第1層	10YR3/2 黒褐色砂泥（炭・焼土、砂礫混）
	第2層	10YR3/2 黒褐色砂泥（焼土混、径3〜5cm大の礫多量混）	
	No.17	第1層	2.5YR3/2 暗褐色砂泥（炭・焼土多量混）
	No.18	第1層（土坑）	7.5YR3/2 黒褐色砂泥（焼土多量混）
	No.20	第3層（土坑）	10YR2/3 黒褐色砂泥（炭・焼土、礫混、棧瓦多量混）
	No.22	第1層（土坑）	10YR2/3 黒褐色砂泥（二次焼成棧瓦多量混）
	No.24	第2層	10YR3/4 暗褐色砂礫（棧瓦混）
	No.25	第1層	10YR3/4 暗褐色砂泥（焼土・炭、棧瓦混）

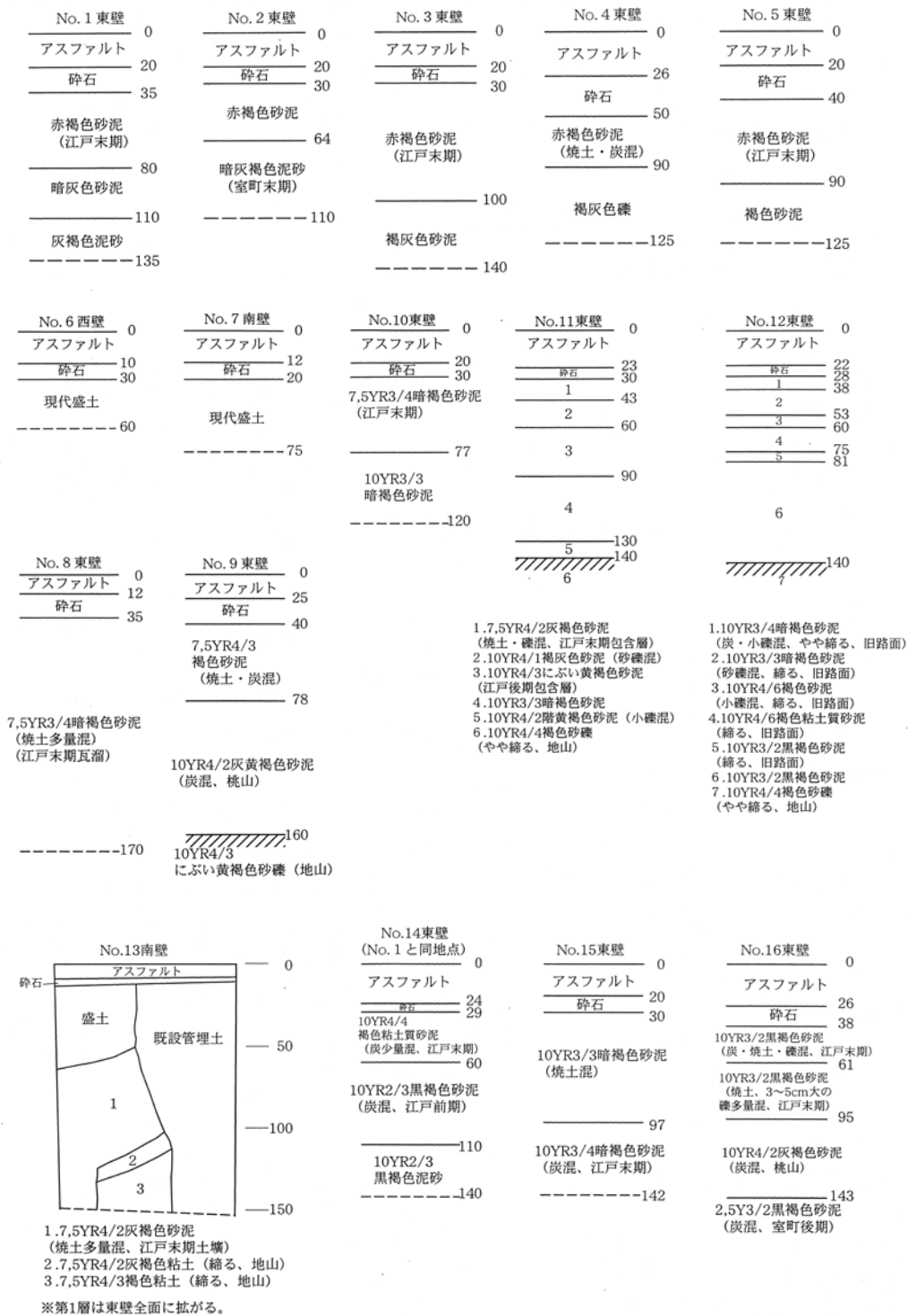


図 111 土層断面図 1

車道内の工事は夜間に行われるため、昼間に行われる試掘・根株撤去・照明柱基礎工事のうちの 25 地点を調査した。歩道内の地中は南北に通る既存埋設管のため、No. 6 (西壁断面) 及び No.13 (南壁断面) 以外はすべて車道と歩道の境目となる東壁断面を観察した。

なお、試掘の No. 1 は No.14、No. 5 は No.19 と重

複しているが、断面柱状図は総て掲載した。

遺構 基本層序は各地点で土層が異なり一定していないが、現代路面直下に江戸時代末期の遺物を包含する赤褐色砂泥の焼土層が 15 地点で確認できた。地山は 4 地点で確認した。No.12 地点では旧路面を検出した。時期は特定できないが現代路面の直下であることから近世

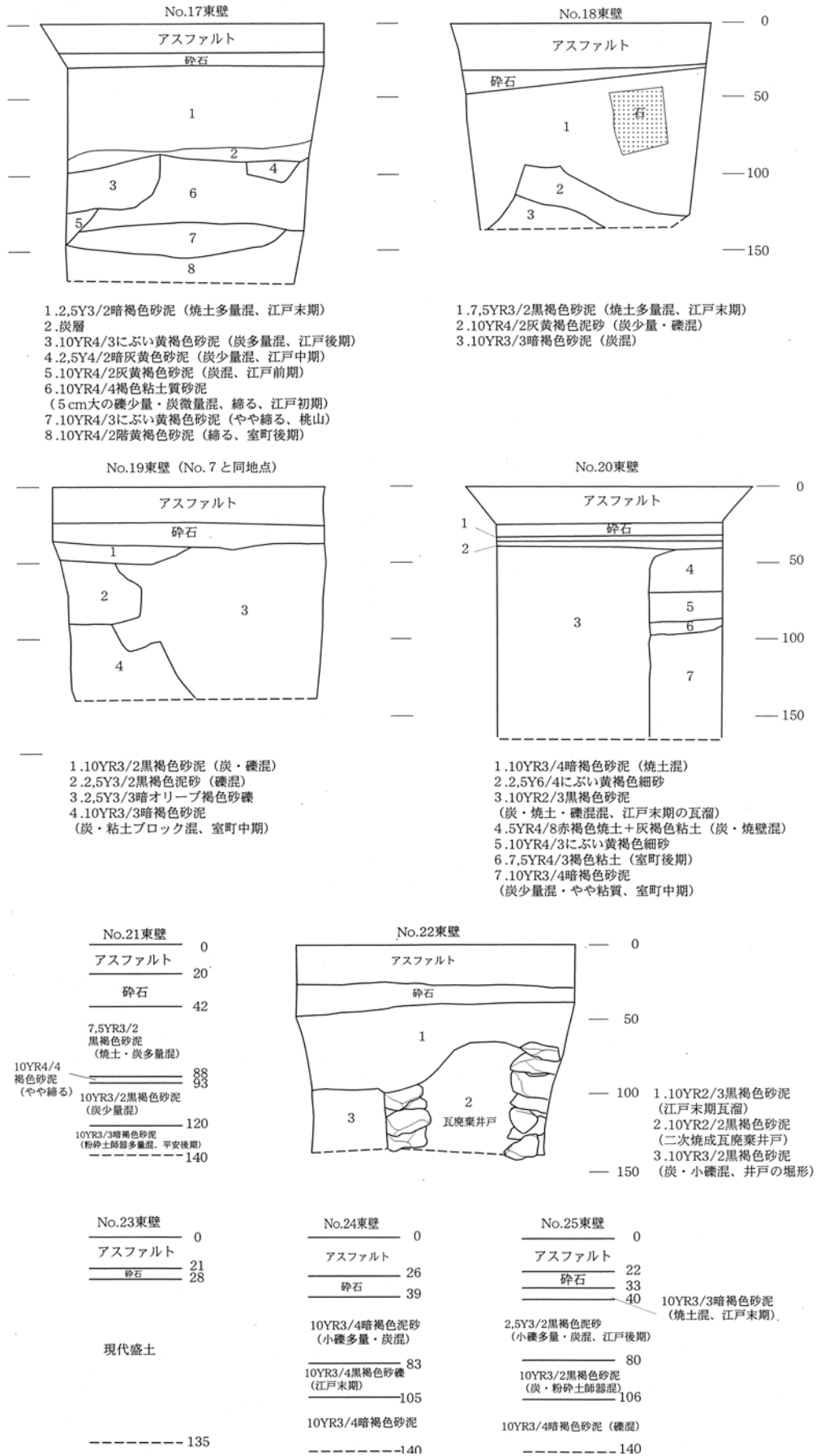


図 112 土層断面図 2

表 4 遺物出土地点一覧表

時 代	遺構・層名	遺 物	備 考
平安時代後期	No.21 第 4 層	土師器皿	
室町時代前期	No. 3 あげ土	土師器皿	
室町時代中期	No.19 第 4 層	土師器皿	
	No.20 第 7 層	土師器皿	
室町時代後期	No.16 第 4 層	土師器皿	
	No.17 第 7 層	土師器皿	
	No.17 あげ土	土師器皿 瓦質鉢 瓦灯	
	No.20 第 6 層	土師器皿	
室町時代末期	No. 2 第 2 層	土師器皿	
桃山時代	No. 9 第 2 層	土師器皿	
	No.16 第 3 層	土師器皿 土師器甕 黒釉陶器	瀬戸黒茶碗か？
	No.17 第 6 層	土師器皿	
江戸時代初期	No.17 第 5 層	土師器皿	小片
江戸時代前期	No. 1 - あげ土	瀬戸・美濃系鉄釉陶器	(天目茶碗)
	No.14 第 2 層	土師器皿	
	No.17 第 4 層	土師器皿 瓦質火鉢・鉢 施釉小壺	飴釉・黒釉
江戸時代中期	No.17 第 3 層	土師器皿 輸入白磁	
	No.22 第 3 層	土師器皿 肥前染付磁器碗	
江戸時代後期	No.17 第 2 層	土師器皿 切羽 (刀剣金具部品)	
江戸時代末期	No. 1 あげ土	玉緑式丸瓦	瓦当面雲母粉塗布
	No. 3 あげ土	菊水文軒平瓦	
	No.14 第 1 層	土師器皿	
	No.17 第 1 層	土師器皿 唐津 瓦灯 輸入染付皿	
	No.22 第 1 層	肥前染付磁器 (2 個体)	流通時期は 18 世紀

と考えられる。

遺物 遺物の時期は、平安時代後期、室町時代、桃山時代・江戸時代にわたっているが、江戸時代が最も多い。No.17 地点では室町時代後期～江戸時代末期にわたる遺物が層序に伴いまとまって出土した。

小結 現代路面の路盤直下から 1.0 m までの深さで、江戸時代末期の遺物を包含する焼土層が 25 調査地点中 15 地点で確認できた。この焼土層は、元治元年 (1864) に勃発した蛤御門の変による火災 (元治の大火) の痕跡と考えられる。No.21 地点では平安時代後期の土師器を多量に包含した土層が確認できたが、平安京の条坊に関連する遺構であるかどうかは不明である。旧二条城 (武家御城) に関連する顕著な遺構は確認できなかった。

烏丸通歩道の地中は、数次にわたるガス・水道管などの入替工事により、ほとんど攪乱されているため、主な土層観察は車道側東壁断面に偏ってしまった。今後の周辺における一定面積の調査に期待したい。

(堀内寛昭・吉村正親)

註 1 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』I 1974・75 年度 (京都、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 昭和 55 年)、同 II 1976 年度 (同 昭和 56 年)

2 史跡本願寺境内 1

経過 この調査は、史跡本願寺境内（通称西本願寺）内の式務部棟新築工事に伴う石垣解体、および建物建設に先立つ確認調査である。

石垣は、御影堂の西に隣接した真実閣と呼ばれる御堂の西側に位置する。西には蹴鞠庭がある。石垣の幅は約1.8 mで、全長は南北約35 mである。真実閣の曳き屋工事に伴い、この石垣の解体が必要となり、記録保存のための確認調査を行うことになった。調査は、主に石垣の成立時期、構築方法、性格の解明を目的として実施した。調査方法は、まず、オルソー測量による平面・立面図の作成、現状の写真撮影を行った。その後、構築方法確認のため、2箇所に断割を入れ、断面観察と図面の作成、記録写真の撮影を行い全ての調査を終了した。

建物部分の調査は、石垣の確認調査と並行して作業を行った。トレンチは建物の建設予定範囲に3箇所設け、遺構の有無、遺存状況の確認を行った。1区は、御影堂と阿弥陀堂の間、旧式務部建物があった部分に設置した。南北2 m×東西1.5 mで、面積は3 m²である。2区は阿弥陀堂の西側に設置し、南北1.5 m×東西2 mで、面積は3 m²である。3区は1区の南側に整地層の広がりを確認するために設置した。東西14.5 m、幅0.7 mで、面積は約10 m²である。1区より調査を開始し、掘削は重機にて行った。写真撮影、図面作成の後、7月5日に京都府・京都市文化財保護課の指導を受けた。続いて2区・3区の掘削と記録作成を行った。7月11日に、京都府・京都市文化財保護課、寺関係者に対しての説明会を実施した。その後調査区を埋め戻し、全ての調査を終了した。

遺構 石垣調査 石垣の全長は南北約35 mある。現地表面からの高さは約1 mで、盛土を行い東面と南北両端面に平均4～5段の石を積み上げている。盛土部分を含めた東西幅は約2 mある。南端面は盛土の幅より東西にそれぞれ約2 m長く1～2段の石が積まれている。石の積み上げ方が異なるため、構築時期が遅れる可能性が

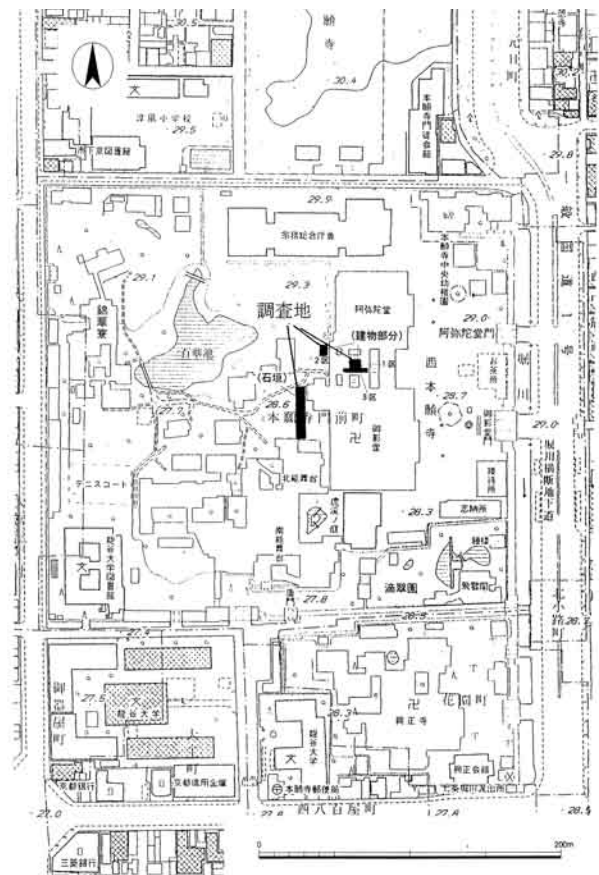


図113 調査位置図



図114 石垣調査前（南西より）



図115 石垣全景（南東から）

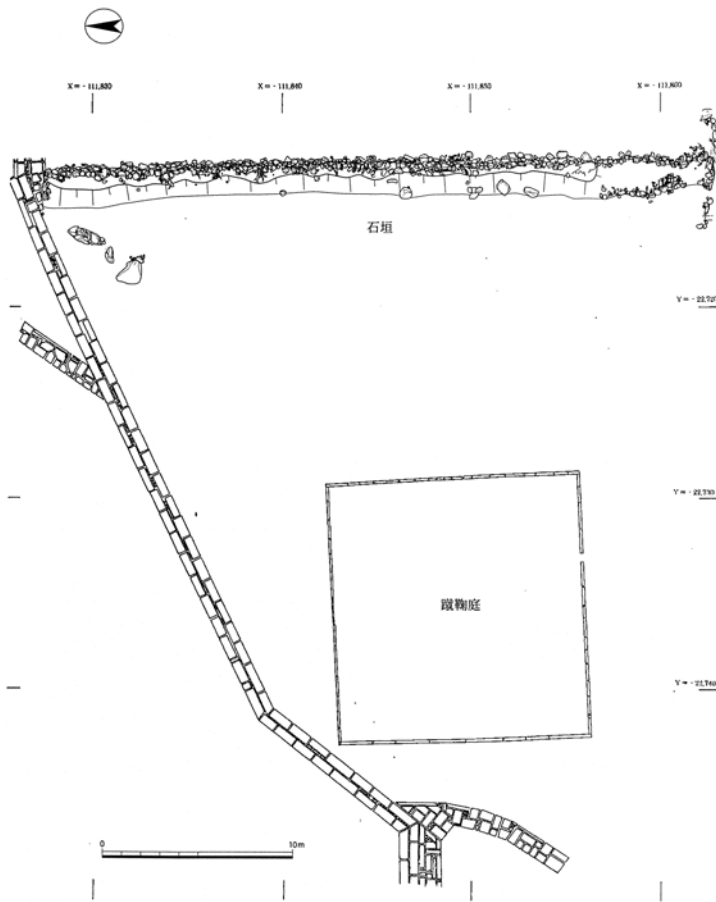


図 116 石垣位置図

高い。また、南側約 6 m は盛土の西面にも石を積み上げています。東面石積み部分の傾斜角度は約 70 ~ 75 度、西面の傾斜角度は約 20 ~ 50 度である。石の大きさは径 10cm 程度のものから径 50cm を超えるものがある。

砂岩系の石材を主体とし、チャートや花崗岩系統の石が少量混じる。加工は認められない。ただし、石垣西斜面裾部には径約 75cm の礎石状に円形に加工された石が認められたが、石垣と関連するものかは不明である。

石垣の西に大小の石からなる立石がある。北西側を正面とするように配置されていることから、北西にある建物からの景観を意識して配置されたものと考えられる。

構築方法 石垣が構築された時期と構築方法を確認するため、2箇所を断割を入れた。便宜上北側を断割A、南を断割Bとした。

断割A 現地表から約 10cm 掘り下げた標高約 28.2 m で、断面図 9 層の土壌化した旧表土が認められ、石垣はこの上に構築されていることが判明した。まず、石垣の裾部となる東側を一段掘り下げて (8 層)、根石となる石を据えている。この掘り下げは断割Bでも確認できたため (断割B 断面 9 層)、南北に布掘り状の溝を掘り、構築の基準となる根石を最初に並べたと考えられる。根石には、やや扁平で横長の石を用いている。その後、西側に盛土を行っている。断面図 2 ~ 7 層が盛土である。いずれも粗い砂を主体とした締まりの悪い土で、

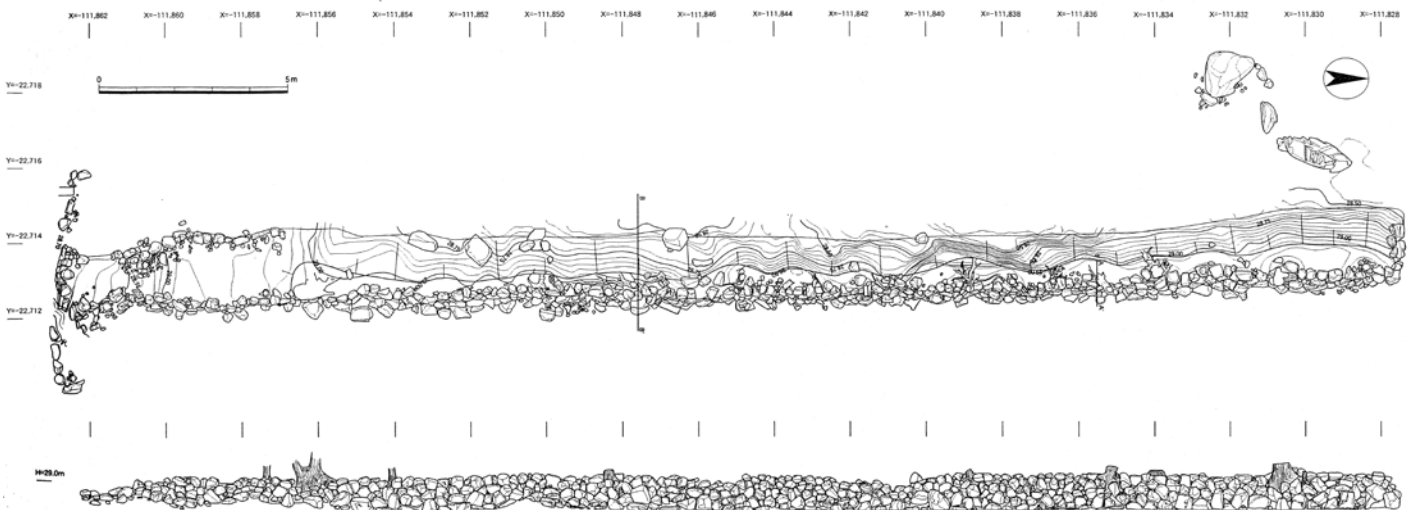


図 117 石垣平・立面図

版築や叩き締めがなされた形跡はうかがえない。先に盛土を行ったとすれば、石積みを行う東側にも土が流れてしまうため、石の積み上げと並行して盛土を行ったと考えられる。石の積み方は、真上に積み上げていくのではなく、斜めに差し込むように積んでいる。そのため東側から見た場合、石の面がそろわず乱雑な積み方に見える。しかし、単純に上に積み上げていく積み方より、上下の石と噛み合っただけで強度が増し、崩落を防ぐために意図してこのような積み方を採用したものと思われる。それに対して、先述した南端面と南側6mに認められる西面の石積みは差し込み式ではなく、積み上げ式である。また、

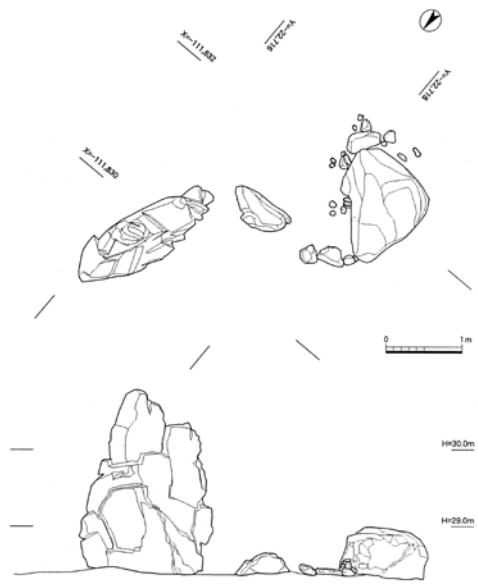


図 121 立石平・立面図

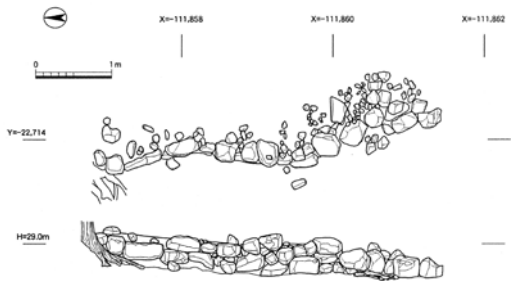


図 118 石垣西面平・立面図

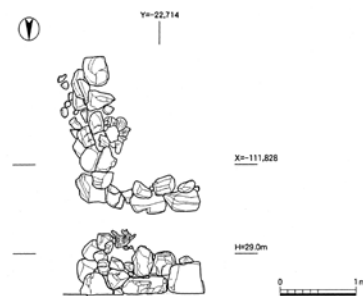


図 119 石垣北面平・立面図



図 120 石垣南面平・立面図



図 122 立石と石垣 (北西より)



図 123 石垣断割B断面 (南東より)



図 124 試掘1区断面 (北西より)



図 125 試掘2区 (南東より)

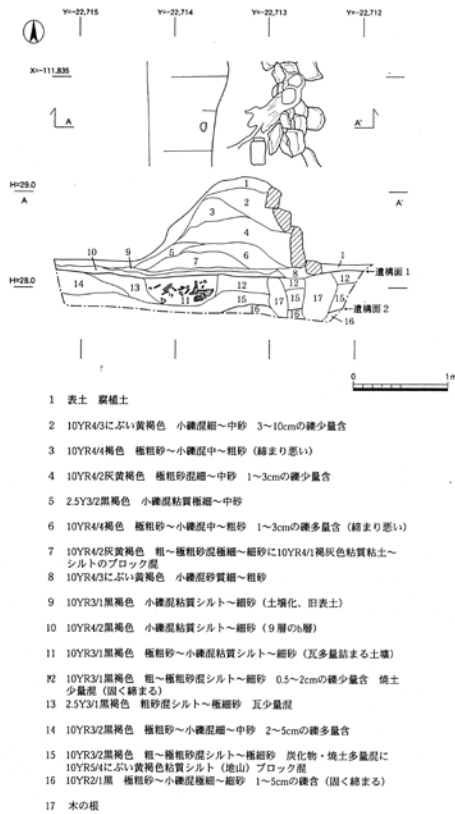


図 126 石垣断割 A 断面図

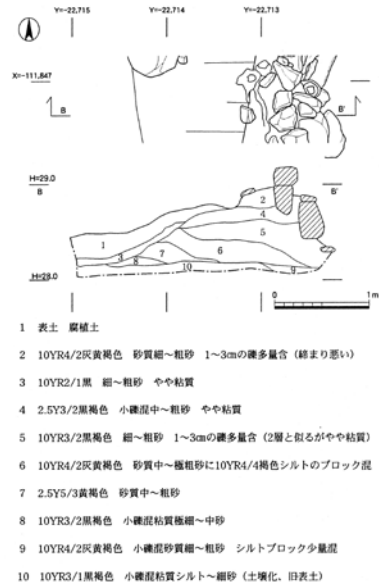


図 127 石垣断割 B 断面図

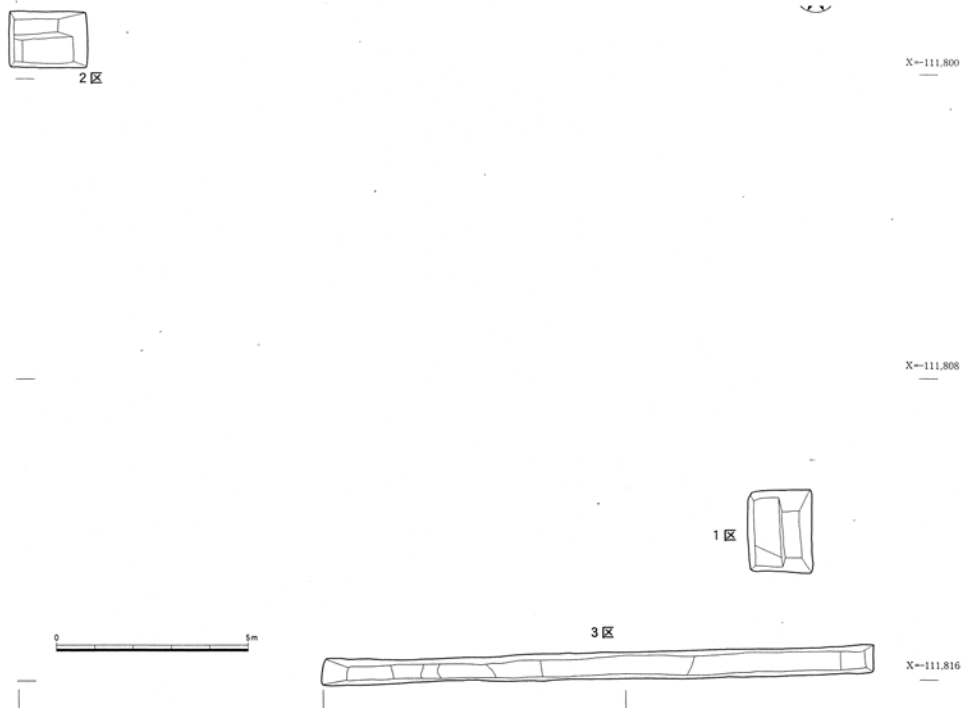


図 128 建物部分トレンチ配置図

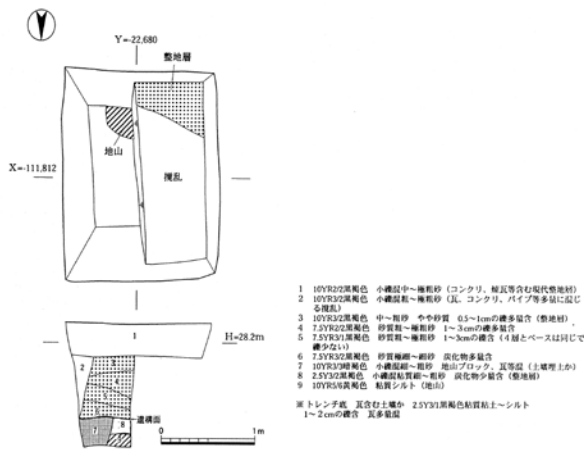


図 129 1区実測図

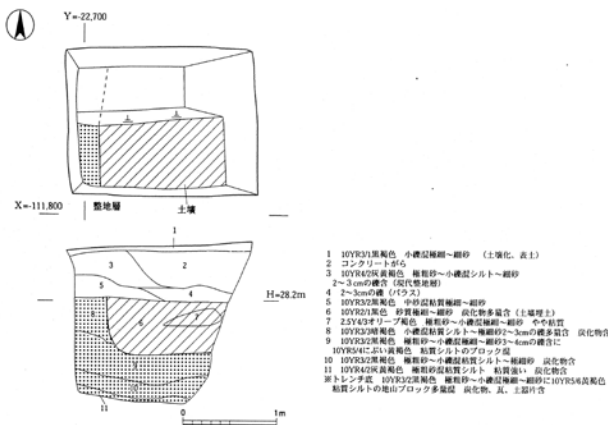


図 130 2区実測図



図 131 3区 (東より)



図 132 3区深掘断面 (北西より)

断面観察の結果、西側に石が積まれていた痕跡は取取できなかった。当初から西側には石積みが無かった可能性が高い。

下層を確認するため、さらに掘り下げを行った。その結果、標高 28.1 m で遺構面を確認した (遺構面 1)。こ

の面で成立する遺構としては、断面図 11 層の瓦が詰まる土坑状の遺構がある。12～15 層は焼土や遺物が少量混じり、整地層と考えられる。その下でさらに遺構面が認められた (遺構面 2)。標高は 27.8 m である。断面図 16 層上面がそれにあたる。固く焼け締まることから火災を受けた可能性が高い。径 25cm 程度の礎石状の石と土坑を検出した。

断割 B 西側では石垣盛土が崩れた土 (1 層) がやや厚く堆積していた。断面図 10 層が旧表土で、石垣はその上に構築されている。標高は断割 A とほぼ同じ 28.15 m である。9 層は、断割 A でも確認した根石を据えるために掘り下げられたと考えられる溝である。盛土は断割 A と同様、砂質の締まりの悪い土で構成される。

建物部分確認調査 1区 トレンチの大半は、旧式務部建物の基礎で攪乱を受けていたが、南西隅部分で整地層が認められた。現地表面から約 30cm は、コンクリートや煉瓦等を多量に含む旧式務部解体後の現代整地層で、断面図の 3 層以下がそれにあたる。いずれも砂質で締まりは良くないが、均質な土層で安定している。また、7 層は、8 層上面から掘り込まれた遺構と考えられることから、この 8 層上面でさらに遺構面が成立する可能性が高い。また、下層確認のために深掘りした東半では、地表面から約 1.1 m 掘り下げた所で粘質シルトの地山を確認した。標高は 27.3 m である。

2区 地表面から約 50cm は現代の整地層や攪乱層である。それを除去して、整地層と土坑状遺構を検出した。検出面の標高は約 28.2 m である。断面図 8 層以下が整地層で、ほぼ水平に堆積し、炭化物を含む。1 区とは異なり、粘質で固く締まる。その整地層を切り込んで土坑状遺構がある。トレンチ内では西肩部のみを検出した。深さ約 60cm で水平な底部から垂直に立ち上がる。南北に延びて、溝状になる可能性がある。埋土はほぼ均質で、一度に埋まったものと考えられる。下層確認のため北半を現地表下 1.5 m まで掘り下げたが、地山は確認できなかった。トレンチ最下部では炭化物や江戸時代の

遺物を含む地山ブロック混じりの層を確認しており、さらに整地層、もしくは遺物包含層が続いていると考えられる。

3区 3区は、1区で確認した整地層の広がりを確認するため設定した。約1/3は攪乱を受けていたが、その他の部分では標高 28.2 m前後で整地層や土坑を検出した。整地層は、黄褐色粘質シルトの地山ブロック混じりで固く締まる。トレンチ中央付近で検出した断面図3層は、整地層とは土質が異なり、炭化物・瓦を多量に含むことから土坑状遺構と考えられる。調査区西端でも土坑を検出した。この土坑下層には江戸時代の平瓦が多量に詰まる。下層確認のため、西端を約 1.5 m掘り下げたが地山は確認できなかった。

遺物 石垣部分調査中に、近代の瓦片や陶磁器類を少量採集した。丸瓦の凸面に「大ぶつ・・・」の印が押されたものがある。同じく断割Aの石垣盛土中からは、備前焼の挿鉢の破片が出土しているが、小片のため時期は特定できない。同じく断割Aの断面図10層からは丸瓦片や敷壇が出土している。埴の厚さは約 1.5cm である。時期は不明。断面図15層の焼土層からは、焼締陶器片や土師器皿の破片が出土した。小片のため正確な時期の

特定は困難であるが、17～18世紀代のものと考えられる。

試掘1区8層の土坑埋土と考えられる層からは、近世の平瓦が出土している。試掘2区の最下層からは、17～18世紀代と考えられる土師器皿の破片が出土した。試掘3区の断面図2層からは18世紀頃の染付磁器の小片が出土している。

小結

1. 石垣状遺構について

a) 石組の類例 今回調査した石垣状の遺構は、京都市内およびその周辺部においても類例を見ることができない。ところで遺構の東面に見られた石積み方法は、本願寺境内や市内において散見される。そこで参考までにその観察結果を述べる。

現在までにほぼ同様の方法によると考える石積みは、滴翠園蒼浪池東岸、百華池東岸、平安京左京二条二坊十町跡などに見られる。

滴翠園内：園内の東側には、高い石垣上に建立された鐘楼がそびえ立っている。その西南角には潇洒な茅葺きの中門が池に面して建っている。先述した同様の石垣は、中門周辺部の池汀に面したところで観察できる。この部

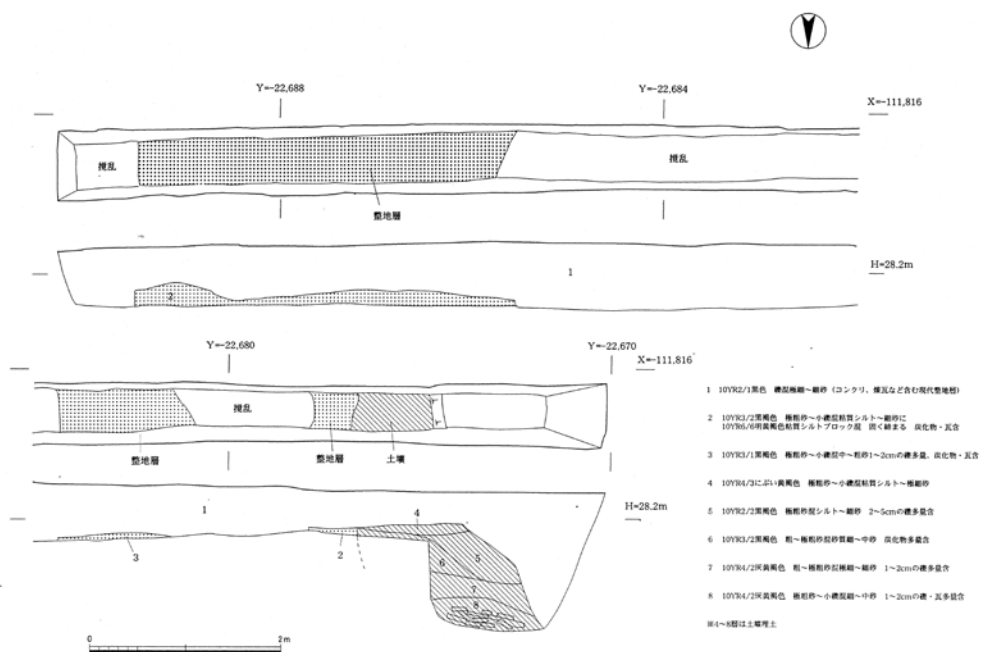


図 133 3区平・立面図

分の石積み状況は、蒼浪池に面して据え付けられた石組護岸のなかにあつて異色である。それ故に滴翠園整備委員会でも、この部分の石組について議論されたことがある。ここに中門が設けられたのは、飛雲閣に惜昔亭が付け加えられた際のことであろう。そのときに、今見る石組がなされたと考える。

百華池東岸：百華池の東、五柳間の北側に築山がある。その築山の東面に景石や石組が点在しているが、そのなかに同様の手法による石組が部分的に見られる。百華池は明治時代以降に作庭された庭園である。この石組がいつ頃の作かについては、全く不明である。

平安京左京二条二坊十町跡発見の石組：2005年9月に中京区竹屋町通油小路西入西竹屋町で実施した高陽院跡の調査で、江戸時代（18世紀中頃）の石組井戸を発見した。この井戸は、水をくみ上げる場所が旧地表面から一段下がっており、そこへ行くための階段が設けられていた。問題の石組は、階段部分の土留め用としてなされたものである。この調査例は、時期が特定できる好例である。

以上のようなことから、18世紀中頃にはこうした意匠の石積みが京都市内に存在していたことは確かである。

b) 江戸時代の境内図と石垣状遺構

龍谷大学図書館には明治時代初頭頃の状況を記したと考えられている境内図が2枚所蔵されている。そのなかの1枚は、南能舞台が無く、唐庭の南側に「辛未八月…」と書き記された張り紙がある。この辛未八月とは明治二年のことである。そうするとこの絵図は江戸

時代に制作された可能性が考えられる。また、真実閣の位置も現在（2006年）と違っている。

さて、この絵図に今回調査した遺構が記されていないか観察したが、一切そうした痕跡は見られなかった。そこで調査した石垣状遺構の位置はあまり正確ではないが、絵図に投影した。その結果、遺構の北端は、真実閣の南側に位置していた東西方向の廊下に附属する建物に接する場所で途切れていることがわかった。

C) 石垣状遺構の性格

こうしたことから今回調査した遺構は、御影堂からその西側に展開していた建物群を東から眺望できなくするための施設と考える。また、西側から東側（御影堂）を見た場合、御影堂の白壁が直接目に入らないように修景したものであろう。また、石垣部分の断割調査では、現地表から約40cm下で火災を受けた遺構面を確認した。

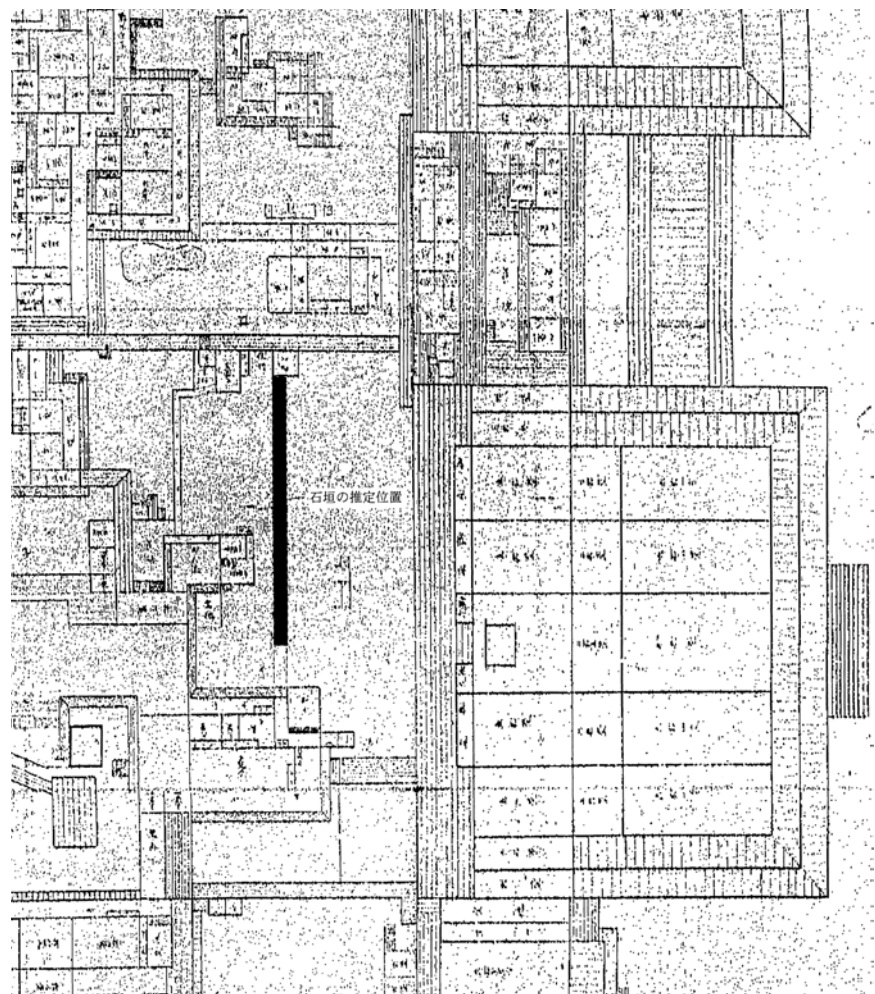


図134 境内古図と石垣推定地

このことから、この石垣は、西側の建物群で火災が起きた際に、東側の御影堂への延焼を防ぐ防火壁の役割も兼ねていた可能性も考慮に入れておきたい。

2. 建物部分確認調査の結果

3 箇所の確認調査の結果、旧式務部建物の基礎の影響を受けていない箇所では、現在の御影堂や阿弥陀堂の造営に伴うと考えられる整地層が 1 m 以上堆積し、さらにその下に遺構面が存在することが判明した。この遺構面の成立時期は確定できなかったが、寺の造営以前に遡る可能性も考えられる。

(柏田 有香)

3 史跡本願寺境内 2

経過 参拝部の東側、御影堂の南側で実施した試掘調査である。参拝部建物側（1 区）と防火水槽の南側（2 区）との 2 箇所にトレンチを設定した。2 区北側は、防火水槽を設置する際に遺構は破壊されていたが、その周辺部は旧状を良く保っている。

遺構 1 区：最上層は、現在の境内を化粧している砕石で、厚さは 5 cm から 10 cm ほど敷き詰められている。その下層は、黒褐色系の粘質土であるが、時期については明らかでない。なお、後述する 2 区では、地表下約 25 cm 前後で、大変細かい砂層が厚さ 5 cm ほど見られるが、1 区では観察できない。その下層は境内の化粧として敷き詰められた灰黄色砂層の面となる。これより下層は、調査区中央を境（水道管）に東西に大きく堆積土が異なる。すなわち調査区西端では、焼け瓦や焼土を含む暗褐色や黒褐色系粘土が約 40 cm ほど見られる。他

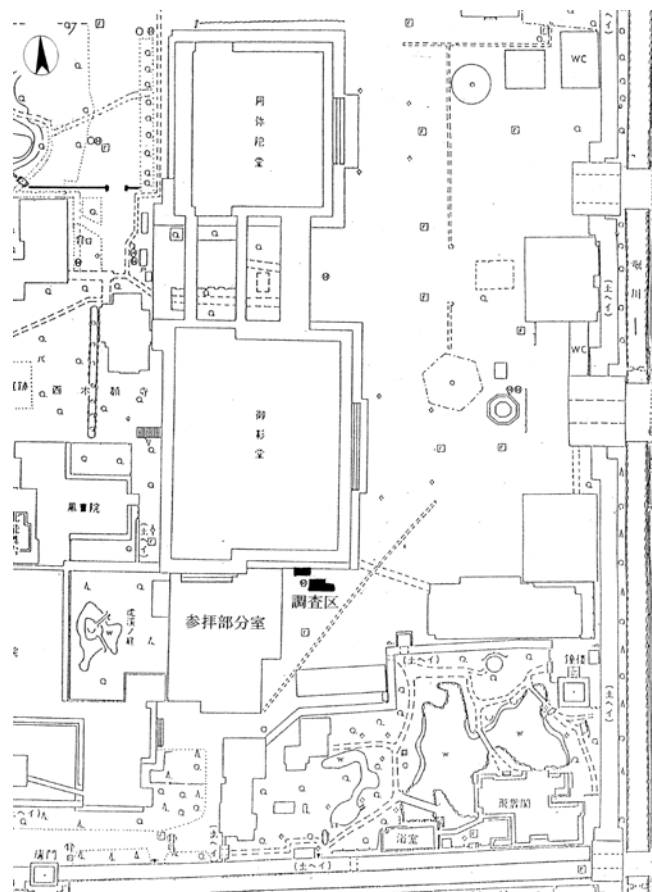


図 135 調査位置図

方、東側では、黒褐色系粘質土に黄色粘土・灰色粘土・黄灰色粘土などのブロックを含む厚さ40cmほどの整地層が見られる。この土層は、大変堅く締まっている。これより下層は地山ではなかったが、遺構保全を優先し掘り下げは実施しなかった。

2区：1区と同様に最上層は境内を化粧している碎石で、厚さは5cmから10cmほど敷き詰められている。その下層は、黒褐色系の粘質土であるが、時期については明らかでない。地表下約25cm前後で、大変細かい砂層が厚さ5cmほど見られる。その下には、焼け瓦を含む黒褐色系粘質土であるが、その下方には境内を化粧している灰黄色砂が調査区全面に認められた。さらに暗褐色粘質土が厚さ5cm前後、その下層には黄褐色砂が厚さ10cmほど認められた。そして、2区でも黒褐色系粘質土に黄色粘土・灰色粘土・黄灰色粘土などのブロックを含む厚さ50cmほどの整地層が見られた。これより下層については、旧建物基礎跡の断面観察によって確認した。整地層のすぐ下方には、黒褐色系粘質土厚さ約30cm、さらに粗砂混じりの黒褐色系粘質土が約30cmにわたって認められた。今回の調査で最下層の土層は微砂混じりの黒褐色系粘質土であった。

遺物 出土遺物は、調査した遺構の性格上極めて少ない。また、柱穴などの底部に据えられていた樽なども取り上げず、そのまま現地に保存した。

小結 今回数箇所で、素掘りの柱穴を検出した。その中には、底部に陶質の樽を据えているものも見られた。これらの遺構は層位関係から時期差が認められ、江戸時代あるいはそれ以降と考えられる。ところで、ここに現在の参拝部が建て直される以前には、虎ノ間が建っていたことが古図からわかっている。この虎ノ間の東側に、

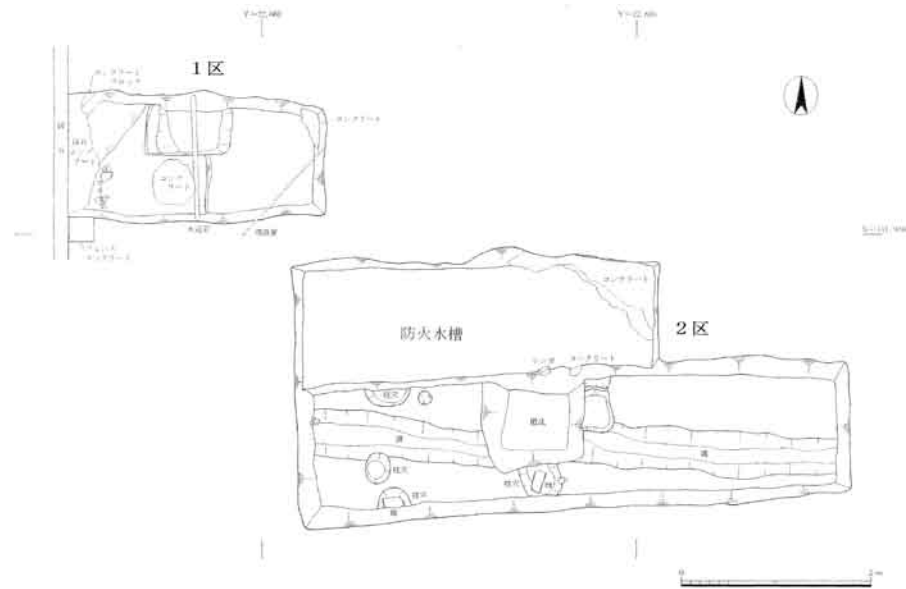


図136 調査平面図

恒久的に掘立柱建物があったとはとても考えられない。

では、どのような施設を想定すればよいのであろうか。それを知る手がかりの一つに、今年度本願寺境内で開催された写真展のパネル資料がある。その写真パネルは、明治44年に実施された宗祖親鸞上人650年大遠忌の様子を撮影したものである。そこには掘立柱の足場や仮設

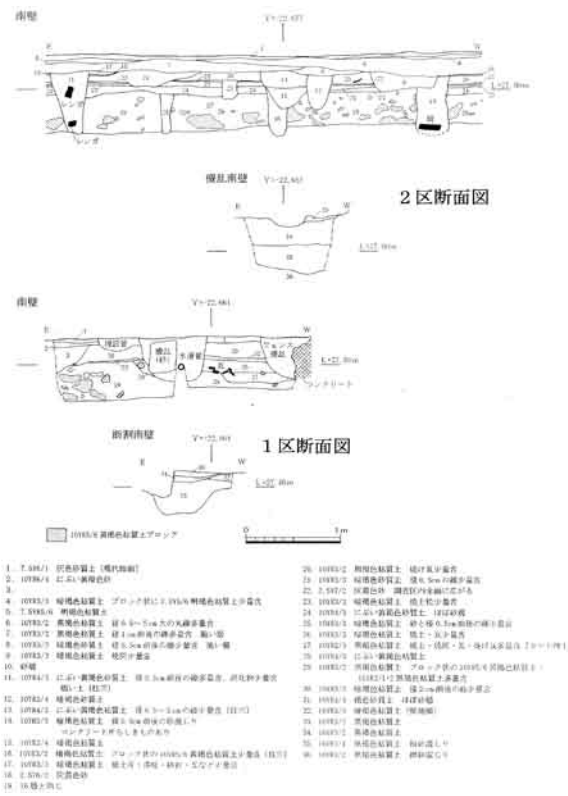


図137 断面図

建物（掛出し）が映し出されている。今回検出した柱穴は、まさしくこうした仮設に伴う遺構である。

整地層の年代については、現在のところ、境内に見られる整地層がいつ頃なされたかについてはほとんど明らかでない。以下、整地層について考えてみる。

1. 地表下約 20cm で検出した境内を化粧する灰黄色砂は、除去した面からは大小の柱穴が認められる。これは、先述したように明治 44 年（1911）に行われた宗祖 650 年大遠忌に伴う化粧砂、そして柱穴は掛出しの掘立柱の柱穴と考える。

2. 地表下約 40cm の黒褐色系粘質土に黄色粘土・灰色粘土・黄灰色粘土などの粘土ブロックを含む厚さ 40cm から 50cm の整地層は、現御影堂の礎石の高さや先述した層位関係からすると、今の御影堂が再建された寛永 13 年の造営に伴って実施された整地層と推定する。

3. 黒褐色系粘質土は 2. の整地層を除去した段階でその上面を検出した。黒褐色系粘質土は本願寺が創建されて間もない頃に施された整地ではないかと考えている。

なお、現在、本願寺境内のなかで防火工事に伴う立会・試掘調査を実施中で、整地層の年代について新たな資料が得られるものと確信している。

（鈴木 久男）

4 名勝 滴翠園

経過 西本願寺名勝滴翠園保存整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査である。整備事業の調査は、平成 8 年度から継続して行っており、今回で第 11 次調査となる。確認調査は、庭園のほぼ全域に及んだ。これまでの調査から、庭園西半部は明治時代に入ってから大きく改修されていることや、庭園東半部の踏花塙橋下の流れが昭和の修復時のものであること、滄浪池北東に旧給水施設があることなどがわかっている。

遺構 1) 庭園西半部

H18 ①枯れ流れの瀬石・石橋脚

澆花亭の南側に、東西方向の枯れ流れがある。その底に敷かれた小石と土の除去中に、石橋の西側で瀬石（H18 ①左下）を検出した。瀬石は約 1.2 m の長さがあり、枯れ流れの幅を占めている。石の下流では上流より 0.05 ～ 0.1 m 深くなっていた。

枯れ流れに掛かる緑色片岩製の石橋は、南北に 2 枚の板石を並べ、南側の板石を 2 つの橋脚で支え、北側の板石を北護岸石と橋脚で支えた構造となっている。北側の

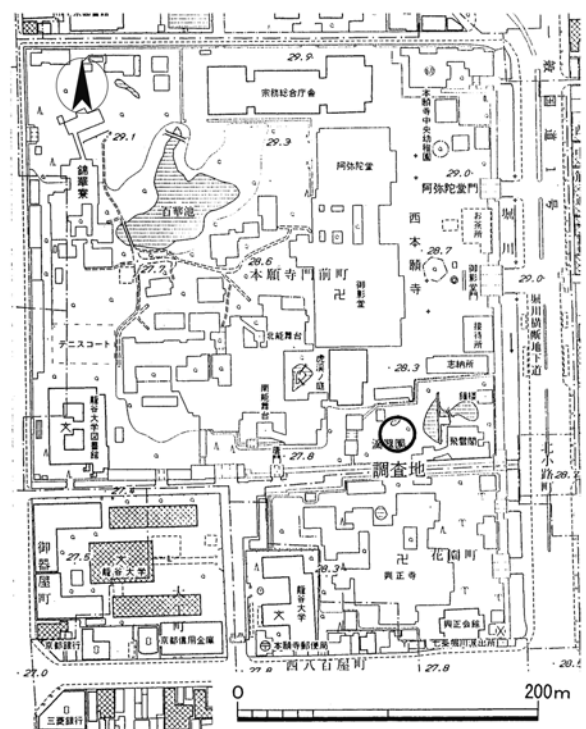


図 138 調査位置図

板石を支える橋脚が、枯れ流れの底に敷かれた玉石の上
に据えられていることがわかった (①)。一方、南側板
石の南橋脚は玉石下層の礫を含まない層上に、北側の橋
脚は更に下層の枯れ流れの底を掘り込んで据えられてい
た。また、石橋の北東側の流れ底で、緑色片岩を検出し
た (H18 ①右上)。これは、板状の石で、立てて据えつ
けられているとみられるが、掘り下げを行っていないた
め、詳細は不明である。

枯れ流れの他の地点では、玉石下に土が 0.05 m 程度
の厚さで堆積しているため、全体的に流れの底が浅くな
っていることがわかった。

②澆花亭周辺

澆花亭の南雨落ち付近を建物に沿って掘削した際に、
表土下約 0.2 m で礎石とみられる石を検出した (②)。

③擲盃橋の西

橋の渡り口西側の園路中央を掘り下げた。深さ約
0.05 m で、礎石とみられる長さ約 15cm の石を検出し
た。更に約 0.1 m 掘り下げたところに、堅く締まった層

が広がっていた。この層の幅は約 0.75 m で、石はこの
層の中心に据えられていた。この層は調査区の南北に帯
状に延びて、北側にある塀跡に繋がっている。石もこれ
に関連する施設と考えられる。

④園路

枯れ流れの北側に通っている園路の重複を確認するた
めに、園路に直交する断割を入れて調査を実施した。そ
の結果、現在の園路面 (砂利敷き) を除いて、6 面分を
確認した。上層は微砂に径 0.5 ~ 1 cm の礫が混じるが、
下層にいく程、礫がほとんど含まれなくなり、微砂や粘
質土が主体となる。また、上から 3 面目より下層では、
断割北端で僅かに下がり (深さ 1 ~ 3.5cm)、そのまま
調査区外に続く。これらは、5 面目の南端でも確認して
おり、それぞれの園路面の端と考えられる。各園路の幅
は 1.2 ~ 1.4 m とみられる。何れの面も、時期を特定す
ることはできなかった。

⑤塀跡とその西側の園路

滄浪池の西側にあった塀跡と路面の関係を確認するた

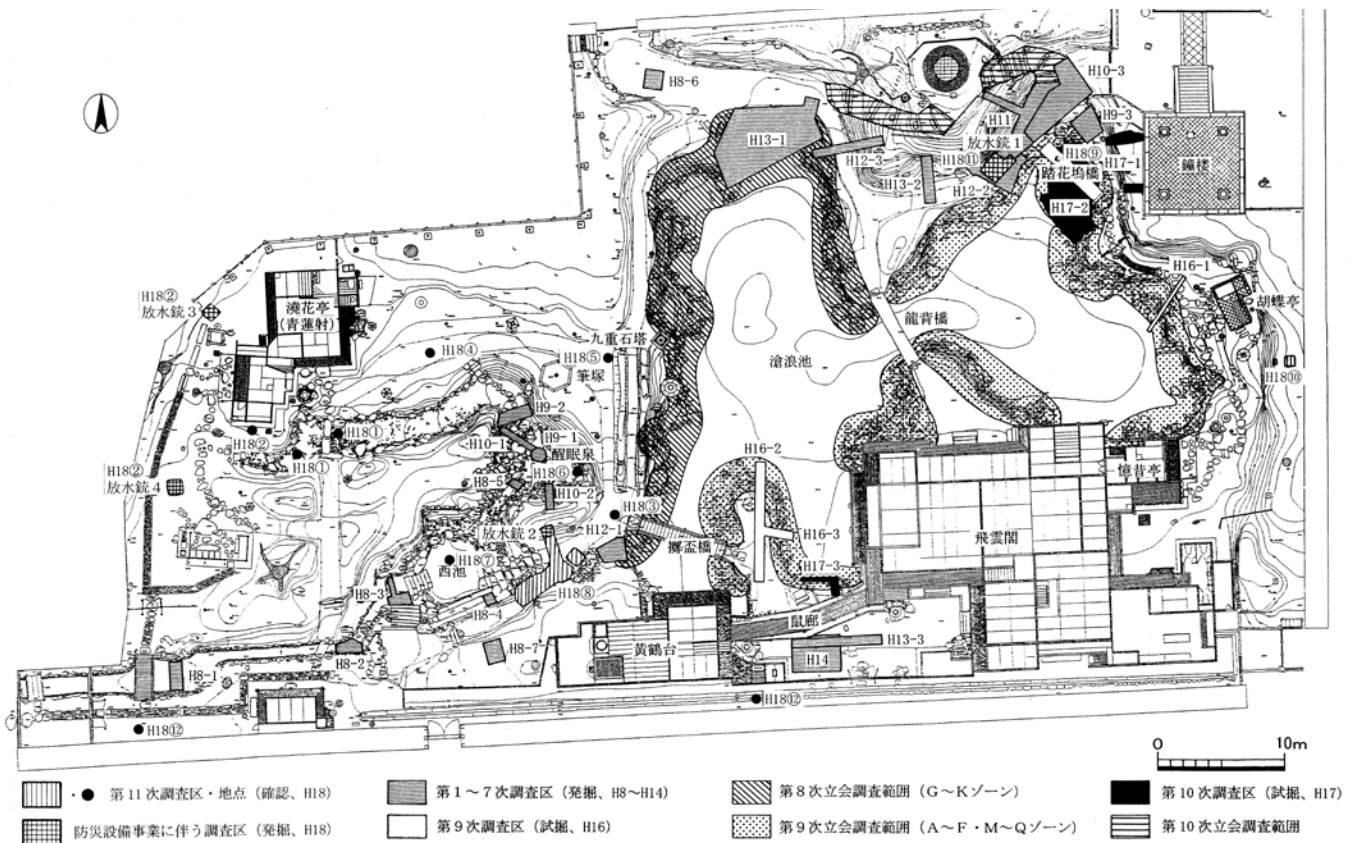


図 139 調査区配置図

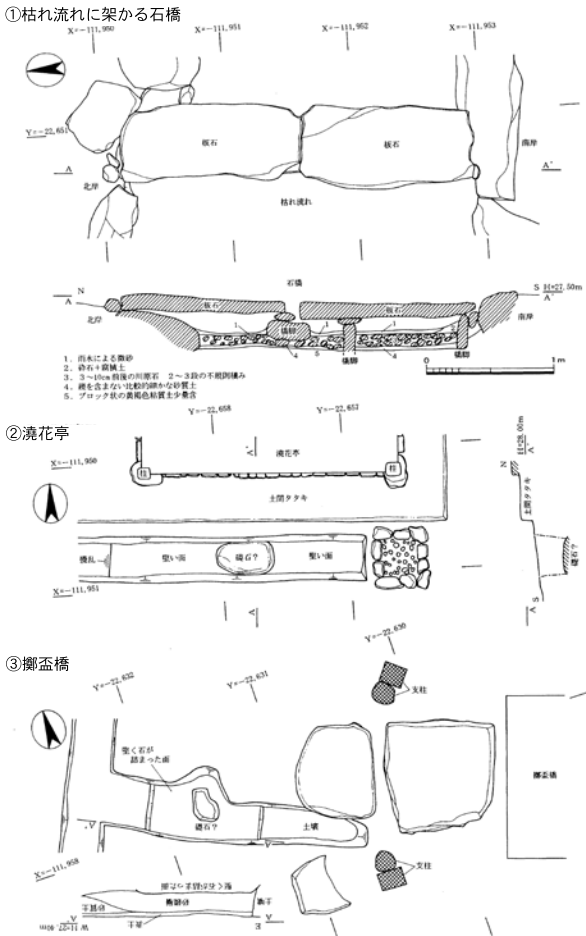


図 140 枯れ流れに架かる石橋、澆花亭、擲盃橋実測図

めに、堀跡北端の西側に、堀跡に直交する断割を設定した。現園路面の砂利敷きの直下から、数面分の園路面を確認した。4面の下層には、4面を造成したときの整地層とみられる堅い面が存在する。この整地層は、粘質土であり、礫は混じていなかった。旧園路⑥の上面では、0.1～0.5cm厚の粘質土層を確認した。園路または園路の化粧土とみられるが、非常に薄い層であるため、詳細は不明である。

堀跡は、中世とみられる層上に、暗褐色砂質土を盛り上げて造られていた。

⑦西池底 (H18 ⑦)

西池は明治8～9年(『煤臈餘芳』昭和2年 護持會財團に記載)に掘削された。醒眠泉から流れ出た水の排水を行うために、池底の状態を確認することになった。そのため、池の底を0.3m四方の広さで掘り下げた結果、

表面下から約0.3mまで堆積土であり、その下層は地山相当層の礫層であることがわかった。

⑧滄浪池から西池に通じる暗渠周辺

滄浪池と西池の間にある2つの暗渠の内、西側の暗渠を調査した(H18 ⑧)。もともと地表に暗渠の天井石の一部が露出していた。天井石は花崗岩製で、短辺が暗渠の側壁に乗るように置かれ、石の隙間には漆喰が詰められていた。天井石は平らな面を暗渠内面に向けているため、裏面には荒割した加工痕が顕著に認められた。一方、暗渠は、石積みの間をコンクリートで目張りされていることがわかっていたが、その構造から、江戸時代に造られたと考えられる。

(2) 庭園東半部

⑨踏花塙橋の礎石

橋の架け替えに伴って、礎石の据え直しが行われた際に、踏花塙橋の礎石を包むように塗られていたコンクリートも撤去された。その下層から古い礎石を検出した。南側橋脚の西礎石は、表土下約0.2mで検出した。径約30cmである。北側橋脚の西礎石は、池底面の高さで検出した。その他の礎石は、取り外していないので、詳細は不明である。

⑩胡蝶亭南の土管と漆喰枡、築地堀西

東築地堀の西側で、防災事業の配管のための試掘坑を掘削中に、漆喰枡が検出され、その確認を行った。枡は約0.7m四方で壁の厚さは約0.1m、内法約0.5mである。この西壁中央に、径約0.17mの穴があいており、土管が接続していることがわかった。この土管の流末を確認するために、枡から約0.6m西の地点を掘り下げた。表土下約0.4mで、土管の接続部分を検出した。また、枡と土管接続部分を更に西へと延長し、滄浪池東岸との交点周辺を掘り下げて、景石の北側で土管の流末を検出した。土管の先端は割れて欠損していた。調査の結果、土管は胡蝶亭の南側で東西方向に埋設されており、その距離は約6.5m、土管一本分の長さは約70cm、径約15cm、厚さ約1cmであることがわかった。漆喰枡

は築地塀の雨落ち部分に当たることから、枡は雨水の集水枡と考えられる。雨水を滄浪池に排水していた時期があったことがわかり、土管の形態から、江戸時代末から明治時代に造られたと考えられる。

遺物 遺物の出土はなかった。

小結 今回の調査では、総面積は広くないものの、庭園の各所で調査を行ったため、様々な遺構を検出することができた。庭園の西半分と東半分を、それぞれ簡単にまとめる。

庭園の西半部では、澆花亭の旧礎石とみられる石、枯れ流れの瀬石、石橋の橋脚、重複した旧園路面を新たに確認した。西池が掘削される以前の絵図（龍谷大学所蔵）によると、澆花亭は醒眠泉の北側（現位置の東側）にあった。その後、西池が掘削された明治8～9年前後に、現位置付近に移動したとみられる。今回検出した礎石は、1基のみの確認のため詳細は不明である。また、園路面の調査では、園路の幅や新旧の化粧方法の違いなどが判明し、塀跡と路面の関係では、塀跡の方が古い時期のものであることも確認することができた。

庭園の東半部では、踏花塙橋の旧礎石を発見し、胡蝶亭南側で漆喰枡と土管を検出した。漆喰枡と土管の発見によって、築地塀付近の雨水を集水し、それを滄浪池に流し込んでいた時期があったことがわかり、庭園内の排水を知る上で貴重な発見となった。

（鈴木 久男・近藤 奈央）

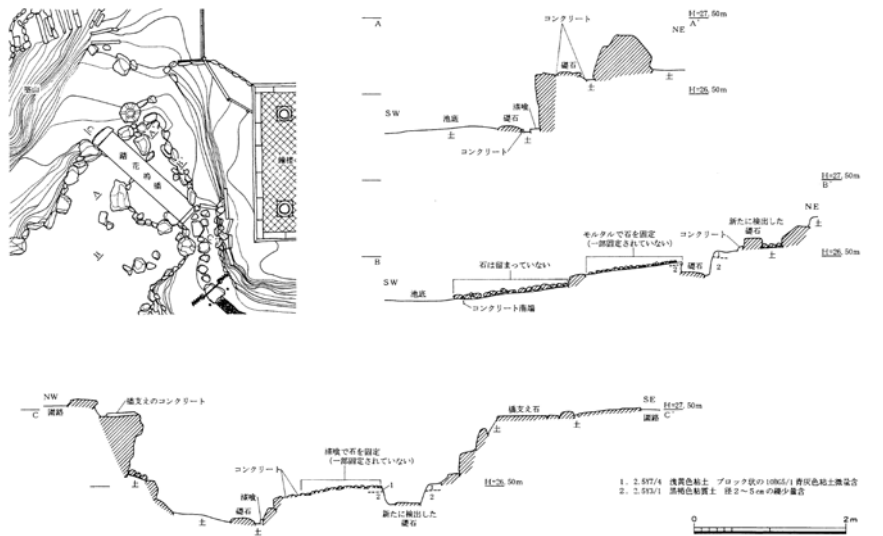


図 141 ⑨踏花塙橋の礎石実測図

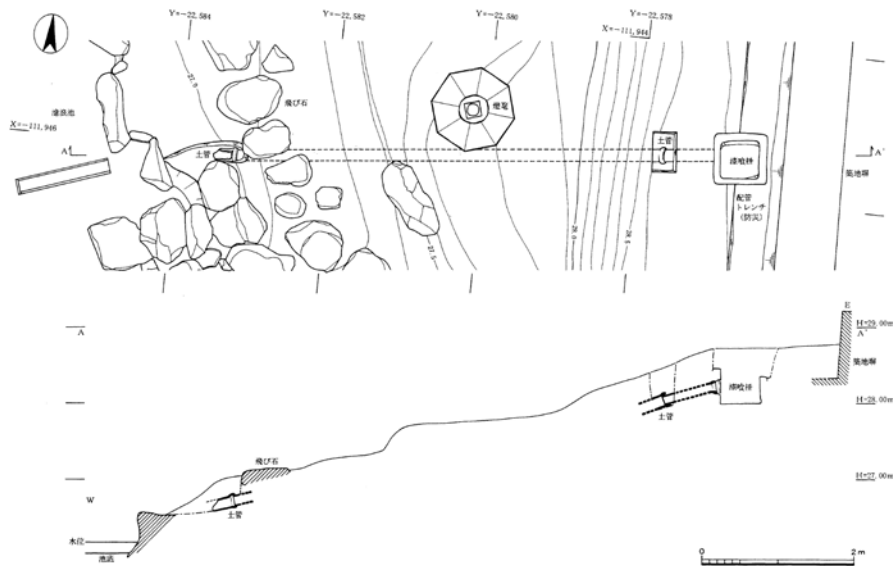


図 142 ⑩胡蝶亭南の土管実測図

5 相国寺旧境内他遺跡

経過 本調査は電線共同溝工事に伴う立会調査である。調査範囲は、烏丸今出川交差点北側歩道（一部車道）を東 650 約 m の間及び相国寺総門参道西側の一部（玄武町・新北小路町・常盤井殿町・革堂内町地内）であり、公家町遺跡及び常盤井殿町遺跡（足利義政館）の範囲に含まれる。

今出川通は中世の北小路にほぼ相当しており、その名称は通りの北側を今出川とよばれた河川が流れていたことによる。近世には鴨川西畔の皇族下屋敷から西へ寺院や公家屋敷が続いていた。これまでの周辺調査では、同志社女子大学・中学校敷地内で相国寺及び公家屋敷に関連する中近世の遺構を多数検出している。また、2004 年 6 月から 11 月にかけて行われた相国寺境内での調査では、7 世紀中～後半（飛鳥時代）の竪穴住居、8 世紀初頭以降（奈良時代）の掘立柱建物、桃山時代の基壇、江戸初期の御用水跡など、平安京造営以前から相国寺再興に関する桃山～江戸時代初期に至る遺構が検出されている。

今回の工事掘削規模は、試掘／縦 1.25 ～ 2.4 m × 横 1.0 m × 深さ 1.25 ～ 1.5 m、電力桝／縦 2.3 m × 横 3.3 m × 深さ 2.1 ～ 3 m、照明柱基礎坑／縦 1.1 ～ 1.5 m × 横 1.7 ～ 3 m × 深さ 2.04 ～ 2.5 m、管路掘削／幅 0.8 m × 深さ 1.1 ～ 1.94 m である。調査記録として断面撮影及び断面図 8・柱状図 63 の合計 71 面を作成した。

遺構 近現代路面直下で検出した江戸時代末期の遺物を含む焼土層を 10 地点で確認した。遺物の検出はないが、同質の焼土を含む土層はほかにも 13 地点で確認できた。全体では平安時代（後期・末期）、鎌倉時代（中期）、室町時代（中期・後期・末期）、桃山時代、江戸前期（中期・後期・末期）にわたる包含層を検出した。地山は 11 地点で確認した。細砂・粗砂・砂礫・礫層は今出川の流路に関連した堆積と考えられる。No.33 地点では地山直上で古墳時代と考えられる土師器を包含した土層を検出し

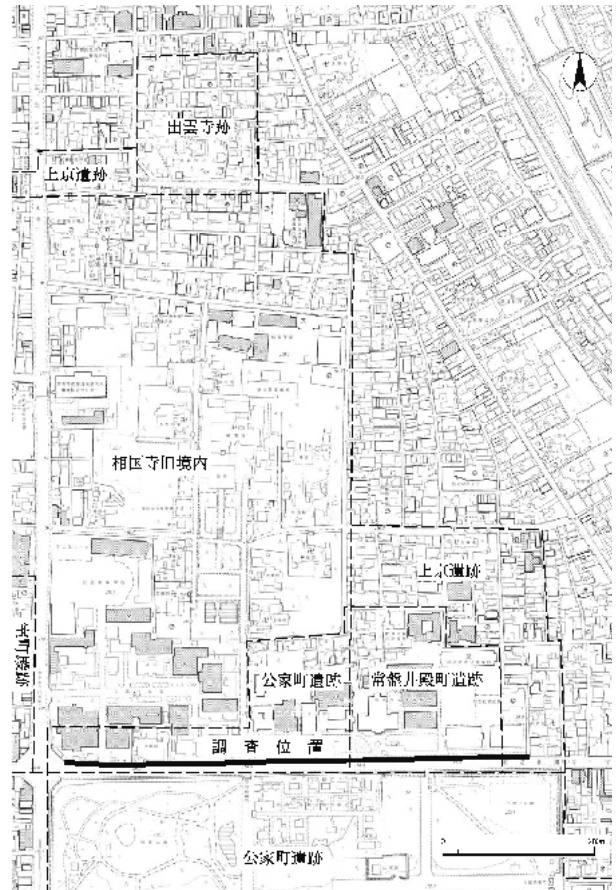


図 143 調査位置図

た。東側直近の No.43・48 地点においても同質・同色の土層を確認した。土師器が粉碎状態であるため確定はできないが、同時代の包含層と考えている。なお、基本層序は各測点で土層が著しく異なっているため特定できなかった。

遺物 出土遺物量は遺物収納コンテナ 2 箱分である。遺物の時期は、古墳時代、平安時代（後期・末期）、鎌倉時代（中期）、室町時代（中期・後期・末期）、桃山時代、江戸時代（前期・中期・後期・末期）にわたっているが、江戸時代が最も多い。古墳時代と考えられる遺物は、No.33 地点の西壁第 3 層から出土した土師器甕（肩部片）である。

小結 18 地点（No. 9・22・25・27・32・36・41・45・46・47・50・57・58・60・62・68・69）で、現代盛土及び近・現代路面直下から焼土及び炭を含む土層を検出した。そのうちの 10 地点で江戸時代末期の遺物を確認し 4 地点で採集した。これらは蛤御門の変によっ

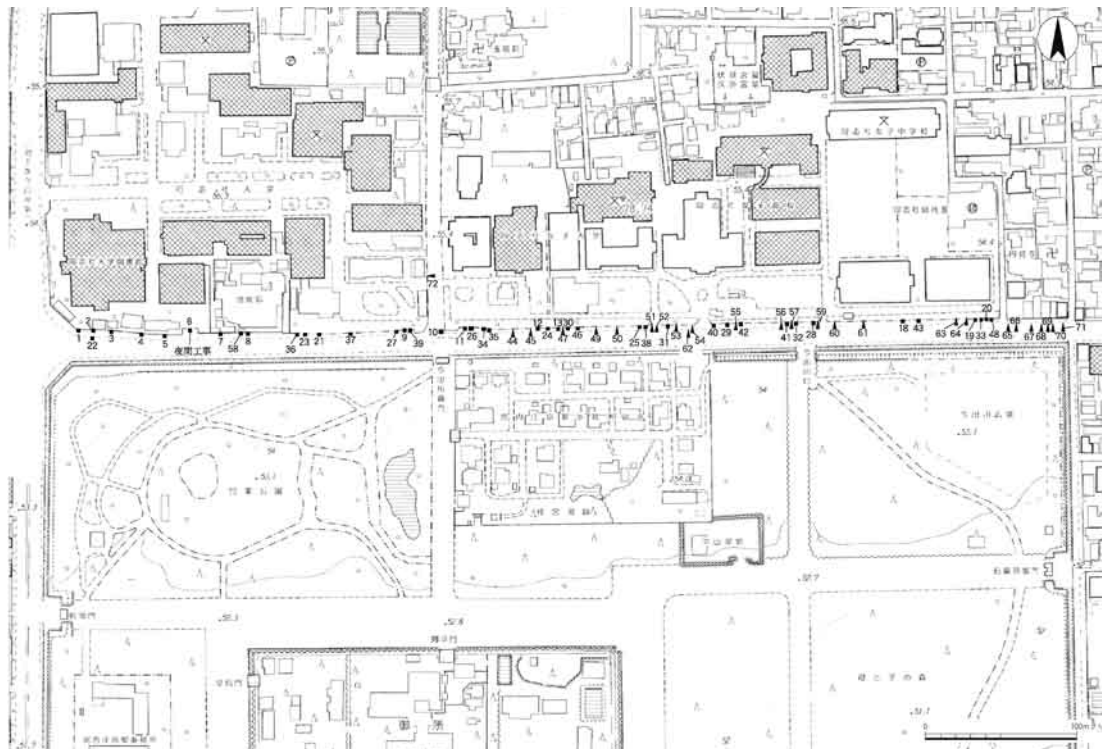


図 144 断面位置図

表 5 検出遺構一覧表

時代	地点・層名・遺構	土色・土質
古墳時代	No.33 西壁第3層 包含層	10YR3/4 暗褐色砂泥(縮る)
平安時代後期	No.26 南壁第2層 包含層	2.5Y3/2 黒褐色砂泥(やや粘質)
平安時代末期	No.72 東壁第1層 包含層	10YR3/4 暗褐色泥砂(小礫混)
鎌倉時代中期	No.32 西壁第4層 包含層	10YR3/4 暗褐色砂泥
室町時代中期	No.27 南壁第3層 包含層	10YR3/2 黒褐色礫(泥砂混)
室町時代中～後	No.56 北壁第3層 包含層	10YR3/4 暗褐色砂泥(炭少量混)
室町時代後期	No.51 北壁第2層 包含層	10YR3/4 暗褐色粘土(微砂混)
室町時代末期	No.35 北壁第2層 包含層	10YR3/2 黒褐色砂泥(炭混、やや粘質)
	No.58 北壁第2層 包含層	10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂
桃山時代	No.46 南壁第5層 包含層	10YR3/4 暗褐色泥砂(礫混)
江戸時代前期	No.46 南壁第4層 包含層	10YR3/2 黒褐色砂泥(炭多量混)
江戸時代前～中	No.46 南壁第3層 包含層	10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質砂泥(炭混)
江戸時代中期	No.12 西壁第4層 包含層	10YR1.7/1 黒色泥土(炭混)
	No.55 北壁第1層 包含層	10YR2/3 黒褐色泥砂(礫混)
江戸時代後期	No. 4 南壁第2層 包含層	10YR3/3 暗褐色砂泥(焼土・炭・礫混)
	No. 9 西壁第1層 包含層	7.5YR3/2 黒褐色砂泥(焼土混)
	No.11 西壁第2層 井戸	10YR3/4 暗褐色泥砂(崩落井戸砕石混)
	No.22 南壁第2層 包含層	10YR4/1 褐灰色砂泥(焼土・礫混)
	第3層 包含層	5Y4/2 オリーブ褐色砂泥(やや縮る)
	No.24 西壁第3層 包含層	5YR4/2 灰黄褐色砂泥(炭混、やや縮る)
	No.44 北壁第4層 包含層	5YR2/3 極暗褐色砂泥(炭少量、小礫混)
	No.47 北壁第1層 包含層	10YR3/2 黒褐色砂泥(炭・焼土少量混)
	No.51 北壁第1層 包含層	10YR3/2 黒褐色砂泥(炭混)
	No.53 北壁第1層 包含層	10YR3/4 暗褐色泥砂(3～5 p 大礫多量混)
	No.54 北壁第2層 包含層	10YR3/3 暗褐色泥砂(炭・小礫混、やや縮る)!
江戸時代末期	No.39 北壁第1層 包含層	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
	No.44 北壁第1層 瓦溜土坑	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
	No.62 西壁第1層 包含層	10YR3/3 暗褐色砂泥(炭・焼土少量混、やや縮る)
	No.63 北壁第1層 包含層	10YR3/3 暗褐色砂泥(礫混)

て起きた火災「元治の大火」(1864 年)の痕跡と考えられるが、烏丸電線共同溝立会調査(2005 年 12 月～2006 年 5 月)で検出した火災遺構に比較すると類焼範囲はやや少ないようである。No.26 地点では平安時代後期の土師器及び製塩土器を包含した土層が確認できた。No.33 地点では古墳時代の包含層を検出した。直近の No.43・48 地点も同質・同色の土層であり、微量ではあるが粉碎状態の土師器が包含されていることから、同時代の整地層の広がりと考えられる。各遺跡範囲に関連する顕著な遺構は確認できなかった。

(堀内 寛昭)

表 6 出土遺物一覧表

時 代	地点・遺構・層名	遺 物	備 考
古墳時代	No.33 西壁第 3 層 包含層	土師器甕	
平安時代後期	No.26 南壁第 2 層 包含層	土師器皿・製塩土器	
平安時代末期	No.72 東壁第 1 層 包含層	土師器皿	
鎌倉時代中期	No.32 西壁第 4 層 包含層	土師器皿・甕	
室町時代中期	No.27 南壁第 3 層 包含層	土師器皿・焙烙	
室町時代中～後	No.56 北壁第 3 層 包含層	土師器皿 平瓦	瓦二次焼成
室町時代後期	No.51 北壁第 2 層 包含層	土師器皿	
室町時代末期	No.35 北壁第 2 層 包含層	土師器皿 焼締甕	
	No.58 北壁第 2 層 包含層	土師器皿	
桃山時代	No.46 南壁第 5 層 包含層	土師器皿 平瓦	接合可
江戸時代前期	No.46 南壁第 4 層 包含層	土師器皿	接合可
江戸時代前～中期	No.46 南壁第 3 層 包含層	土師器皿	
江戸時代中期	No.12 西壁第 4 層 包含層	土師器皿	
	No.55 北壁第 1 層 包含層	土師器皿	
江戸時代後期	No.04 南壁第 2 層 包含層	土師器皿 棧瓦	
	No.09 西壁第 1 層 包含層	土師器皿・焙烙	肥前染付磁器碗
	No.11 西壁第 2 層 井戸	焙烙	
	No.22 南壁第 2 層 包含層	土師器皿	
	第 3 層 包含層	丸瓦	
	No.24 西壁第 3 層 包含層	鉄釉甕	信楽
	No.44 北壁第 4 層 包含層	播鉢	
	No.47 北壁第 1 層 包含層	土師器皿 平瓦	
江戸時代後期	No.51 北壁第 1 層 包含層	土師器皿	
	No.53 北壁第 1 層 包含層	焼締甕	
	No.54 北壁第 2 層 包含層	土師器皿 瓦質火鉢	
江戸時代末期	No.39 北壁第 1 層 包含層	泥面子	巴・扇文
		播鉢 軒丸瓦	巴文
	No.44 北壁第 1 層 瓦溜土坑	菊丸瓦	
	No.62 西壁第 1 層 包含層	焼塩壺 京焼	
		軒丸瓦	巴文
	No.63 北壁第 1 層 包含層	京信楽系陶器	
		軒丸瓦	巴文

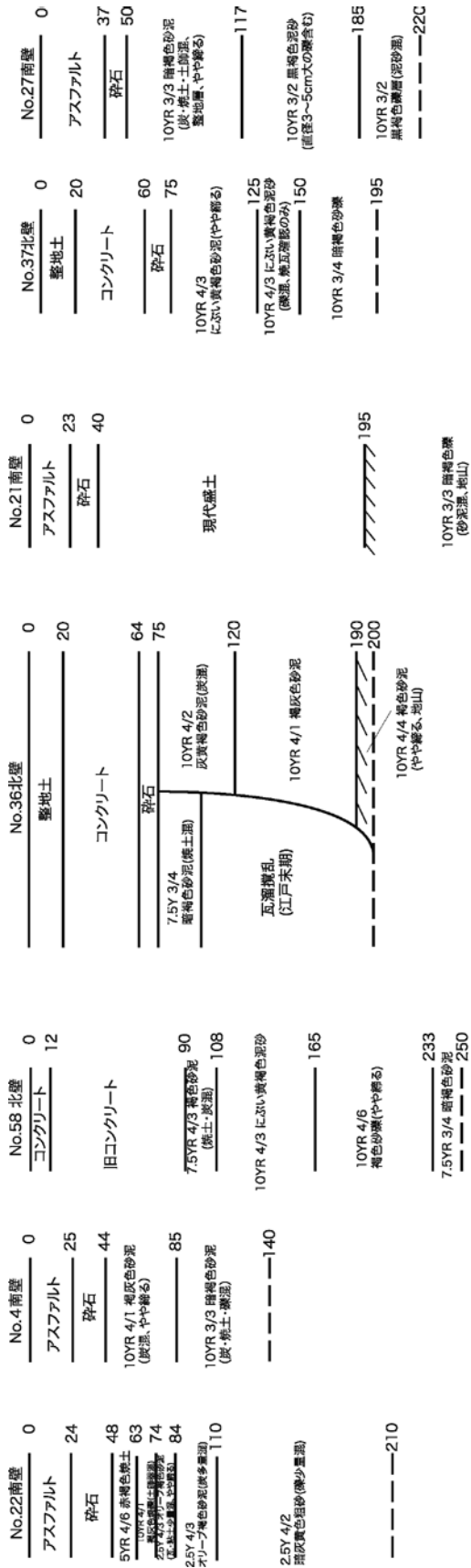
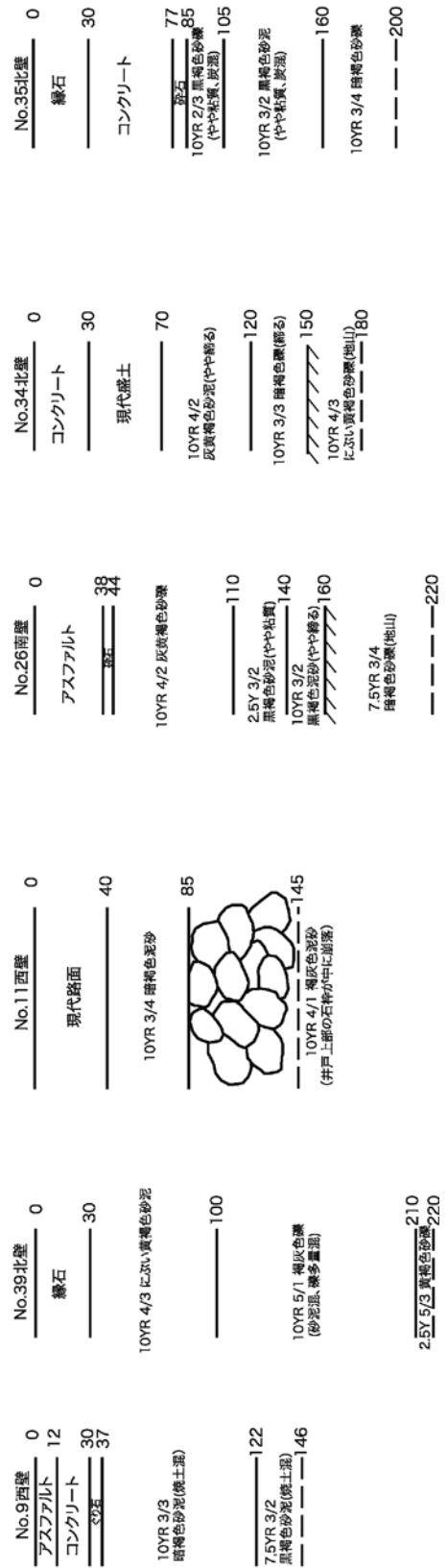


図 145 断面図 1



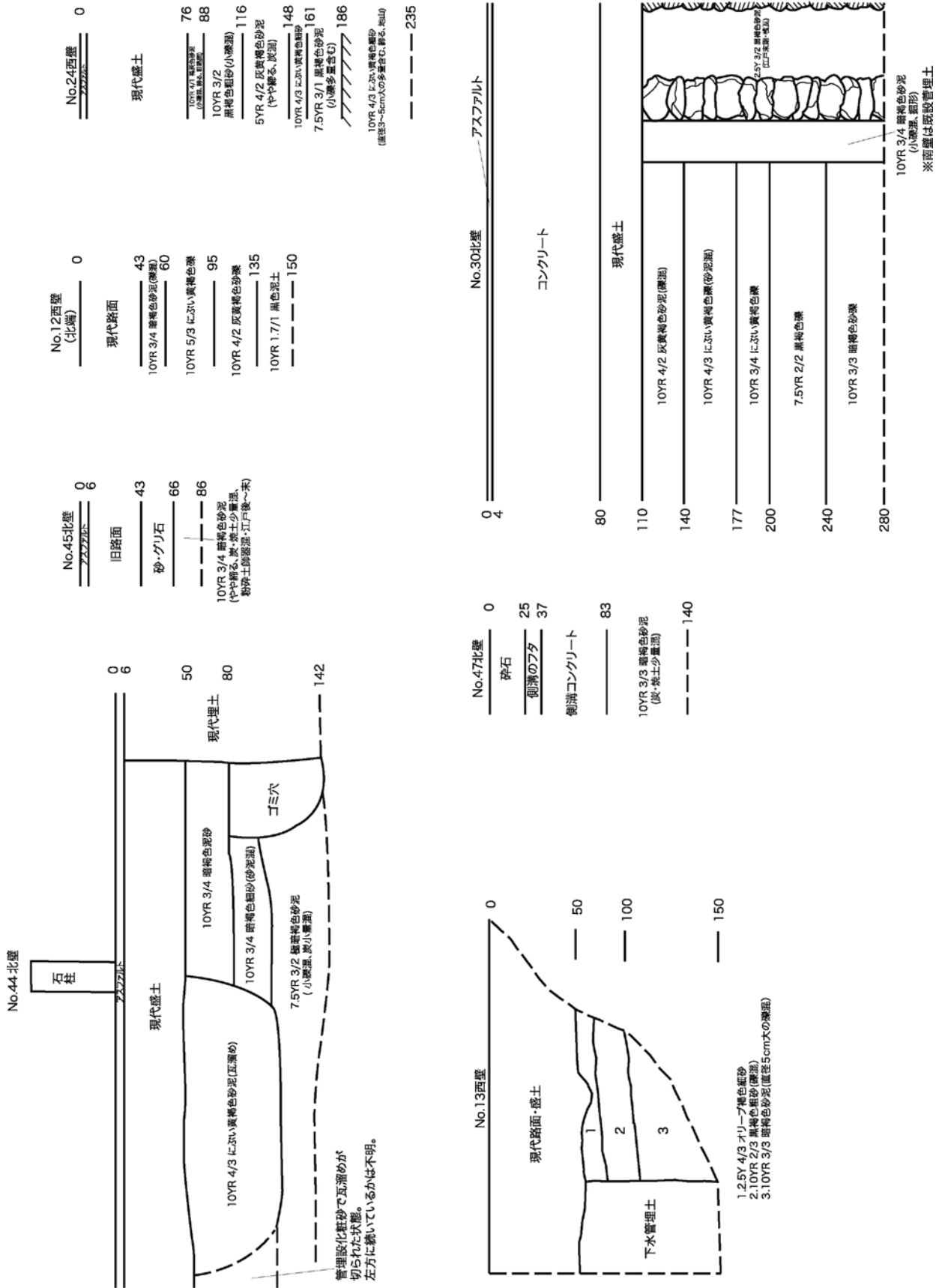


図 146 断面図 2

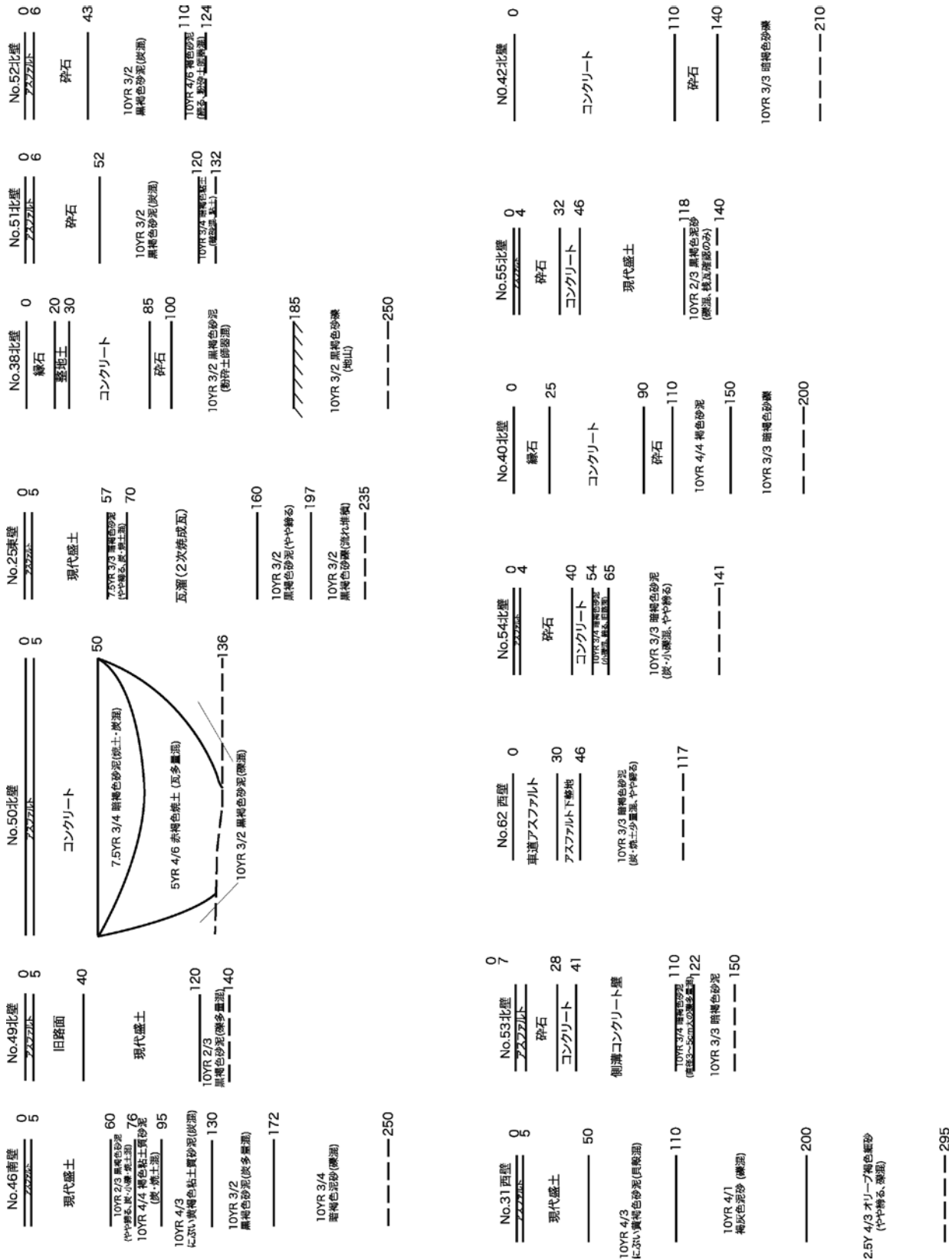


図 147 断面図 3

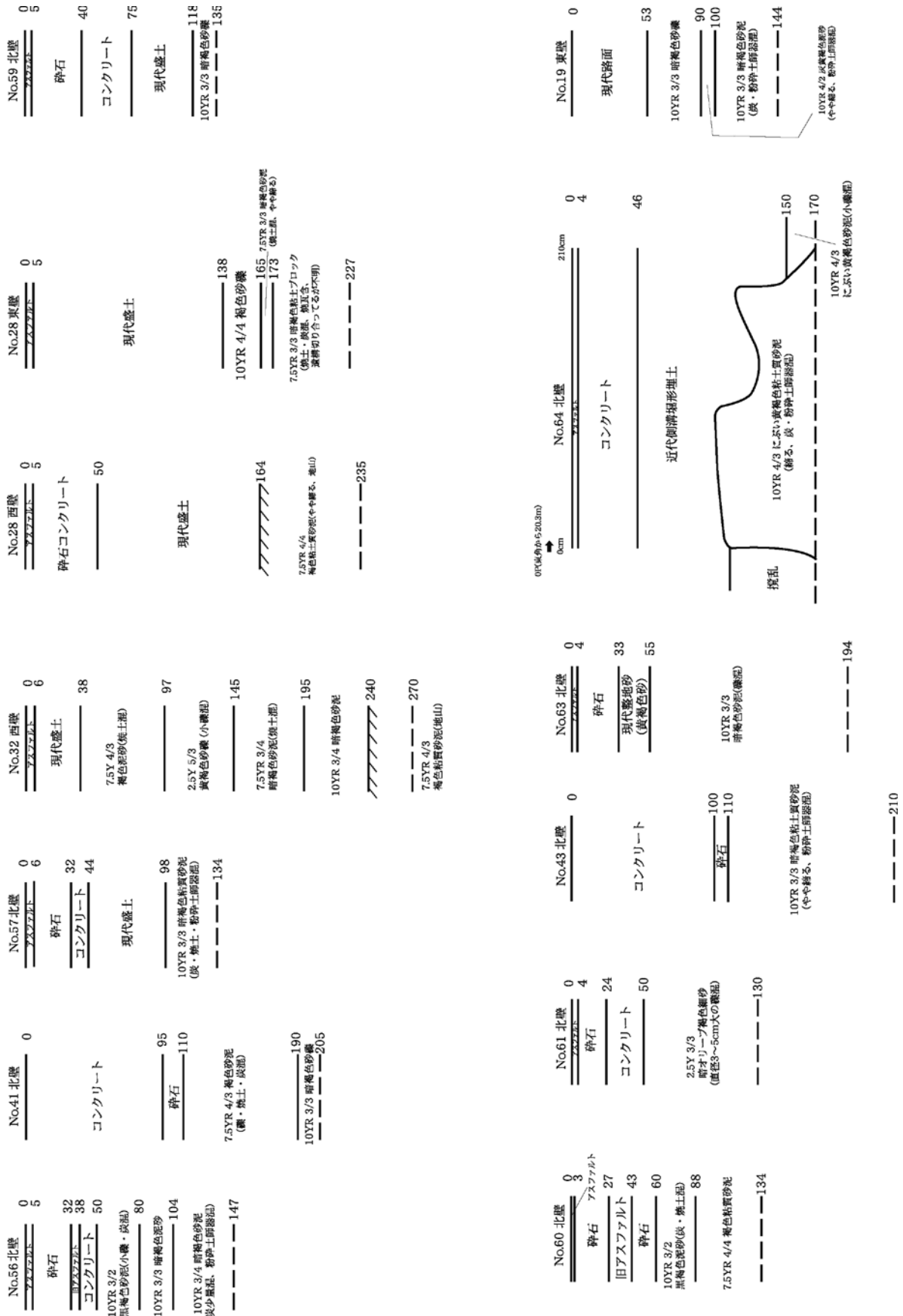


図 148 断面図 4

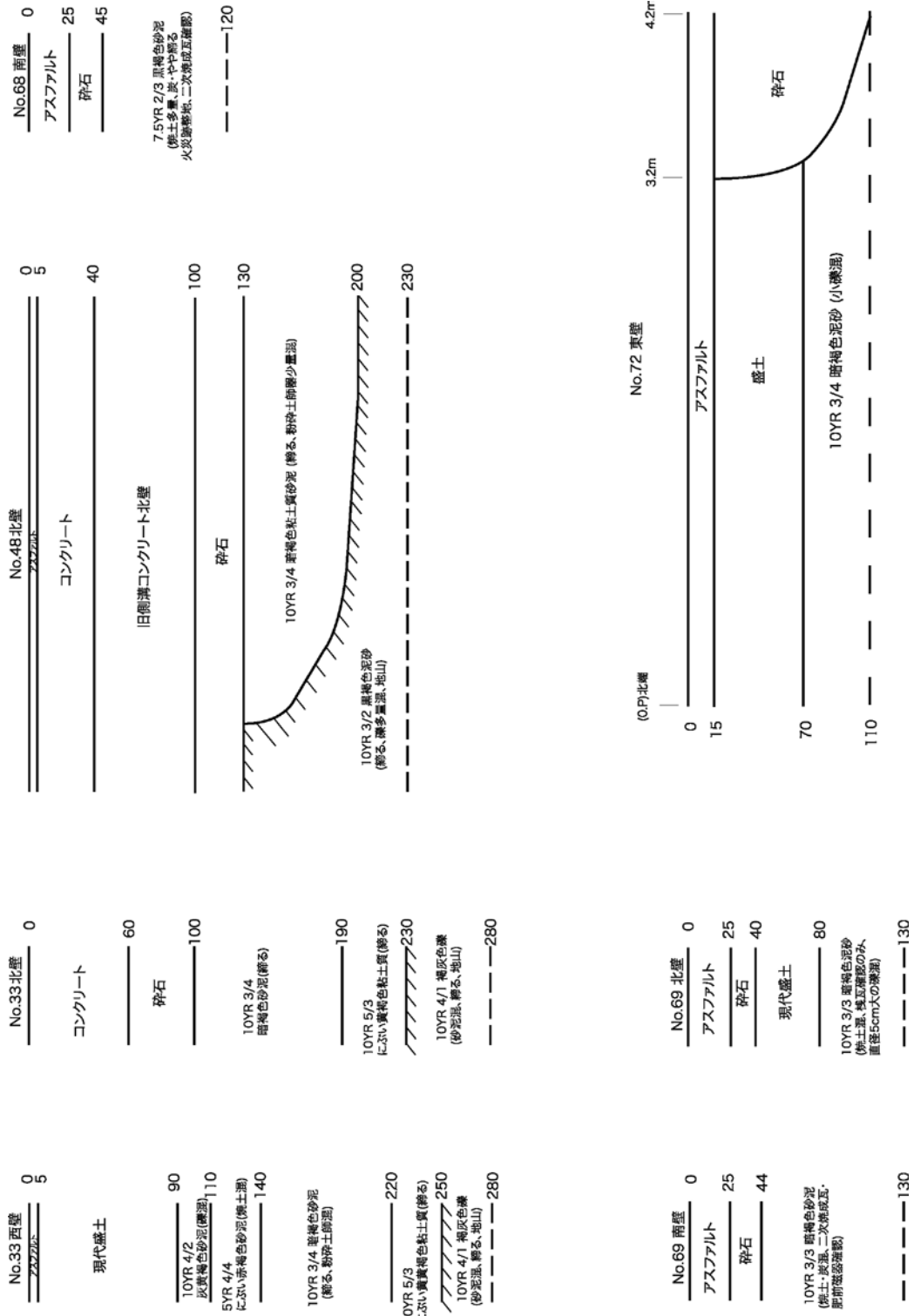


図 149 断面図 5

6 京都市指定名勝 知恩院方丈庭園

経過 この調査は、平成 2 年度に京都市指定名勝となった、知恩院方丈庭園の整備・保存管理計画に伴い、昨年度に引き続き庭園の変遷、方丈建物と庭園の関係および築山下層の状況を明らかにすることを目的とした。調査区は、建物と池の間にあたる陸部（1 トレンチ）と北池の西汀付近（2 トレンチ）の 2 箇所に分けて設定した。

調査は池の中央に土嚢を積み、北池の水を抜いてから開始した。また、陸部において下層から景石を検出したため、期間を延長して調査を行った。

1 トレンチでは白砂・盛土以下、厚さ約 0.4 m の江戸時代前期の版築状の整地層を検出した。整地層の下層からは池状堆積を検出し、花崗岩の一部がトレンチの南端で露出しており、全貌を明らかにするため調査区を拡張した。その結果、景石が据えられていることが確認できたため、池であることが判明した。

1 トレンチの延長として、大方丈の雨落溝の縁石近くを一部断ち割り、断面観察を行った。盛土以下、整地層、その下は池状堆積となる。いずれも他のトレンチと同様であった。

2 トレンチでは昨年の調査と同様の洲浜を現在の護岸の下層から検出した。洲浜は西に向かって緩やかにあがり、汀となる。この付近の景石の状態を確認するため、3 箇所石の周辺を拡張した。その結果、整地層より上に据えられているもの、整地層をやや掘り込んで据えられているもの、洲浜に据えられているものが確認できた。

遺構 今回の調査区は、陸部と西護岸付近の 2 箇所に分けて設定した。

陸部の 1 トレンチは、築山の裾部から大

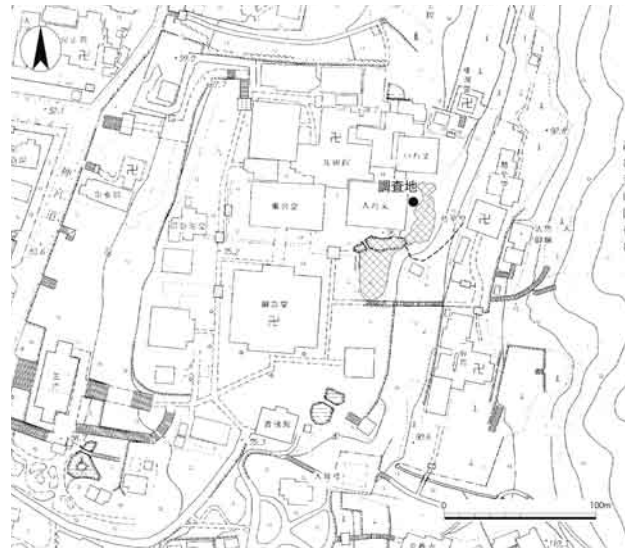
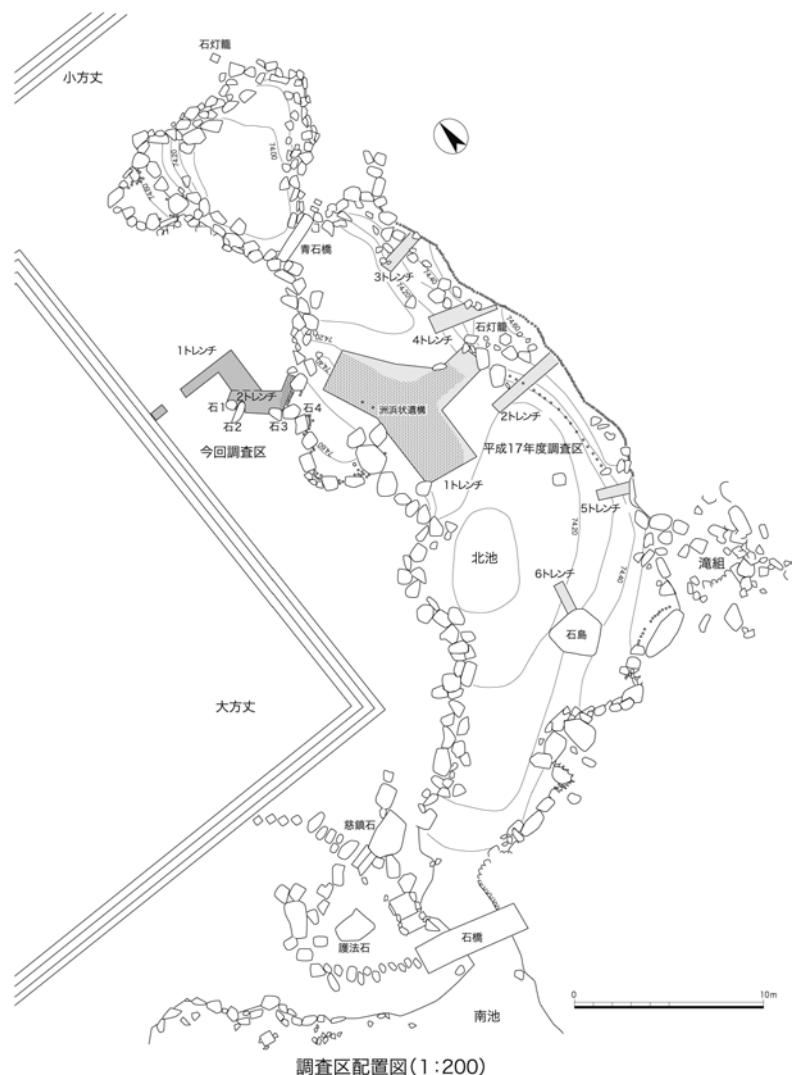


図 150 調査位置図



調査区配置図(1:200)

図 151 調査区配置図

方丈に向かって、まず南北 0.5 m、東西 3.5 mの規模で設定した。基本層序は 0.05 ~ 0.1 mの白砂・腐葉土・盛土、0.35 ~ 0.4 mの黄褐色砂泥・泥砂・粘土の整地層、灰色泥土の池状堆積層となる。1 トレンチ拡張部分では、整地層直上に厚さ 0.01 ~ 0.02 mの極細砂層が確認できた。

西護岸から陸部に向けて2 トレンチを南北 0.5 m、東西 1.8 mの規模で設定した。基本層序は腐葉土、近代以降の褐色砂泥層、整地層・池状堆積層となる。

その他、2 トレンチの延長として、現存している景石の据え方を確認するため、一部拡張した。

1 トレンチ 大方丈の雨落溝の縁石南東隅から、北に 20 m、縁石から東に 2 mの地点にトレンチを設定した。白砂・盛土以下、整地層となる。整地層は厚さ 0.35 ~ 0.4 mで、粘土・小石を混ぜ合わせ、上から突き固めており、固く締まる版築状の構造である。整地層からは江戸時代前期の土師器皿片と瓦片が出土した。この整地層の一部を掘り下げた。その結果、整地層下に池状堆積を確認し、景石が部分的に露出した。そのため、景石を中心に東・南に調査区を拡張した。材質は花崗岩で、規模は幅 1.0 m、厚さ 0.5 m以上、高さ 0.85 mである。東面に切り出しの痕跡である矢跡が3 個残存し、その大きさは約 10 ~ 15cmである。頭頂部は整地層より上面に突出している。底部付近で根固め用のものと、池底を造るためのものとみられる、10 ~ 50cm大の石を、10 数個検出した。

また、北・南壁付近で、景石の可能性のある花崗岩を2 個検出した。南側の石は高さ 0.5 m以上、幅 0.6 m以上、北側は高さ 0.3 m以上、幅 0.4 m以上あることが確認できた。

これらの周囲で、俵形の粘土状の固まりと木の葉や枝を含む土の固まりを検出した。表面の一部を採取し分析した結果、イネワラが付着していることが判明したため、池を埋め立てるときに入れた土嚢と判断した。池底から探査棒によりボ



図 152 調査前状況（北より）



図 153 調査状況（北西より）

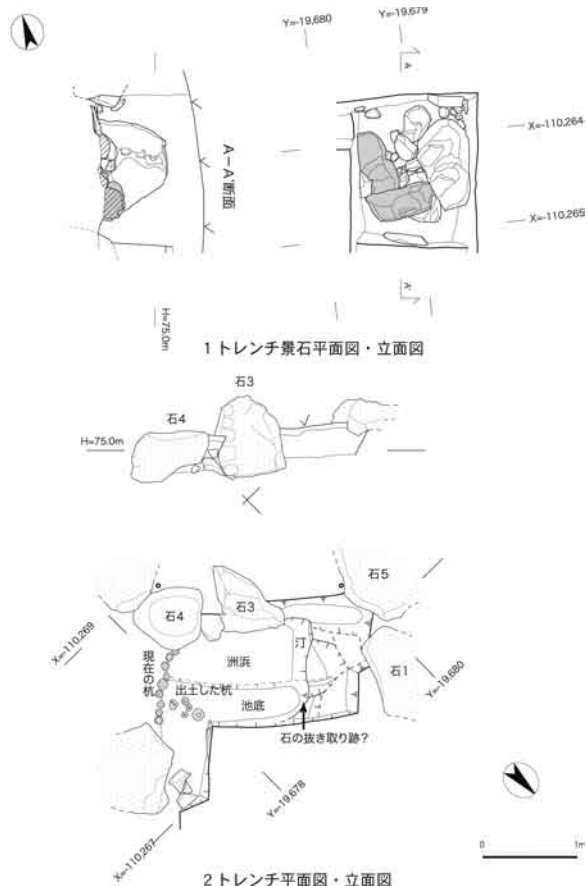


図 154 遺構実測図

ーリングした結果、下層に池もしくは湿地状の堆積が続くことが判明した。

1 トレンチの延長の雨落溝縁石際で断面観察のため、南北 0.5 m、東西 0.8 m のトレンチを設定した。同様の整地層・池、その下層に池もしくは湿地状の堆積が続くことも確認した。

2 トレンチ 現在の池の護岸から陸部に向かって設定した。近代以降に護岸補修のため入れられた明褐色粘土層は、厚さ約 0.3 m、現岸から約 1.3 m 西まで続く。この層の下から護岸の杭 6 本、砂の洲浜、小礫・瓦を敷いた粘土層の池状堆積、池底を検出した。現岸から約 1.3 m 西の地点から緩やかに下がる面に、洲浜・粘土層が整地層を切った状態で検出した。石の抜き取り穴とみられる土坑と木の根によって汀の状況は大半が攪拌されていたが、汀付近まである程度整地した後、整地層を削平し傾斜面を造り、その上に粘土を貼り池底を造っている。その上にさらに粘土層に石や瓦片を混ぜた層を重ね、砂を敷き詰めている状況が観察できた。洲浜から江戸時代前期の土師器皿片が出土した。洲浜は昨年度調査で検出した続きとみられる。

2 トレンチ南側と西側にある景石の据え方を確認する

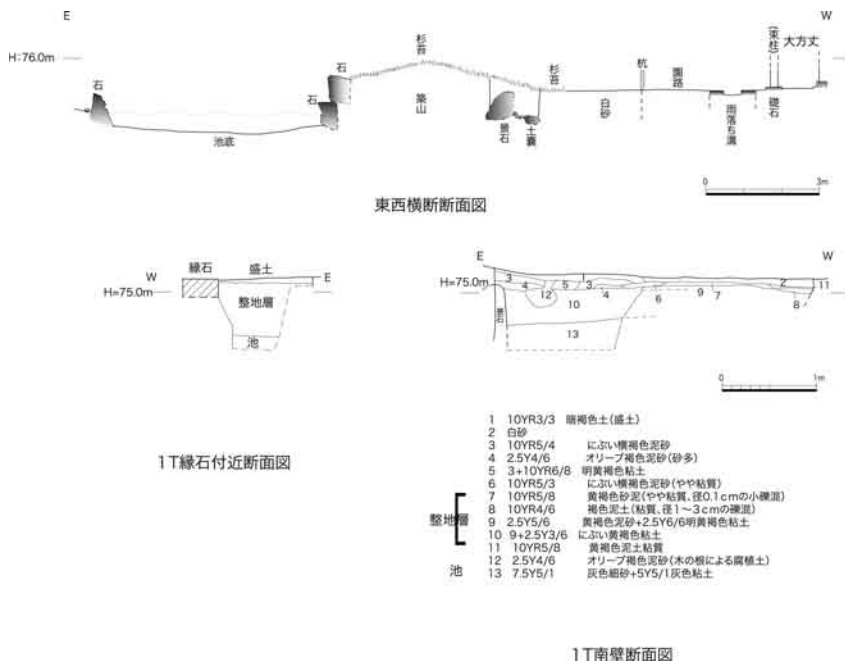


図 155 断面図

ため、一部掘り下げた。それぞれ上層からの掘形などはみられないため、石 1 は整地後の層に、石 2 は整地層、石 3 は洲浜面、石 4 は現在の池の護岸として据えられていると考えられる。

2 トレンチの延長上で、池内の一部を約 0.4 m 幅で断ち割り、断面観察を行った。灰オリブ色・オリブ灰色の粘質土層に 0.5 ~ 3cm 大の石が混ざり、互層になっているのを確認した。池底を何層にもしたのか、作り替えなのかは明確にできなかった。この底部で 1 トレンチで確認したものと同様の、池もしくは湿地状の堆積が続くことが確認できた。

遺物 遺物は整理箱に 2 箱出土した。土師器皿、瓦が多数をしめる。土師器皿は小片が大半で、時期の特定できるものは数点である。

土師器皿は体部が厚く、底部内面に沈線を施した、江戸時代前期の特徴をもつものが整地層・洲浜から出土している。また若干それらより古い特徴をもつ土師器皿が、整地層の下層より検出した池内から出土している。土師器皿には灯明皿片が 3 点ある。

瓦は、洲浜の砂止めにしたような粘土に貼った状態で出土している。また整地層内からも出土している。いず

れも棧瓦であるが、表面を丁寧仕上げている。特徴のあるものは、棟丸瓦の差し部が 3 点出土しており、いずれも整地層より上の層である。江戸時代後期から末期に比定できる。

1 片であるが、布目痕がある平安時代とみられる平瓦片が出土している。

陶磁器類は、信楽の器形不明品、菊皿、江戸時代末期の合子の蓋などが出土している。

整地層からは鉄製の鋸が、ほぼ完全な形で出土している。

小結 知恩院は浄土宗総本山で、承安5年(1175)法然上人が東山大谷の吉水(現在の知恩院勢至堂付近)に草庵を造営し、建暦2年(1212)この地で入滅した。その後の文暦元年(1234)に弟子の源智が法然を開山として再興し、四条天皇から「華頂山知恩教院大谷寺」の寺号を賜ったことに始まる。

慶長8年(1603)徳川家康により寺領の寄進があり、寺域の拡大と堂舎の造営が行われ、元和5年(1619)2代将軍秀忠が三門、経蔵を造営し諸堂の完成となった。しかし、寛永10年(1633)三門、経蔵を残し本堂、方丈などが火災により焼失してしまう。寛永18年(1641)3代将軍家光により復興が開始され、その後も数度の改修を経て、現在に至っている。

現在の大方丈、小方丈は家光により再建されたもので、それに伴い庭園も整備されたと想定される。庭園は、小方丈の南側から大方丈東側に面した細長い北池と、大方丈の南側に面した南池を中心としている。昨年度の調査は北池の池内と東側護岸を中心に行い、池内中央部では洲浜を検出した。今回の調査ではその延長と考えられる洲浜と、昨年度の調査で想定されたように緩やかな汀を検出した。汀付近の洲浜からは江戸時代前期の土師器が出土しており、陸部で検出した整地層から、ほぼ同時期の土師器が出土している。また、汀付近の土層断面からみても、整地された時期とこの洲浜のある池が同時期であることがわかる。汀付近まである程度整地した後、整地層を削平し傾斜面を造り、その上に粘土を貼り池底を造っている。さらに粘土層に石や瓦片を混ぜた層を重ね、砂を敷き詰めている状況が観察できた。

この整地層は、出土した土器から江戸時代前期のものであり、創建当初の家康の時期か、再建した家光の時期かの断定はできないが、園路の西端で確認した整地層とその下層の池は大方丈建物に向かって続くことを確認した。

また、整地層の下層から検出した石は、表面に残る矢跡が建物の方向に向いていることに若干の疑問は残る



図 156 1 トレンチ景石出土状況(北西より)



図 157 1 トレンチ拡張全景(西より)



図 158 2 トレンチ州浜出土状況(南東より)

が、根石とみられる石を底面付近に伴うため、立石であると判断し、景石とした。

これらの池の下層にさらに池状の堆積があることを確認しているが、この層が池の堆積土とすると、知恩院が家康により拡張される以前のものである可能性もある。

応永元～34年(1394～1427)の「太子堂白毫寺古図」には、鎌倉時代に金沢北条の京都における拠点として、

その後、足利尊氏が拠点とした常在光院がこのあたりに描かれている。しかし、常在光院の名は金沢文庫・徒然草・園太暦など多数の文献に見られるが、場所が特定されるものがなく遺跡としても認定されていない。今回は探査棒による確認にとどめたため、この湿地状堆積がどの時期のどのような遺構であったのかは今後の調査を待たなければならない。

2 箇年にわたって調査を行ってきた結果、池を含めた庭園の変遷が確認できたことが調査成果としてあげられる。これまで北池を中心に調査を行ってきたが、今後検証のためにも、さらに南池の調査も望まれる。

(近藤 章子)

7 嵯峨折戸町遺跡・上之段町遺跡

経過 JR 嵐山線太秦・嵯峨嵐山駅間の複線化による路盤新設工事（擁壁設置）に伴い、立会調査を実施した。調査地は、中又踏切東側の線路南側用地（嵯峨中又町）及び東清水踏切の線路北側用地（太秦一町芝町）の 2 区域である。

中又踏切区は、嵯峨折戸町遺跡（平安時代を中心とした集落跡）範囲の南側中央にあたる。平安京域外の西北に位置する旧下嵯峨村に属した地域であり、古代は葛野郡川辺郷に属する嵯峨地域の一部であった。東側に斎川とも称された有栖川が南流し、古くから氾濫が頻発した土地であったことが知られている。



図 159 調査位置図

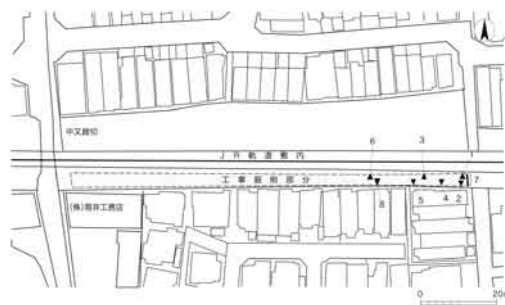


図 160 中又踏切区調査地点

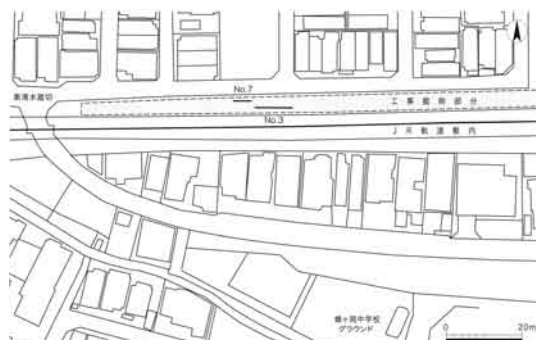


図 161 東清水踏切区調査地点

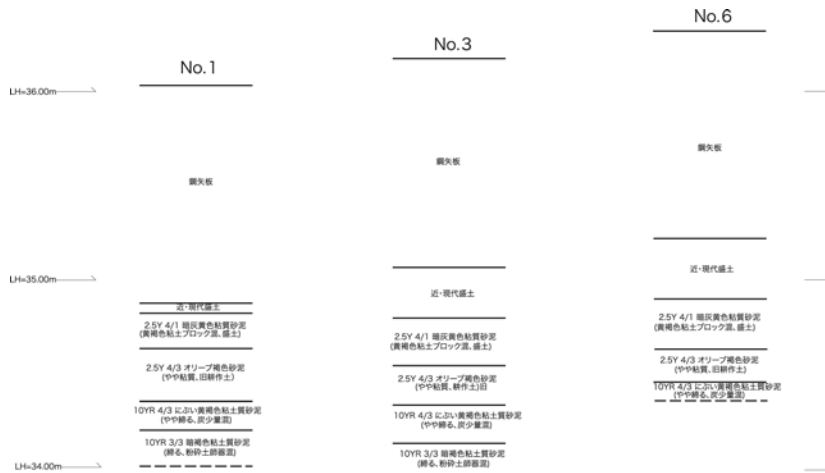


図 162 断面図 1

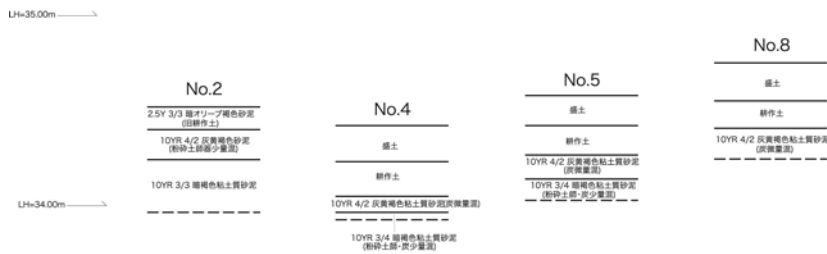


図 163 断面図 2

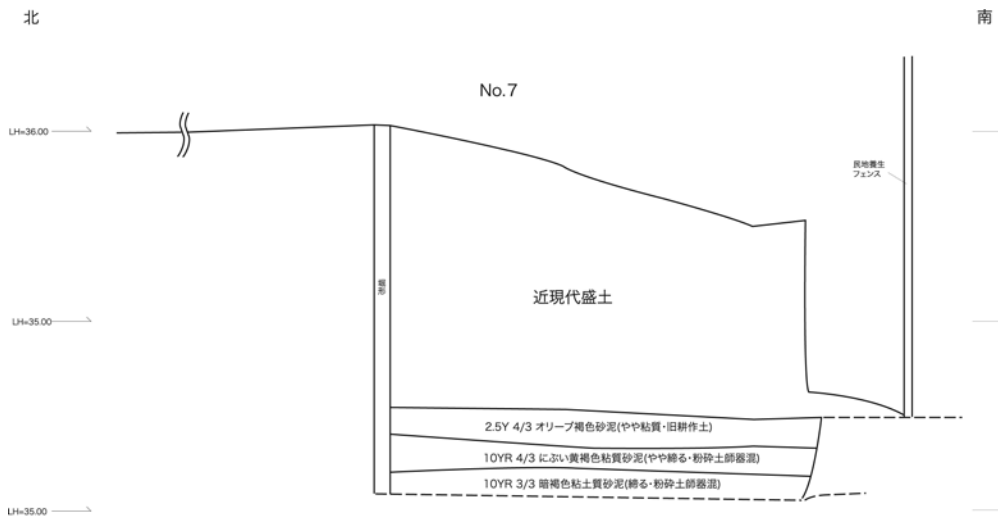


図 164 断面図 3

東清水踏切区は、上之段町遺跡（古墳・平安時代の集落跡）範囲の西側中央にあたる。この踏切の南に位置する蜂ヶ岡中学校での試掘調査（1988年7月実施）では、古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝などが検出されている。

今回の調査区周辺においては、1989年6月から1991年1月にかけて双ヶ岡地域、太秦地域、嵯峨・嵐山地域を対象に広範囲な立会調査が行われ、弥生時代から江戸時代に至る各時代の遺構が多数検出されている。

遺構 中又踏切での基本層序は、近現代盛土・第1層

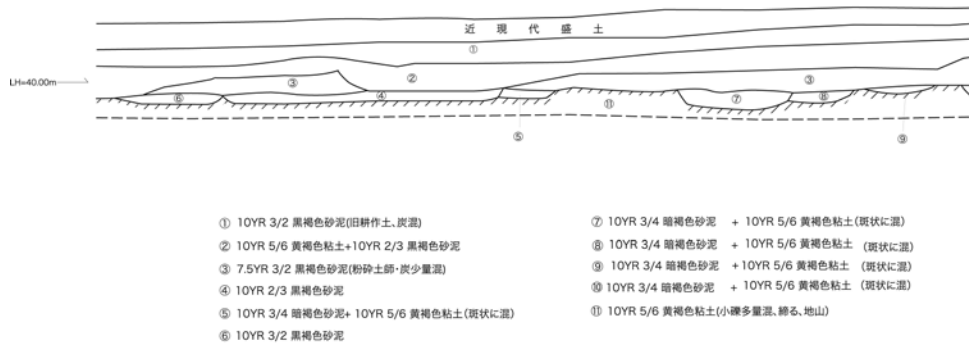


図 165 断面図 4

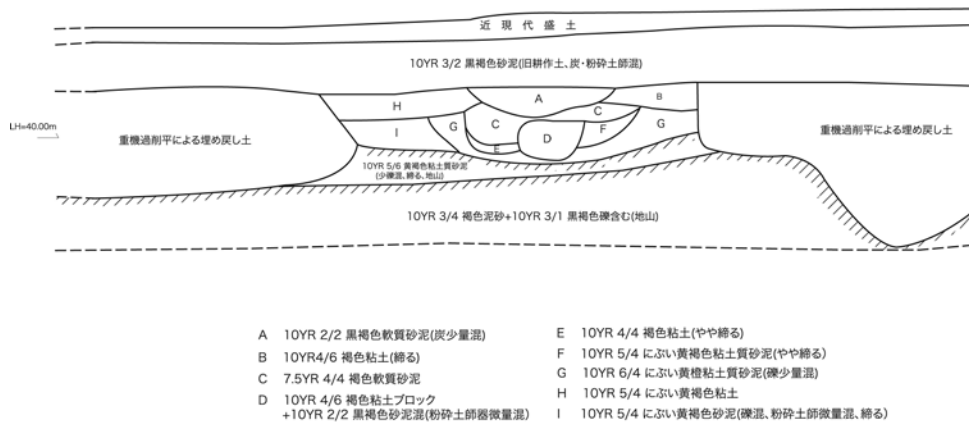


図 166 断面図 5

/ 旧耕作土・第 2 層 / 灰黄褐色粘土質砂泥・第 3 層 / 暗褐色粘土質砂泥 (平安時代包含層) となる。(断面図 1 ~ 3)

東清水踏切は、北壁を 37 度の法面に削平前と後の 2 面を記録した。削平前断面は近現代盛土・第 1 層 / 旧耕作土・第 2 層 / 黄褐色粘土と黒褐色砂泥が斑状となる混合層 (時代・性格不明)・第 3 層 / 黄褐色粘土の地山となり、この地山を浅い土坑及び落込 (断面図 4 ④~⑩) が切っている。遺物は検出できなかった。

削平後の法面では、現代盛土・第 1 層 / 旧耕作土・第 2 層 / 黄褐色粘土質軟質砂泥・第 3 層 / 黄褐色粘土質砂泥の地山となる。この法面では、褐色粘土ブロックが混入した竪穴住居跡と考えられる遺構を検出した。(断面図 5)

遺物 出土遺物は遺物コンテナ 2 箱分である。すべて中又踏切区域から出土したもので、東清水踏切東区域からの出土はなかった。遺物は、平安時代前期、江戸時代前期、近代の 3 時期が認められ、中世の遺物は未検出で

ある。

小結 中又踏切区域では平安時代前期の遺物包含層が検出できた。この包含層は南側用地の東西及び南に広がっていることがうかがえ、調査地が平安時代の集落の一部であることが補強できた。東清水踏切区域では 37 度という法面ではあったが、竪穴住居跡の竈部分と考えられる遺構を一基検出することができた。この法面は擁壁工事における仕上げ工程のため、遺物の検出作業ができず時期の特定はできなかったが、周辺におけるこれまでの調査成果などから、古墳時代の遺構と考えている。

なお、いずれの調査区域も工事通路が約 2 m 設けられていたため平面調査の可能性も検討したが、工事関係者及び廃土搬出車両の入退場が頻繁なため、断面土層の確認のみとした。

(堀内 寛昭)

8 史跡・名勝 嵐山

経過 本調査は、京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3-15で計画された建物の建設に先立って行った試掘調査である。調査地は、大堰川北岸の史跡・名勝嵐山の範囲内に位置する。

当地は、鎌倉時代には『山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図』^{註1}によれば、建長年間(1249～1256)に造営された後嵯峨上皇の院御所である亀山殿と惣門前路をはさんだ東側に位置する「芹河殿跡」にあたとみられる。また、室町時代には『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』^{註2}によれば、天龍寺の南に接する霊庇廟の東側で「天龍寺領」または「在家」地にあたと考えられる。

試掘調査に先立って2日間にわたり既存建物基礎の解体に伴う立会調査を行った。掘削断面の土層観察では、現地表下0.3～0.4mで中世から近世の耕作土層、以下に室町時代・平安時代の遺物包含層を検出した。しかし、建物基礎が大規模であったため撤去作業に伴って少なからず遺構が壊されることが予測された。そのため、現地において京都府教育委員会文化財保護課・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課・設計事務所・施工業者と当研究所の五者で、建物基礎の配置と立会調査の成果から試掘調査区の位置と規模について協議した結果、遺構の遺存が比較的良好とみられる地点に調査区を設定した。

なお、試掘調査は、文化庁文化財部記念物課、京都府教育委員会文化財保護課および京都市文化財保護課の指導の下に実施した。

当初は1区：約70㎡、2区：約44㎡の調査区を設定し調査を開始した。調査終了後、その成果をふまえ、設計事務所・施工業者を含めた再度の協議の結果、1区南に接して追加調査区：約54㎡を設



図 167 調査位置図



図 168 調査区配置図

定した。調査区面積は最終的に167㎡となった。

その結果、1区では室町時代の2面の遺構面を確認し、溝状集石遺構・柱穴・土坑などを検出した。2区では既存建物基礎など攪乱部分が多かったが、室町時代の柱穴列・土坑などを検出した。

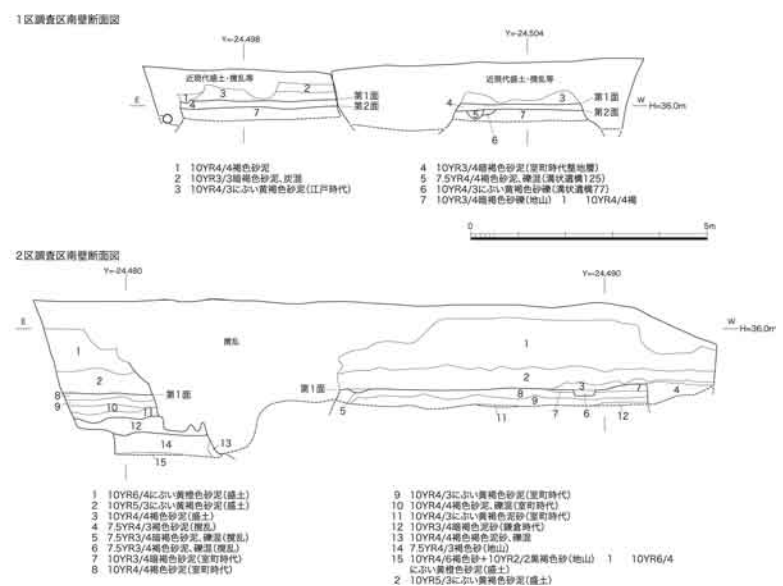


図 169 断面図

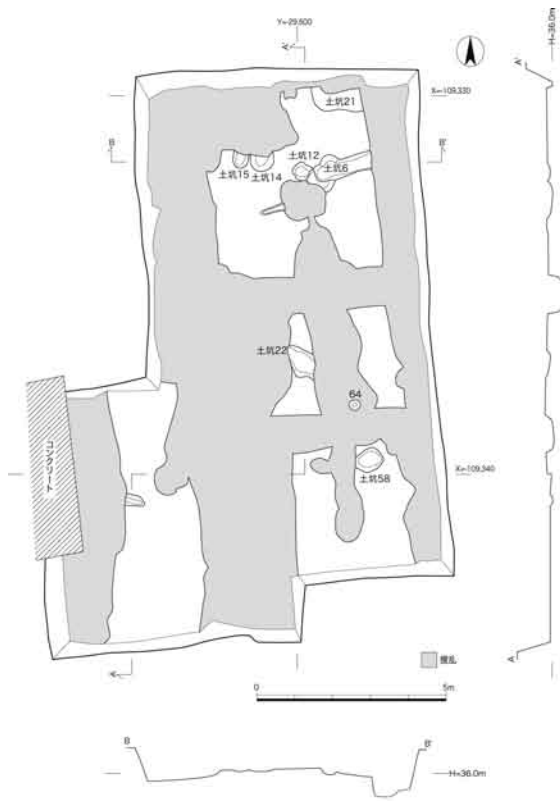


図 170 1区遺構実測図（第1面）

検出した遺構は、保護処置を行った後に埋め戻した。具体的な方法として、溝状集石遺構の全体を不織布で覆い、柱穴・小土坑には砂入りの土嚢を入れた。さらに遺構面全体には山砂を約 20cm の厚さで敷きつめ保護層とした。さらにその上面に土嚢袋を 2 m 間隔で配置し、

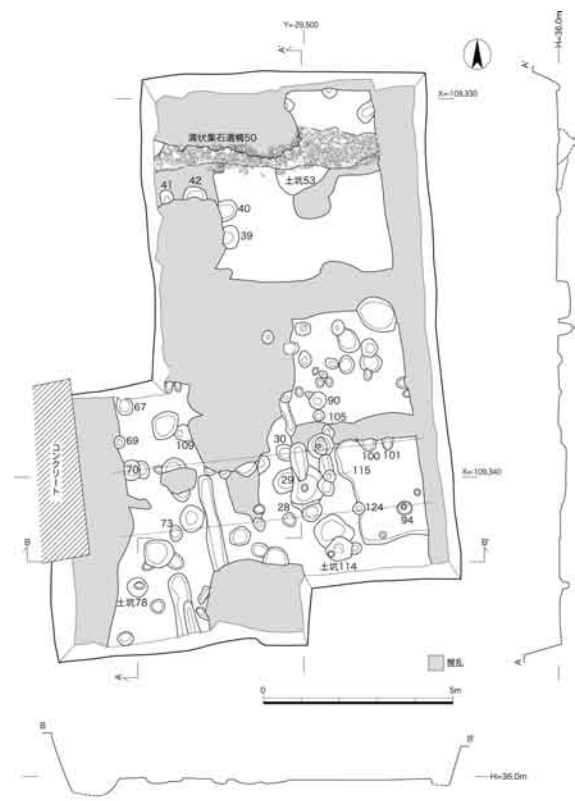


図 171 1区遺構実測図（第2面）

遺構面の明示とした。

遺構 調査区の基本層序は1区が、現代盛土層 0.3 m、江戸時代以降の耕作土が2層 0.4 m、室町時代の整地層が 0.2m ある。以下、地山層となる暗褐色系砂礫が堆積する。室町時代の遺構は、地山面で多く検出した。2区

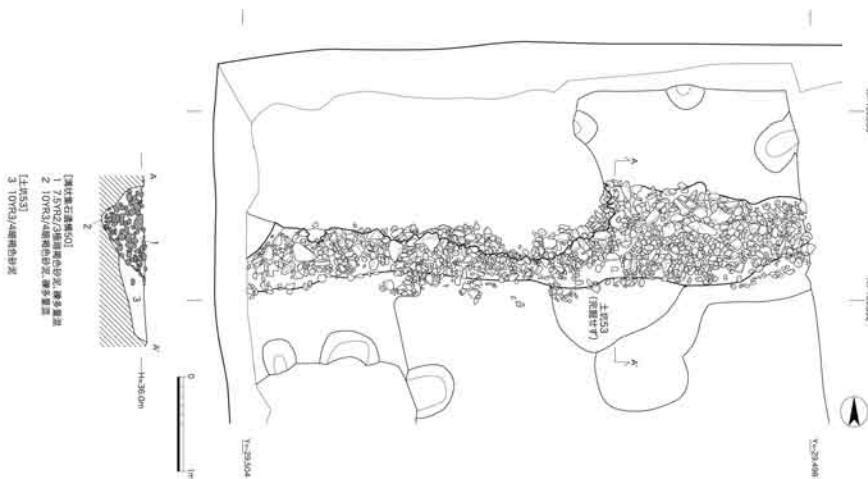


図 172 溝 50・土坑 53 実測図

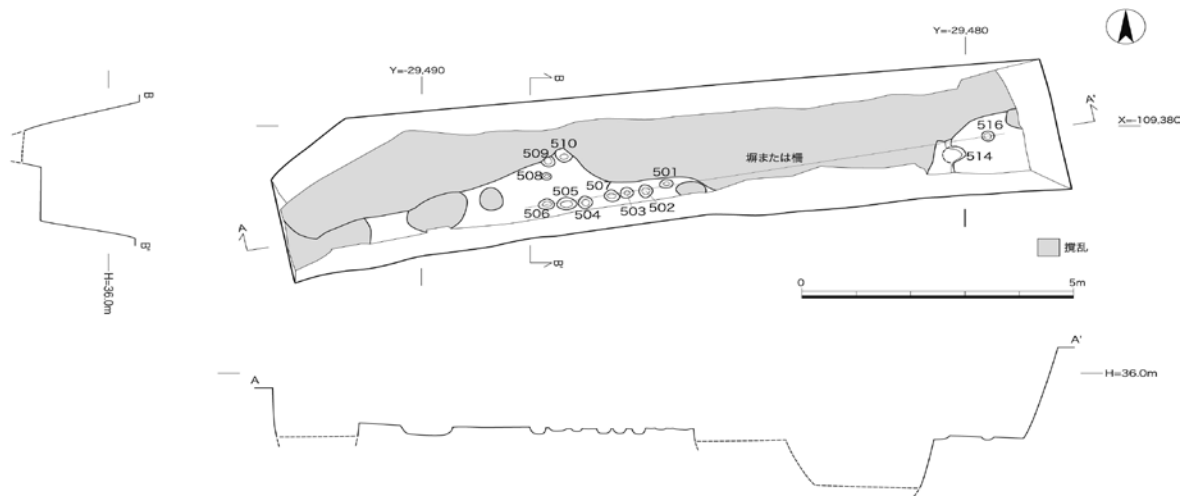


図 173 2区平面実測図（第1面）

は、現代盛土層 1.7 m、室町時代の整地層が 5 層 0.8 m、鎌倉時代の整地層が 1 層ある。以下、地山の褐色砂層、黒褐色砂層の堆積となる。

[1区] 室町時代の整地層（第4層）の上面を第1面、地山層上面を第2面とした。ともに室町時代後期の生活面とみられ、時期差はほとんどみられない。

第1面の北部で小土坑 12・14・15 などを検出した。径 0.5～0.6 m、深さ 0.5～0.8 m ある。他には土坑 21・22・58 など不定形の遺構を検出した。小土坑は柱穴の可能性もあるが、攪乱部分が多いこともあり建物には復元できない。

第2面では、北部で溝状集石遺構 50 を検出した。この溝は幅約 1.2m、深さ 0.5m、東西方向に約 6 m、東は攪乱に切られ不明であるが、西側は調査区外へとさらに延びる。溝内には 3～20cm 大の礫がぎっしりと詰まり、中には瓦片も少量含まれている。中央部には大振りの石が東西方向に並ぶ構造である。溝の断面形は浅い V 字形である。Y=29.500 付近での幅 0.2 m ほどの断割に留め、全体の掘り下げは行っていない。調査区南部では、P70・30・100、P73・28・124・94 などの径 0.2～0.5 m の小規模な柱穴を多数検出したが、明確に建物を復元するには至らない。北部の溝状集石遺構 50 と南部の柱穴群との約 4 m 間は遺構密度が低い。

[2区] 第1面（8層上面）の南壁際で P 501～507、516 などの径 0.2～0.5 m の柱穴を 8 基以上検出した。柱穴列は東で北に振る傾きをもつ。堀または柵状の遺構が想定できる。柱穴の間隔が狭いことから、造り替えがあったと考えられる。攪乱断面の観察により、地表下 1.7 m から室町時代の遺物包含層を 5 層検出した。上層部分には平安時代後期の遺物が混じる。その下層には、鎌倉時代前半の遺物包含層が約 0.4 m の厚さで堆積する。これらの堆積層は良く締まっており安定した状況を呈している。

遺物 調査で出土した遺物は、整理箱に 13 箱である。ほとんどが土器類で、土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器などが含まれる。瓦類の出土は非常に少ない。平安時代から明治時代までのものがあるが、最も多いのは室町時代のものである。2区では遺構保護のため室町時代の整地層以下の掘り下げを行わなかったため、遺物の総量は多くない。他には、金属製品やガラス製品などが出土している。

平安時代から鎌倉時代の出土土器 土師器皿、須恵器椀、瓦器羽釜などがある。ほとんどのものが細片となっており、断面などに損傷が進んだ小片が多い。

土師器皿（1～5）は、ほとんどが赤色系の皿 N で、1 は口径 9.1cm、2 は口径 12.8cm、3 は口径 14.7cm

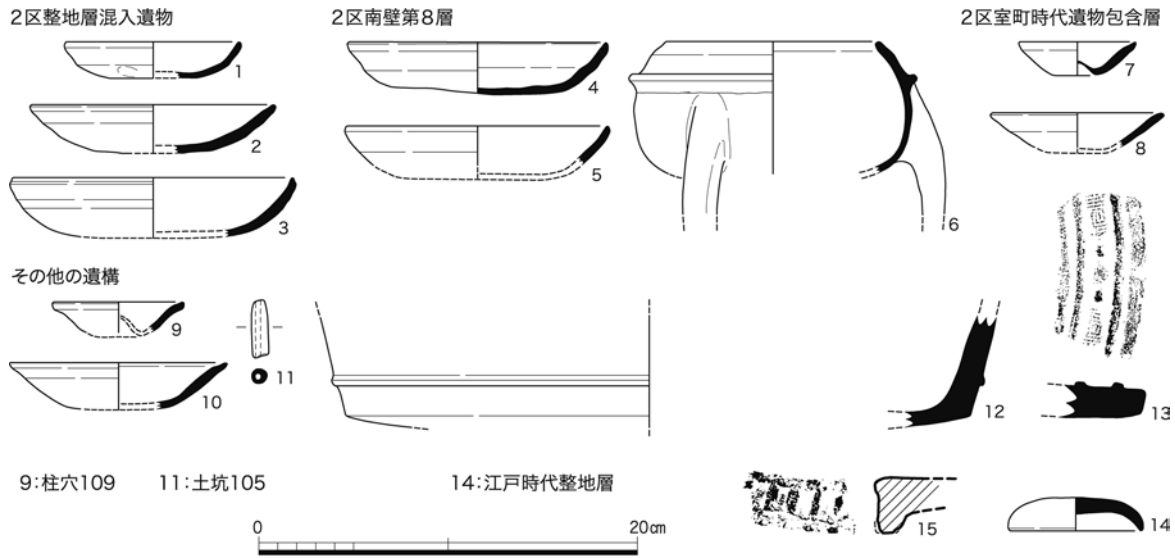


図 174 遺物実測図

ある。内外面はナデ調整を施す。2・3の口縁部外面は2段凹みナデを残す。3は口縁端部の断面が三角形状を呈する。2の底部内面には煤が付着する。4・5は口径13.6・14.0cmある。内外面はナデ調整を施す。口縁部外面は1段凹みナデを残す。ともに胎土は砂粒を少量含み、にぶい褐色を呈する。焼成は良好である。1～3は2区整地層から出土した。京都V期に属する。^{註3}4・5は2区南壁第17層から出土した。京都VI期中～新段階に属する。瓦器羽釜(6)は、体部はやや扁平気味の球形を呈し、上部に鐶を貼り付ける。口径11.2cmある。口縁部が強く内傾する。体部に長い足を3本付けるとみられる。体部上半外面はナデ調整、下半外面はオサエ調整時の指頭痕がつく。内面はハケメ調整する。体部下半外面に煤が多く付着する。胎土は砂粒を少量含み、灰色を呈する。焼成は良好である。13世紀に属する。2区南壁第17層から出土した。

室町時代の出土土器(7～10・12・13) 土師器皿、瓦器鍋・羽釜・火鉢、焼締陶器甕、輸入磁器(白磁・青磁・青花) 椀・皿、土製品などが出土している。いずれも後期に属する。

土師器皿(7～10)は、白色系の皿である。7・9は皿Shで底部中央が上方に押し上げられたいわゆるヘソ皿である。口径6.1・6.8cmある。8・10は皿Sで、

口径9.0・11.5cmある。胎土は砂粒を少量含み、灰白色を呈する。焼成はおおむね良好である。京都区期中相～新相に属する。7・8は2区室町時代遺物包含層、9は柱穴109、10は柱穴69からの出土である。瓦器火鉢12は、体部下半である。底部付近に一条の突帯をめぐらせる。内面は横ナデ調整、外面はヘラミガキを施す。瓦器火鉢13は水平に延びる口縁部で、上面に二条の突帯をめぐらせ、その間に雷文が押印される。胎土は砂粒を少量含み、外面はにぶい橙色、内面は暗灰色を呈する。焼成は良好である。15世紀に属する。溝状集石遺構50から出土した。

江戸時代の出土土器(14) 土師器皿、瓦器鍋・羽釜、焼締陶器挿鉢・甕、施釉陶器椀・皿・鉢、磁器椀・皿、土製品などが出土しているが図化できるものは少ない。おもに整地層からの出土で、少量である。

焼塩壺蓋(14)は、狭口の焼塩壺の蓋である。内外面とも粗いナデを施す。口径6.9cmある。胎土は砂粒を少量含み、橙色を呈する。焼成は良好である。17世紀後半に属する。1区江戸時代整地層から出土した。

土器類の他には、土製品、瓦類、金属製品、石製品、ガラス製品などがみられる。土製品には土錘がある。瓦類には、鎌倉時代から江戸時代以降までのものがあり、種類は軒平瓦・丸瓦・平瓦・塼などがある。金属製品に

は江戸時代の遺構から出土した銭貨・鉄釘などがある。銭貨は粗雑な造りの銅銭で銘がほとんど読み取れない。

土錘（11）は長さ 3.2cm が残存する。径 0.9cm。胎土は砂粒を多く含み、多孔質である。焼成は不良である。心棒の周囲に粘土を巻き付けて形成する。室町時代に属する。1 区土坑 105 から出土した。剣頭文軒平瓦（15）は瓦当上面に布目が残る。瓦当下面は横方向にヘラケズリ、瓦当裏面はナデ調整を施す。半折曲げ技法による。胎土は白粒子を少量含み、灰色を呈する。焼成は良好である。鎌倉時代に属する。1 区集石遺構 50 から出土した。

小結 1・2 区ともに室町時代の遺構を検出した。1 区第 2 面の標高は約 36.0 m で、西側の靈庇廟の標高^{註4}より約 2.5m 低くなり、東に向かってなだらかに下がる地形となっている。また、西側の小督庵の調査では、南北方向の石組堀の東側の遺構密度の極めて低い部分を空地または道路部分と考えた。今回の調査地は、この道路の東側に位置することから、宅地内にあたる考えられていた。

1 区の調査区北部で検出した東西方向の溝状集石遺構 50 には、礫が多量に詰まっている。このような構造の遺構の性格は、区画溝、建物地業、暗渠などが考えられるが、ここでは、溝内中央部に大振りな石が据えられていることを重視し、さらにほかに検出した遺構の配置などから、塀などの建物地業として考えておく。溝状集石 50 を塀跡とみることにより、これより南側が宅地内と考えられる。南側の宅地内では小規模な柱穴を多数検出した。塀と柱穴集中部の間は遺構の分布密度が低いため、空地となっていたと考えられる。柱穴の配置からは、建物を復元するまでには至らない。塀の傾きは、ほぼ東西方向であり、天龍寺の伽藍配置と傾きが同一である。一方、南側の P70・P30・P100、P73・P28・P94 などからなる柱列の傾きは、東側で北に振っており、区画と考えられる塀とは傾きが異なっている。北東 50m 地点での発掘調査^{註6}で検出した濠と蔵などの建物は、ともに西で南に振る同様の傾きをもっており、土地区画と宅地

内部の構造については多様性があるとみられる。

今回の調査地内では、瓦類の出土が非常に少ないことから、建物が存在していたとすれば、板葺きなどの建物が想定される。『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』には、調査地と考えられる位置に「在家」と書き込まれており、建物の性格を推測する際に有効な資料となった。

2 区で検出した室町時代の遺構面の標高は 34.8 m で、南の大堰川に向かって緩やかに傾斜していく。調査地は、現在の大堰川北岸から北にわずか約 10 m 離れた地点にも関わらず、安定した厚い堆積がみられる。室町時代の整地層は 5 層を検出しており、当地が継続して土地利用されていたことがわかった。また、室町時代の整地層上部には、平安時代後期の遺物が混入していた。今回の調査範囲内では平安時代後期の遺構は検出されておらず、整地される際に付近の平安時代の遺物を含む土砂が運ばれたものと考えられる。付近一帯の立会調査（註 7）では平安時代後期の溝や遺物包含層が広い範囲で検出されている。調査地は『山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図』との関係から芹川殿の推定地と考えられ、検出した鎌倉時代の整地層は、芹川殿に関連する遺構の可能性が推測できる。発掘調査^{註7}では鎌倉時代の濠など、周辺での立会調査^{註8}でも溝や石組井戸などを検出しており、鎌倉時代の遺構密度が高い地域である。

なお、『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』の記載では、古渡月橋の東側で北岸が川に突出している様子が見られる。今回の 2 区の調査成果である厚く堆積する整地層の存在と絵図に記載された突出部が合致する見方ができる。

（小檜山 一良）

註

- 1) 東京大学史料編纂所編「山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図」『日本荘園絵図聚影 二』[元徳元年（1329）作成 天龍寺所蔵]
- 2) 東京大学史料編纂所編「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」『日本荘園絵図聚影 二』[貞和 3 年（1347）作成 天龍寺所蔵]
- 3) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996 年

I 保存処理

- 4) 布川豊治『史跡・名勝嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004 - 11 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2005 年
- 5) 小檜山一良『史跡・名勝嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2006 - 9 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006 年
- 6) 久世康博「史跡・名勝嵐山」『平成 4 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995 年
- 7) 註 6 に同じ
- 8) 小檜山一良「嵯峨・嵐山地域の遺構分布」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 14 冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997 年

第2章 資料整理

I 保存処理

1 出土木製品の受入れ状況

今年度の木製品の受入れ状況は、合計 11 現場であった。内訳は平安京右京一条四坊五町(92HK-IU)、長岡京右京二条四坊・上里遺跡(03NG-ST001)、史跡二条離宮・平安宮廡院跡(04HK-KR002)、白河街区跡・岡崎遺跡(04KS-OJ001)、平安京右京北辺三坊八町(05HK-JI001)、平安京右京三条二坊十四町(05HK-RV001)、長岡京右京二条三坊九・十六町・一条大路、上里遺跡(05NG-EW003)、伏見城跡(05FD-FP001)、市内立合(05BB)、平安京右京三条一坊六町(06HK-UI020)、大藪遺跡(06MK-RK001)である。

2 木製品保存処理

3m含浸槽では今年度より保存処理を開始し、現在処理を継続中である。

3 金属製品の受入れと保存処理

今年度の金属製品の受入れ状況・処理は 6 現場であった。長岡京右京二条三坊九・十六町・一条大路、上里遺跡(05NG-EW003)は銅製「銚具」1点、淀城跡・長岡京左京九条三坊十三町(05NG-EW003)は煙管1点、史跡賀茂御祖神社(05RH-UU005)は鉄釘3点、平安京右京五条三坊十四町(06HK-QR001)は鉄製品2点・銅製品2点・銭貨1点、平安京右京六条四坊二町・西京極遺跡(06HK-QX001)は銅鏃1点、平安京左京三条四坊十二町(06BBHL107)は煙管2点・鉄製品3点、平安京左京八条四坊四・五町(06HK-BX001)は銅釘1点・銭貨26点、を受入れ処理をした。

4 ガラスの比重測定

今年度のガラス製品の受入れ状況は 6 現場であった。

平安京左京三条四坊十町・烏丸御池遺跡(03HK-RC002)は簪・玉・その他8点、平安京左京六条三坊五・六町(04HK-WD002)はワインボトル4点、史跡賀茂御祖神社(05RH-UU005)は玉3点、平安京右京六条四坊二町・西京極遺跡(06HK-QX001)は玉2点、平安京左京三条三坊九町(06HK-GD001)簪1点、平安京左京四条三坊十二町(06HK-HW001)鉢・その他7点をアルカリガラスと鉛ガラスに大別するため比重測定した。

5 骨の受入れと保存処理

今年度の骨の受入れ状況は 4 現場であった。平安京左京五条一坊一～四町(06HK-VH004)はウマ、平安京左京八条四坊四・五町(06HK-BX001)はウシなどの動物骨、平安京左京三条四坊十二町(06BBHL107)は貝類・魚類・小型哺乳類を受入れた。

6 遺構・遺物の取上げ

今年度は遺構・遺物の取上げを 2 現場で行った。平安京左京四条一坊十三町(06HK-YL001)は「草鞋」、平安京右京六条四坊二町・西京極遺跡(06HK-QX001)は銅鏃を取上げた。

7 土壌サンプルの洗浄・選別

今年度は 6 現場で行った。平安京右京三条二坊十四町(05HK-RV001)は平安時代の土坑、平安京左京二条二坊十町(05HK-NY001)は縄文晩期の流路、平安京左京三条三坊九町(06HK-GD001)は桃山～江戸初頭の濠の種実、平安京左京三条四坊十二町(06BBHL107)は江戸時代初頭のごみ穴の種実・動物・貝、平安京左京四条一坊十三町(06HK-YL001)・平安京左京四坊一十三町(06HK-YL001)は平安時代の池の種実を同定し、平安京右京一条三坊三町(06HK-JW001)・中臣遺跡(06RT-NK083)は層とブロックで始良 Tn 火山灰を確認した。

II 復元彩色

8 修羅の経過観察

今年度修羅大・小は、温湿度の管理をして経過観察している。経過観察で状態が安定しているので2006年12月25・26日、深草収蔵庫で修羅小を一般公開した。

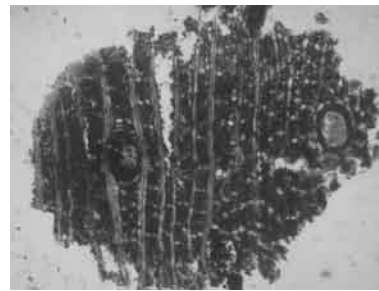
9 樹種同定

伏見城(05FD-FP001)の木棺・木製品361点の材質を樹種同定した。(図174参照)

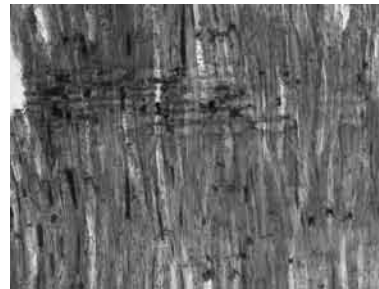
10 受託事業

今年度は、東京大学の漆器11点と広島県福山市沖合「沈没船埋没地点遺跡」引き揚げ遺物の銅製品・鉄製品・木製品など約500点の処理を開始した。

(竜子 正彦)



木口×40



柁目×100



板目×100

図175 05FD-FP001 土坑293・317 数珠(唐木)
樹種断面写真

II 復元彩色

今年度の復元彩色は総数 401 点で、内訳は下表の通りである。発掘調査概報と国庫補助概報の為の復元が主なものである。このうち、左京六条三坊五町跡出土の大型の甕は、信楽・常滑・備前産が計 7 点あった。展示の為の復元は、京都市考古資料館・特別展『都のうつわ』、展示貸出用では、二条城「築城 400 年記念展示・収蔵館」、京都アスニー「平安京創生館」ほかの計 63 点がある。また、受託業務として、長岡京市および宮津市の出土遺物を復元彩色した。(出水みゆき)

表7 復元彩色一覧表

内容	調査記号ほか	点数
調査概報	05HK-NY	51
調査概報	02HK-HX	47
調査概報	04KS-OJ001	39
調査概報	05NG-EW3	34
調査概報	05RH-KK011	26
調査概報	04HK-WD2	19
調査概報	05UZ-SN3	18
調査概報	06HK-JW1	16
調査概報	05HK-RV001	12
調査概報	06NG-NS5	11
調査概報	06HK-UI20	10
調査概報	05RT-HG10	6
調査概報	06HK-BW1	6
調査概報	05RH-UU005	3
調査概報	05HK-YK1	2
調査概報	06HKL-RW1	1
国庫補助	06BB-HL140	1
展示	考古資料館 特別展	30
展示	考古資料館 常設展	1
貸出・展示	二条城 展示・収蔵館	17
貸出・展示	京都アスニー	14
貸出・展示	京都国立博物館	1
受託	長岡京市	33
受託	宮津市 / 成相寺出土品	3
	合計	401 点



図 176 大甕の石膏復元



図 177 大甕の彩色復元

第3章 普及啓発事業等報告

I 普及啓発事業報告

1 京都発掘30年事業の開催

(当財団設立30周年記念事業)

① 遺跡めぐり

日時 平成18年10月28日(土)

場所 京都アスニー ～ 考古資料館

(「平安宮と聚楽第を歩く」：スタンプラリー)

参加者 約400名

② 講演とシンポジウムの開催

日時 平成18年11月18日(土)

場所 京都アスニー 4階ホール

講師 橋本義則氏、國下多美樹氏、網伸也

演題 「京都発掘30年『長岡京と平安京』」

参加者 約350名

③ ブックレットの発行

「京都発掘30年 京都の遺跡」

同日開催の講演会・写真展で配布

④ 写真展の開催

日時 平成18年11月18日～12月3日

場所 京都アスニー

内容 写真展「写真で見る京都発掘30年」

写真110点、遺物140点を展示

⑤ 小・中学生を対象とした「土器づくり」

日時 平成18年8月10日・11日

場所 京都市東山青少年活動センター

内容 土器づくり・火おこしの体験

参加者 47名

⑥ 修羅(小)の一般公開

日時 平成18年11月25日・26日

場所 深草収蔵庫

参加者 180名

2 現地説明会の開催、他

(1) 平成18年6月10日 「平安京右京五条三坊十
四町跡」

参加者:350名

(2) 平成18年8月26日 「平安京右京六条四坊八町
跡」

参加者:250名

(3) 平成18年9月2日 「長岡京右京二条三坊八町・
九町、右京一条四坊十四町」

参加者:150名

(4) 平成18年9月9日 「平安宮正親司跡」

参加者:260名

(5) 平成18年11月18日 「平安京右京一条三坊三
町跡」

参加者:220名

(6) 平成19年1月13日 「平安京左京四条四坊三町
跡」

参加者:140名

(7) 平成19年2月3日 「平安京左京六条四坊三町
跡」

参加者:350名

(8) 平成19年2月24日 「長岡京跡・上里遺跡」

参加者:430名

(広報発表のみ)

(1) 平成18年4月20日 「山科本願寺跡」(9社)

(2) 平成18年10月19日 「平安京右京六条四坊八
町跡」(8社)

(3) 平成18年11月9日 「烏丸綾小路遺跡」(8社)

(4) 平成18年11月30日 「西本願寺境内」(本願寺
主催)

(5) 平成19年2月5日 「平安京右京六条四坊二町
跡・西京極遺跡」(6社)

3 報告書の刊行

(1) 平成18年度 京都市内遺跡発掘調査報告

- (2) 平成18年度 京都市内遺跡立会調査報告
- (3) 平成18年度 京都市内遺跡分布調査報告
- (4) 平成16年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報
- (5) 発掘調査概報 平安京右京二条四坊十五町跡
- (6) 発掘調査概報 長岡京左京一条四坊九町跡
- (7) 発掘調査概報 史跡旧二条離宮(二条城)・平安京冷然院跡
- (8) 発掘調査概報 史跡・名勝 嵐山
- (9) 発掘調査概報 上里北ノ町遺跡
- (10) 発掘調査概報 山科本願寺
- (11) 発掘調査概報 長岡京右京二条三坊九・十六町跡、上里遺跡
- (12) 発掘調査概報 相国寺旧境内
- (13) 発掘調査概報 平安京右京七条二坊四町(西市)跡
- (14) 発掘調査概報 白河街区跡・岡崎遺跡
- (15) 発掘調査概報 平安京左京八条三坊三町跡
- (16) 発掘調査概報 平安京右京六条一坊・左京六条一坊跡
- (17) 発掘調査概報 平安京右京七条一坊九町跡
- (18) 発掘調査概報 平安京右京一条三坊三町跡
- (19) 発掘調査概報 平安京右京三条二坊十一町
- (20) 発掘調査概報 長岡京右京一条四坊十四・十五町跡
- 4 「リーフレット京都」(No. 207～No. 218)の発行
- ・No. 207 発掘ニュース 73 「京町家の境—尚徳校以前の姿—」
- ・No. 208 土器・瓦 25 「絵高麗—尚徳校跡から出土した鉢—」
- ・No. 209 発掘ニュース 74 「白河街区跡の調査」
- ・No. 210 発掘ニュース 75 「楊梅室町西南頬之倉」
- ・No. 211 仏教・寺院 8 「本能寺の変遷」
- ・No. 212 仏教・寺院 9 「本能寺—町名の変遷—」
- ・No. 213 考古アラカルト 37 「聚楽第跡—天下人の象徴—」
- ・No. 214 遺跡を訪ねて 9 「聚楽第を歩く」
- ・No. 215 発掘ニュース 76 「山科本願寺のお宝」
- ・No. 216 考古アラカルト 38 「坂本龍馬の「いろは丸」—第4次調査から—」
- ・No. 217 考古アラカルト 39 「特別展示 都のうつわ」
- ・No. 218 発掘ニュース 77 「発掘成果をふりかえって2006」
- 5 全国埋蔵文化財法人連絡協議会への参加
- (1) 平成18年6月8・9日
於：山口県(ホテルニュータナカ)
「第27回全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会」
次 長 小西 一郎
- (2) 平成18年6月16日
於：向日市(向日市文化資料館)
「平成18年度第1回近畿地区OA委員会」
調査業務 宮原 健吾
- (3) 平成18年8月11日
於：向日市(向日市中央公民館)
「平成18年度第1回(第33回)近畿ブロック
主担者会議」
調査課長 鈴木 久男
担当係長 吉崎 伸
- (4) 平成18年10月4日
於：和歌山市(和歌山県民文化会館)
「第12回近畿ブロック埋文研修会」
担当係長 辻 純一
調査研究技師 西森 正晃
調査研究技師 柏田 有香
- (5) 平成18年11月2日
於：長岡京市(中央生涯学習センター)
「第21回近畿ブロック事務担当者会議」

1 普及啓発事業報告

総務係長 金島 恵一

主任 佐藤 正典

(6) 平成18年11月17日

於：八尾市（八尾市文化財調査研究会）

「平成18年度第2回近畿地区OA委員会」

主任 宮原 健吾

(7) 平成19年2月9日

於：長岡京市（中央生涯学習センター）

「平成18年度第2回近畿ブロック主催者会議」

調査課長 鈴木 久男

館長 長宗 繁一

(8) 平成19年2月23日

於：生駒市（元興寺文化財研究所）

「平成18年度第3回近畿地区OA委員会」

主任 宮原 健吾

(9) 平成19年2月23日

於：八尾市（八尾市文化会館）

「平成18年度近畿ブロック会議」

次長 小西 一郎

総務係長 金島 恵一

8 ホームページアクセス件数

今年度のホームページへのアクセス件数は、26、863件であった。

6 その他研究会等への派遣

(1) 平成18年4月～19年3月（毎月開催）

於：向日市（京都府埋文調査研究センター）

「長岡京連絡協議会」

統括主任 上村 和直、他

(2) 平成18年7月7～9日

於：京都御苑

「文化財庭園保存技術者協議会平成18年度総

会・第1回研修会」

調査課長 鈴木 久男

7 講師等の派遣

（表8参照）

表8 講師等派遣一覧表

No.	件名	機関名	氏名	日時	備考
1	非常勤講師の委嘱（考古学実習Ⅰ・Ⅲ）	奈良大学	辻 純一	18.4.1.～18.9.30	1週4時間担当（火曜日）
2	非常勤講師の委嘱（考古学調査実習Ⅰ）	立命館大学	高橋 潔	18.4.1.～19.3.31	1週2時間担当（水曜日）
3	非常勤講師の委嘱（考古学実習ⅠC）	立命館大学	山本 雅和	18.4.1.～19.3.31	1週2時間担当（水曜日）
4	非常勤講師の委嘱（考古学実習A）	帝塚山大学	上村 和直	18.4.1.～18.7.31	1週2時間担当（木曜日）
5	非常勤講師の委嘱（日本考古学A・B）	近畿大学	網 伸也	18.4.1.～19.3.31	1週2時間担当（土曜日）
6	非常勤講師の委嘱（考古学実習Ⅰ・Ⅱ）	花園大学	南 孝雄	18.4.1.～19.3.31	1週2時間担当（土曜日）
7	非常勤講師の委嘱（日本史特論）	府立朱雀高等学校	辻 裕司	18.4.1.～19.3.31 19:40～21:10	金曜日 1週2時間担当（金曜日）
8	非常勤講師の委嘱（古代文化論）	京都造形芸術大学	前田 義明	18.4.1.～19.3.31	通信教育のため出講せず
9	非常勤講師の委嘱（古代文化論）	京都造形芸術大学	丸川 義広	18.4.1.～19.3.31	通信教育のため出講せず
10	出前授業（総合学習）	市立勸修小学校	辻 純一, 吉崎 伸, 他	18.4.21	6年生4クラス120名
11	出前授業（総合学習）	市立大宅小学校	辻 純一, 吉崎 伸, 他	18.5.19	6年生4クラス150名
12	出前授業（総合学習）火起こしの体験	市立陵ヶ岡小学校	辻 純一, 吉崎 伸, 他	18.6.27	希望者30名
13	出前授業（総合学習）山科本願寺等学校周辺の遺跡紹介	市立西野小学校	辻 純一, 吉崎 伸, 他	18.10.18	6年生2クラス
14	出前授業（総合学習）火起こしの体験	市立陵ヶ岡小学校	辻 純一, 吉崎 伸, 他	18.10.18	2～6年生約30名
15	出前授業（総合学習）火起こし・石器切れ味の体験	市立陵ヶ岡小学校	辻 純一, 吉崎 伸, 他	19.2.6	2～6年生約30名
16	出前授業土器作り・火起こし体験	市立紫野小学校	辻 純一, 吉崎 伸, 他	19.2.19	杉の子学級7名
17	みやこ子ども土曜塾発掘体験	市教委家庭地域教育支援課	辻 純一, 吉崎 伸, 他	18.11.8	
18	みやこ子ども土曜塾発掘体験（城巽中学現場）+火起こし体験	市教委家庭地域教育支援課	辻 純一, 吉崎 伸, 他	19.3.25	親子25組
19	平成18年度教養講座「平安宮を歩く」の講師	京都市上京老人福祉センター	永田 信一	18.5.29・6.3	約25名を対象とした講義、見学会
20	「市民大学講座」の講師	帝塚山大学考古学研究所	鈴木 久男	18.7.8	
21	「歴史探訪 考古遺跡ツアー」の講師	西京区30周年記念事業実行委員会	丸川 義広	18.10.22・11.12	
22	池の沢遺跡（庭園）	高島市教育委員会	鈴木 久男	18.10.31	
23	文化財講座の講師	（財）和歌山県文化財センター	上村 和直	18.11.11	
24	埋蔵文化財にかかわる卓話	京都朱雀ロータリークラブ	永田 信一	18.12.27	
25	「長岡京遷都一桓武とその時代」の資料調査	国立歴史民俗博物館	網 伸也	19.1.14	
26	「古代陶磁器調査課程」の講師	奈良文化財研究所	平尾 政幸	19.2.6	
27	「第45回木津町ふれあい文化講座」の講師	木津町教育委員会	上村 和直	19.1.27	
28	「スライドでみるおとくにの発掘」の講師	乙訓文化財事務連絡協議会	南出 俊彦	19.2.25	
29	FM845「ワカバン！」出演（ラジオ番組）	（株）京都リビングFM845	吉崎 伸 他	19.2.22	（月1回程度）

II 京都市考古資料館状況

1 京都市公の施設の指定管理者への指定

京都市の条例に基づき、平成18年度から平成22年度までの5年間、当財団が京都市考古資料館の指定管理者に指定され管理運営を行うこととなった。

2 特別展示の実施

ア 特別展示「発掘された瓦窯」

(17年度から継続～18.8.29)

京都市内には多数の瓦窯跡があり、これらの瓦窯跡は昭和51年当財団の設立以来多数の瓦窯跡の発掘調査を実施し、古代寺院や平安京に供給された瓦が多数出土し、成果をあげている。今回、窯跡の資料を一堂にする特別展示「発掘された窯跡」を開催した。展示では、15箇所、計36基の窯跡を扱い、窯跡の写真パネルと出土瓦を展示し、窯跡との関係がわかるように展示を行った(展示遺物 226点 写真パネル 35枚)

イ 特別展示「京都発掘30年～都のうつわ～」

(18.10.28～継続中)

当財団の設立30周年を記念し、30年間に及ぶ発掘調査の成果を紹介する特別展示を開催した。展示では、京都の歴史を語るうえで重要な長岡京・平安京の時代から江戸時代までの土器約2,400点を時期別に展示することとした。また、30年間に発掘調査を実施した主要遺跡約100箇所を写真パネル32枚で展示するとともに、高倉小学校の発掘調査で出土した遺構断面の土層はぎ取りパネルも展示した。なお、展示にあたっては、正親小学校の協力を得た。

3 小・中学生夏期教室の開催

期 間 平成18年8月10日・11日

10時～12時

会 場 東山青少年活動センター

対 象 5・6年生とその保護者及び中学生

第2日 9:30～12:00

内 容 両日とも瓦の拓本体験や型を使った「泥めんこ」づくりを実施

参加者 47名

8月10日 5・6年生及び保護者

28名(15名・大人13名)

8月11日 中学生と一部小学生及び保護者

19名(6名・大人13名)

4 文化財講座の開催

平成18年度の文化財講座は、発掘調査現場報告のほか、当財団が設立30年を迎えたため、その記念の連続講座「京都発掘30年」を開催し、30年間の発掘調査から見た京都の歴史を紹介するとともに、記念の遺跡めぐりに関する講座や展示の解説に加え5回にわたり開催した。(表9参照)

※申込者総数940名 受講者総数 739名

5 情報コーナーにおける普及啓発

1階 情報コーナーにおいて、リーフレット京都や各地の博物館、資料館の展示案内やポスターを配布及び掲示。また、パソコンによる情報展示では、クイズや「茶陶の世界」「平安京ランド」、「文化財講座解説」などのプログラムを実施している。また、平成18年度から情報コーナーのパソコン機器を新たに2台追加し、5台体制とし充実を図った。新規機器では、京都市内の発掘調査や出土品をスライドで紹介しているさらに、レーザーディスク及びビデオによる展示資料・遺跡などの紹介を行うほか、次の参考資料を整備し利用に供している。

ア 考古学・日本歴史関係の図書

イ 府下及び全国の主な博物館施設等の展示図録、パンフレット等

ウ 発掘調査、現地説明会の資料及び発掘調査関連記載の新聞記事

表9 文化財講座一覧表

回数	年月日	演 題	講 師 名	参加人数
第180回	18.4.22	発掘成果をふりかえって 2005	調査課長 鈴木久男	49
		補足説明 「山科本願寺跡」	調査業務 柏田有香	
第181回	18.5.27	「高陽院」の発掘調査	調査業務 平尾政幸	58
第182回	18.6.24	連続講座「京の文化財シリーズ」第6回「京(みやこ)の城」	京都市文化財保護課 馬瀬智光	71
第183回	18.7.22	大山崎瓦窯跡の発掘調査	大山崎町教委 林 亨	55
第184回	18.9.23	連続講座「京都発掘30年」第1回「平安京以前」	調査業務 高橋 潔	119
第185回	18.10.28	連続講座「京都発掘30年」第2回「遺跡めぐり～平安宮と聚楽第をめぐる～」	資料館業務 永田信一	176
第186回	18.12.16	連続講座「京都発掘30年」第3回「平安京から中世京都へ」	調査業務 山本雅和	91
第187回	19.2.24	連続講座「京都発掘30年」第4回「近世の京都～公家町と町屋～」	調査業務 内田好昭	82
第188回	19.3.24	連続講座「京都発掘30年」第5回「特別展示～都のうつわ～」列品解説	資料館業務 原山充志	38
			合計参加人数	739
※ 申込み多数につき第185回～第187回は、抽選を実施。				
※ 会場は第188回の考古資料館を除き、京都アスニーで開催。				
※ 第184回～第187回については、(財)京都市生涯学習振興財団と共催で開催。				

表10 新規貸出一覧表

イ 新規貸出分 20件 1,282点				
No	件 名	貸 出 先	貸 出 期 間	点 数
1	特別展「つちの中の京都 備前との出会い」	(財)岡山県備前陶芸美術館	18.4.14～18.5.17	377
2	閑院宮邸跡収納展示室にて展示	環境省環境局京都御苑管理事務所	18.4.1～19.3.31	37
3	第54回ミニ企画展「大津の仏教文化7 塑像と仏」	大津市歴史博物館	18.4.15～18.6.4	1
4	「新安船発掘30周年記念特別展」	国立海洋遺物展示館	18.9.7～18.12.14	10
5	特別展「茶道具拝見～出土品から見た堺の茶の湯～」	堺市博物館	18.8.29～18.11.13	54
6	「高取焼展～出土品が語る筑前陶器のはじまり～」	直方市教育委員会	18.8.1～18.11.30	77
7	平成18年度秋季特別展「信長の城・秀吉の城～織豊系城郭の成立と展開～」	滋賀県立安土城考古博物館	18.9.20～18.12.11	25
8	「京焼～みやこの意匠と技～」	京都国立博物館	18.10.17～18.11.26	259
9	平成18年度特別展「水にうつる願い」	大阪府立狭山池博物館	18.9.20～18.12.8	15
10	「飛騨の匠と木工道具の変遷史」	岐阜県ミュージアムひだ	18.8.15～18.9.17	19
11	京都市立勸修小学校校内にて展示	京都市立勸修小学校	18.8.25～19.3.31	17
12	開館一周年記念特別展「赤と黒の芸術～楽茶碗～」	三井記念美術館	18.9.16～18.11.12	39
13	平成18年度企画展「江戸時代のやきもの～生産と流通～」	(財)瀬戸市文化振興財団	18.11.29～19.2.16	19
14	京都市平安京創生館にて展示	(財)京都市生涯学習振興財団	18.10.6～19.3.31	102
15	「平安京と紀伊～平安時代から室町時代の土器～」	(財)和歌山県文化財センター	18.10.6～18.12.25	116
16	平成18年度博物館実習「十二月展『KAZARI～装身への想いと歩み～』」	龍谷大学	18.11.27～18.12.5	1
17	「志野と織部～風流なるうつわ～」	出光美術館	19.2.7～19.4.22	63
18	「近世 都の工芸～京の美意識と匠の世界～」	京都府京都文化博物館	19.2.20～19.4.13	5
19	第19回織部の日特別展「ポスト織部の時代～元和・寛永の茶陶」	土岐市美濃陶磁歴史館	19.2.19～19.5.15	30
20	ミニ企画展「知らなかった京都の戦争」	立命館大学国際平和ミュージアム	19.1.10～19.2.19	16

表 11 博物館実習受入れ一覧表

No	大学名	人数	期間	内容
1	京都文教大学	1	18.8.29 ~ 9.1	京都市の埋蔵文化財について、資料館業務、埋蔵文化財写真撮影や保存処理業務等についての講義及び実習
2	京都教育大学	2		
3	京都女子大学	2		
4	京都造形芸術大学	2		
5	立命館大学	1		
6	ノートルダム女子大学	1		
7	京都橘大学	1		
8	京都精華大学	1		
9	京都文教大学	1	18.9.5 ~ 9.8	
10	京都教育大学	1		
11	京都女子大学	1		
12	京都造形芸術大学	2		
13	立命館大学	1		
14	京都橘大学	1		
15	京都精華大学	2		
16	神戸大学	3		
17	京都府立大学	31	18.5.10	
	合計人数	54		

表 12 市内中学生チャレンジ体験受入れ一覧表

No	学校名	人数	日時	内容
1	小栗栖中学校	3	18.5.23 ~ 26	京都市内で実施している、埋蔵文化財の発掘調査事業につき、現場での発掘調査から、その後の出土遺物の整理作業及び考古資料館での展示公開までの一連の作業内容を体験。(1) 発掘調査の体験（発掘調査の解説、実際の発掘調査現場での調査体験）(2) 出土遺物の整理作業の体験（出土遺物の水洗い、拓本作業や保存処理作業など）(3) 考古資料館業務の体験（学校内の発掘調査や京都の遺跡の解説、展示見学、ワークシート作りなど）
2	向島東中学校	2	18.6.6 ~ 9	
3	近衛中学校	3	18.7.4 ~ 7	
4	春日丘中学校	4		
5	西賀茂中学校	3		
6	蜂ヶ岡中学校	5	18.9.12 ~ 15	
7	周山中学校	2	18.11.7 ~ 10	
8	加茂川中学校	2		
9	太秦中学校	2		
10	朱雀中学校	2	18.11.14 ~ 17	
11	下鴨中学校	4		
12	大枝中学校	3	19.1.16 ~ 19	
13	山科中学校	3	19.1.30 ~ 2.2	
14	桂中学校	4		
15	洛南中学校	1	19.2.6 ~ 9	
16	松原中学校	5		
計		48	男子 40 名・女子 8 名	

※ 実施期間は、学校休日や資料館事業実施日を除く通年とし、受入については教育委員会を通じての受入れ。

※ なお、実施日数は原則 5 日間であるが、通常の実施曜日が月曜日～金曜日の学校が大半であり、月曜日が当館の休館日と重なるため、当日を学校での事前学習日とし、テーマを与え体験にあたっての下調べに当てている。

6 考古資料の貸出

ア 継続貸出分 31 件 734 点（前年度以前からの継続貸出分）

イ 新規貸出分 20 件 1282 点（表 10 参照）

7 博物館学芸員課程実習生の受入れ

（表 11 参照）

8 平成 18 年度京都市立中・総合養護学校「生き方探究・チャレンジ体験」の受入れ

表 13 教育機関の学外授業等の受入れ一覧表

No	機 関 名	人 数	日 時	内 容
1	同志社大学	21	18.4.18	展示解説
2	京都造形芸術大学	24	18.4.27	展示解説
3	静岡県末広中学校	4	18.5.17	修学旅行体験学習展示解説
4	二条城北小学校	93	18.5.18	校内の発掘調査や周辺の遺跡についての説明、遺物見学
5	京都女子大学	40	18.5.20	展示解説
6	京都工芸繊維大学	30	18.6.24	展示解説
7	同志社大学	12	18.7.6	展示解説
9	朱雀高校	8	18.10.13	展示解説
10	京都女子大学	20	18.11.11	館概要及び展示解説
11	京都女子大学	60	18.12.2	展示解説
12	立命館大学	85	18.12.9	館概要及び展示解説
13	朱雀第二小学校	11	19.2.11	展示見学
14	第四錦林小学校オリエンテーリング	50	19.3.2	展示見学
計		458		

表 14 その他機関への協力等一覧表

No	件 名	機 関 名	日 時	備 考
1	京都新聞「クイズみやこの歴史」連載	京都新聞社	通 年	隔週掲載
2	第4回西陣伝統文化祭「千両ヶ辻」への協力	伝統文化祭「西陣千両ヶ辻」実行委員会	18.9.23	
3	京都市平安京創生館開館記念事業への協力	(財)京都市生涯学習振興財団	18.10.6	シンポジウム「よみがえる～平安京のこころとかたち～」長宗館長出講
4	2006「西陣夢まつり」～街中ギャラリー～への協力	西陣織工業組合	18.10.20～22	
5	展示遺物等の見学・資料調査	国立歴史民俗博物館	19.1.14	企画展示「長岡京遷都～桓武とその時代～(仮称)」プロジェクト委員会
6	専門研修「古代陶磁器調査課程」研修生受入	奈良文化財研究所	19.2.6	16名受入
7	平安京創生館オープン記念特別講座への講師派遣	(財)京都市生涯学習振興財団	19.2.10	資料館業務 永田 派遣
8	京都アスニー・セミナーへの講師派遣	(財)京都市生涯学習振興財団	19.3.2	資料館業務 原山 派遣

京都市教育委員会の中学生を対象とした、「生き方探求・チャレンジ体験」事業を受入れを実施した。なお、17年度から文部科学省が提唱する「キャリア教育」の一環として、中学校を中心に5日間以上の職業体験が全国で実施されたことから、チャレンジ体験も原則5日間に拡充されたため、これに沿った日数で実施している。(表 12 参照)

14 参照)

9 教育機関の学外授業等の受入れ

小学校や大学等の学外授業の受入れを行った。(表 13 参照)

10 その他機関への協力等

京都新聞「クイズみやこの歴史」等を実施した。(表

11 関係機関等への協力

施設見学や展示解説の受け入れを実施した。(表 15 参照)

12 入館状況

(表 16 参照)

III 組織構成

表 15 関係機関等への協力一覧表

No	件名	機関名	日時	人数	備考
1	展示解説	NPO平安京	18.4.15	21	「794 うぐいす平安を歩こう」
2	展示解説	京都歴史散歩の会	18.5.12	25	
3	展示解説・遺跡めぐり	上京歴史探訪館	18.5.13	16	
4	展示解説	文字文化研究所	18.5.17	23	
5	展示解説・遺跡めぐり	右京老人福祉センター	18.5.23	15	
6	展示解説・遺跡めぐり	上京老人福祉センター	18.6.3	25	
7	展示解説	NHK大阪文化センター	18.6.3	7	
8	遺跡・展示解説	じゅらくだい倶楽部	18.6.11	21	
9	展示解説	瑞浪陶磁資料館友の会	18.6.25	25	
10	遺跡・展示解説	NPO平安京	18.7.15	14	「ジュニア平安京歴史講座」
11	展示解説	朝日カルチャー神戸	18.7.15	26	
12	展示解説	イナンナ関西支部	18.7.22	15	
13	展示解説・遺跡めぐり	右京老人福祉センター	18.7.25	16	
14	展示解説・遺跡めぐり	上京老人福祉センター	18.11.7	25	
15	展示解説	NPO平安京	18.11.15	12	「宇治市広野中学校ボランティア訪問」
16	展示解説・遺跡めぐり	右京老人福祉センター	18.11.22	15	
17	展示解説	NPO平安京	18.11.26	22	「平安京を歩こう」
18	展示解説	西京老人福祉センター	18.12.22	13	
19	展示解説	西京老人福祉センター	19.1.11	15	
20	展示解説	若樹会	19.1.14	55	
21	遺跡・展示解説	歴史を楽しむ会	19.2.18	53	
22	展示解説	宇治観光ボランティアガイドクラブ	19.2.21	28	
23	展示解説	大阪市民大学センター	19.3.11	42	
24	遺跡・展示解説	NHK文化センター徳島	19.3.15	26	
計				555	

※ 受入れにあたっては、遺跡めぐりや展示見学などに対応した解説を実施している。

表 16 入館者数一覧表

月	開館日数	一般			団体			合計	一日平均
		12才以上	12才未満	小計	12才以上	12才未満	小計		
	日	人	人	人	人	人	人	人	
4	26	1,468	62	1,530	112	3	115	1,645	63.3
5	26	1,383	62	1,445	182	88	270	1,715	66.0
6	26	1,253	56	1,309	193	0	193	1,502	57.8
7	26	1,336	93	1,429	81	0	81	1,510	58.1
8	27	1,327	147	1,474	41	15	56	1,530	56.7
9	26	1,270	78	1,348	257	0	257	1,605	61.7
10	26	1,470	53	1,523	204	0	204	1,727	66.4
11	26	1,709	51	1,760	67	0	67	1,827	70.3
12	23	1,188	39	1,227	236	0	236	1,463	63.6
1	24	1,393	49	1,442	55	0	55	1,497	62.4
2	24	1,723	59	1,782	204	0	204	1,986	82.8
3	27	1,626	48	1,674	111	45	156	1,830	67.8
計	307	17,146	797	17,943	1,743	151	1,894	19,837	64.6

※ 参考 平成17年度 開館日数 307日 入館者数 19,430人 (一日平均 63.3人)

Ⅲ 組織構成

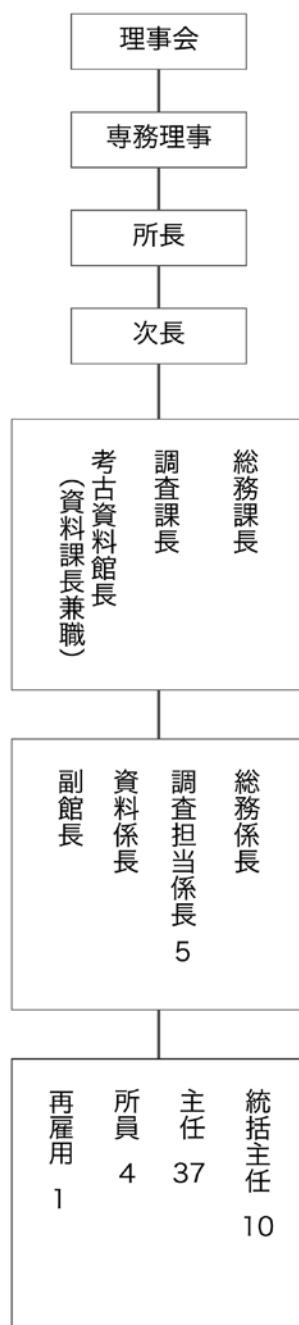
(平成19年3月31日現在)

表17 役員・評議員名簿

[役員]		[評議員]	
理事長	福德 久雄	評議員	五十川 伸矢
専務理事	吉田 正和	評議員	岡野 路子
理事	尼崎 博正	評議員	糟谷 範子
理事	井上 満郎	評議員	鈴木 眞咲
理事	上田 正昭	評議員	伊達 仁美
理事	西川 幸治	評議員	戸倉 毅
理事	村井 康彦	評議員	西山 良平
理事	和田 晴吾	評議員	水口 重忠
監事	川脇 純一	評議員	山内 喜美子
監事	廣瀬 伸彦	評議員	山岸 吉和

(アルファ順)

表18 組織構成表



うち 8名 (財)大阪府文化財センターへ派遣
1名 (財)和歌山県文化財センターへ派遣

平成 18 年度
財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報

発行日 2009 年 2 月 20 日

編 集
発 行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 (有) 関西プロセス